

松山市埋蔵文化財調査年報 VIII

平成 7 年度

1996

松山市教育委員会
(財)松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

松山市埋蔵文化財調査年報 VIII

平成 7 年度

1996

松山市教育委員会
(財)松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター



卷頭図版 I 穹穴式石室（5世紀末 桧山峠7号墳）



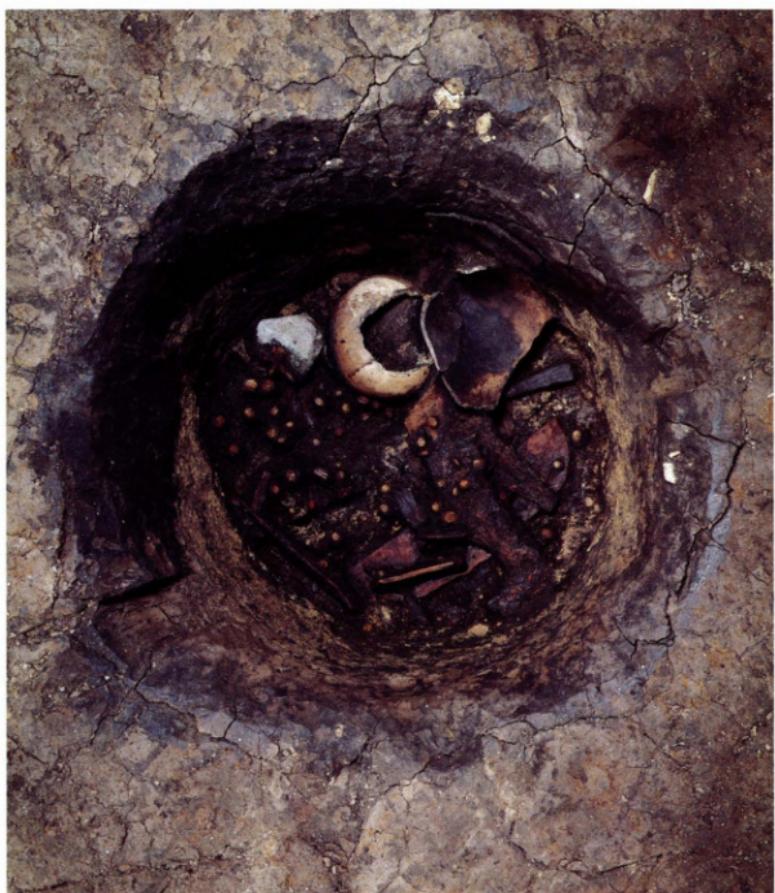
卷頭図版 2 横穴式石室（7世紀初頭 東野お茶屋台遺跡5次調査地）



卷頭図版 3 横穴式石室（古墳時代後期 大峰ヶ台遺跡 9次調査地）



卷頭図版 4 竪穴式住居址と掘立柱建物址（古墳時代後期 来往町遺跡 7次調査地）



卷頭図版 5 貯藏穴（弥生時代末 姫ノ口遺跡 8次調査地）

序

松山市には数多くの貴重な文化遺産が残っています。財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターでは年々増加する開発事業によって失われる遺跡については、事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は平成7年度に埋蔵文化財センターが主体となり、松山市域において、民間開発や公共事業を対象として実施した埋蔵文化財の発掘調査の概要報告と、松山市考古館が同年度行った展示会やシンポジウムなどの教育普及活動の概要をまとめた年次報告書です。

本年度も、占くは弥生時代前期から新しくは中近世に至る数多くの構造や遺物を発見しています。特に、釜ノ口遺跡8次調査地では、焼失住居の検出や住居の柱材が柱穴内から良好な状態で出土するなど、弥生時代後期の集落形態や住居構造の解明に貴重な資料を得ています。また、桧山峠7号墳では5世紀末に比定される竪穴式石室が検出され、松山平野における横穴式石室導入時期の解明に貴重な手がかりを得ることができました。さらに、東野お茶屋台遺跡5次調査地では、江戸時代の堤や排水施設がみつかったほか、重複する3基の石室が検出され、7世紀初頭の石室構造の解明に多大の成果をあげています。

このような貴重な資料が得られましたのも、関係各位の埋蔵文化財に対するご理解とご協力のたまものと感謝し、厚くお礼申し上げますとともに、今後とも、なお一層のご理解、ご協力のほどお願い申し上げます。

本書が、松山市民をはじめ、ひとりでも多くの方々に埋蔵文化財に対する知識の向上と調査研究のための資料としてご活用いただければ幸いです。

平成8年9月30日

財團法人 松山市生涯学習振興財團

理事長 田 中 誠 一

例　　言

1. 本書は、財団法人 松山市生涯学習振興財團 埋蔵文化財センターが、平成7年4月1日から平成8年3月31日までに実施した発掘調査の概要を収録し、また松山市考古館事業を含めた啓蒙普及事業等をまとめた年次報告書である。
2. 確認調査及び本格調査については、本書末尾の一覧表・付図にまとめた。
3. 写真は、遺物写真及び一部を除く発掘調査の遺構写真を大西朋子が、その他の写真は各調査員が撮影した。
4. 各調査の報告は、調査担当者が執筆することを原則とした。なお、編集及び調整は田城武志・宮内慎一が行った。
5. 遺構のうち表示記号で示したものは、以下のとおりである。
S A : 樋例、 S B : 構造式住居址、 挿立 : 揿立柱建物址、 S D : 溝、 S K : 土坑、
S E : 井戸、 S R : 自然流路、 S P : 柱穴、 S X : その他の遺構
6. 調査・刊行組織は次のとおりである。

調査・刊行主体（平成8年11月1日現在）

松　山　市　教　育　委　員　会　教　育　長	池田 尚郷
生　涯　教　育　部　部　長	三好 俊彦
次　　長	丹下 正勝
文　化　教　育　課　課　長	松平 泰定
(財)松山市生涯学習振興財團 理　事　長	田中 誠一
事務局長	池田 秀雄
事務局次長	丹下 正勝
埋　蔵　文　化　財　セ　ン　タ　ー　所　長	河口 雄三
次　　長	出所 延行
調　査　係　長	田城 武志
調　査　主　事	栗田 正芳（文化教育課職員）
調　査　員	栗田 茂敏、梅木 謙一、宮内 慎一、 高尾 和長、相原 浩二、山本 鮮一、 橋本 雄一、河野 史知、相原 秀仁、 山之内志郎、加島 次郎、水本 宛児、 小笠原善治、大森 一成、大西 朋子、 小玉亜紀子
松　山　市　考　古　館　館　長	岡崎 邦夫
学芸係長	徳永 幸紀
学　芸　員	武正 良浩

7. 整理作業の協力者は、次のとおりである。

池田学・友近志郎・山邊進也・志賀夏行・波多野恭久・宮藤和人・田丸竜馬・藤崎正記・八木幸徳・眞木潔・白石公信・酒井直哉・岩岡慎一・藤本數夫・広沢忠・坪内寛美・武田俊昭・後藤克也・栗林和孝・保島秀幸・本多好則・岡崎壯一・山村芳喜・安永由浩・野田昌弘・神直哉・小野敬通・川上貴之・広瀬食・三宅康孝・大谷雅之・黒木修二・金浦克俊・松尾潔・黒田竜弥・勝本将基・川野裕史・水口あをい・加島なおみ・丹生谷道代・新出寿美子・渡部英子・徳田弘子・西川千秋・青野茂子・松本美代子・水口美津子・岡本邦栄・金子育代・岡市美紀・喜安咲江・仙波千秋・仙波ミリ子・高尾久子・東山里美・松下郁子・石丸由利子・小田裕美・定成登志子・矢野瑞枝・武市まゆみ・関正子・荻野ちよみ・吉井信枝・矢野久子・多知川富美子・山本早苗・猪野美喜子・乘松和枝・眞木雅子・白石あさか・村上真由美・岩本美保・木下奈緒美・森田利恵・松本美知子・越智令子・田嶋真理・中村紫・宮内真弓・古角優子・山下満佐子・平岡直美・村上幾子・渡部明日香・伊藤みわこ・竹内真琴・中平久美子・長岡千尋・渡辺いすみ・山下純代・福島利恵・豊田直美

8. ご指導・ご協力をいただいた先生方は、次のとおりである。(敬称略)

上原真人(京都大学)／沢田正昭(奈良国立文化財研究所)／山中敏史(奈良国立文化財研究所)／猪熊兼勝(奈良国立文化財研究所)／松本修自(東京国立文化財研究所)／阿部義平(国立歴史民族博物館教授)／岡村道雄(文化庁記念物課)／下條信行(愛媛大学教授)／松原弘宣(愛媛大学教授)／田崎博之(愛媛大学助教授)／村上恭通(愛媛大学助教授)ほか

9. ご指導・ご協力をいただいた機関は、次のとおりである。

奈良国立文化財研究所／(株)古環境研究所／(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター ほか

本文目次

平成7年度 松山市埋蔵文化財調査概要

太山寺経田遺跡3次調査地	2
谷町遺跡	6
瀬戸風峠遺跡（B・C区）	10
人峰ヶ台遺跡9次調査地（4区）	12
古照ゴウラ遺跡5次調査地	18
溝辺2号墳	24
東野お茶屋台遺跡5次調査地	28
梅味高木遺跡4次調査地	36
桑原田中遺跡3次調査地	40
釜ノ口遺跡8次調査地	44
石井幼稚園遺跡2次調査地	48
北久米淨蓮寺遺跡5次調査地	52
乃万の裏遺跡2次調査地	56
久米高畠遺跡24次調査地	62
久米高畠遺跡25次調査地	68
来住町遺跡6次調査地	72
来住町遺跡7次調査地	76
下刈屋遺跡	82
檢山跡7号墳	86

松山市埋蔵文化財調査関係資料

平成7年度 松山市埋蔵文化財確認調査一覧	92
平成7年度 松山市埋蔵文化財本格調査一覧	102

自然科学分析報告	107
----------	-----

保存処理事業	115
--------	-----

平成7年度 啓蒙普及事業	117
--------------	-----

1. 展示活動
2. 教育普及活動
3. 広報・出版活動
4. 収集・保管活動
5. 施設の利用
6. 職員研修・会議
7. 資料の貸出

挿図・写真目次

巻頭図版 1 捄穴式石室（5世紀末 桧山峠7号墳）	
巻頭図版 2 捄穴式石室（7世紀初頭 東野お茶原台遺跡5次調査地）	
巻頭図版 3 捄穴式石室（古墳時代後期 大峰ヶ台遺跡9次調査地）	
巻頭図版 4 捄穴式住居址と掘立柱建物址（古墳時代後期 来住町遺跡7次調査地）	
巻頭図版 5 貯藏穴（弥生時代末 益ノ口遺跡8次調査地）	
太山寺経田遺跡3次調査地 2	
図1 調査地位置図（縮尺1:25,000）	写真1 A区完掘状況遠景（北より）
図2 調査地・トレンチ位置図（縮尺1:1,000）	写真2 B区完掘状況（西より）
図3 B区測量図（縮尺1:80）	
谷町遺跡 6	
図1 調査地位置図（縮尺1:25,000）	写真1 完掘状況（北西より）
図2 道構配置図（縮尺1:40）	写真2 S B 1（北より）
図3 S B 1測量図（縮尺1:40）	
瀬戸風峠遺跡（B・C区） 10	
図1 調査地位置図（縮尺1:25,000）	写真1 C区1号石棺〔手前〕と2号石棺（南より）
	写真2 B区瀬戸風峠1号墳墓道検出状況（西より）
大峰ヶ台遺跡9次調査地（4区） 12	
図1 調査地位置図（縮尺1:25,000）	写真1 調査地全景（北東より）
図2 調査地測量図（縮尺1:2,000）	写真2 大池東3号墳・4号墳（東より）
図3 大池東3号墳SK1出土遺物実測図 （縮尺1:3）	写真3 大池東2号墳（南西より） 写真4 大池東2号墳敷石検出状況（南西より）
古照ゴウラ遺跡5次調査地 18	
図1 調査地位置図（縮尺1:25,000）	写真1 A区完掘状況（南より）
図2 基本層位図（縮尺1:20）	写真2 A区SK2遺物出土状況（東より）
図3 遺構配置図（縮尺1:600）	写真3 A区SK1人骨・木棺出土状況（南西より）
図4 出土遺物実測図（縮尺1:3）	写真4 A区SE2井戸枠出土状況（西より） 写真5 B区SK3遺物出土状況（北より） 写真6 C区1号塚五輪塔出土状況（西より）

溝辺 2 号墳	24
図 1 調査地位置図（縮尺1：25,000）	写真 1 調査地全景（北より）
図 2 トレンチ測量図（縮尺1：400）	写真 2 2号墳石室内遺物出土状況（東より）
図 3 2号墳石室平面図（縮尺1：30）	
図 4 2号墳出土遺物実測図（縮尺1：3）	
東野お茶屋台遺跡 5 次調査地	28
図 1 調査地位置図（縮尺1：25,000）	写真 1 排水路001完掘状況（東より）
図 2 調査地測量図（縮尺1：600）	写真 2 調査地全景（西より）
図 3 11号墳石室平面図（縮尺1：40、1：8）	写真 3 11号墳と江戸時代の遺構（北北西より） 写真 4 11号墳第1石室床面検出状況（南より） 写真 5 石室の重複状況（南より） 写真 6 第1石室階段状石積みと第2石室墓道（南より） 写真 7 第3石室と第1・第2石室（北より）
梅味高木遺跡 4 次調査地	36
図 1 調査地位置図（縮尺1：25,000）	写真 1 S R 1 磚出土状況（北東より）
図 2 遺構配置図（縮尺1：160）	写真 2 第2面遺構完掘状況（北東より）
図 3 出土遺物実測図（縮尺1：4、1：3）	
桑原田中遺跡 3 次調査地	40
図 1 調査地位置図（縮尺1：25,000）	写真 1 完掘状況（北より）
図 2 基本層位図（縮尺1：40）	写真 2 調査区南側完掘状況（北より）
図 3 遺構配置図（縮尺1：150）	写真 3 捨立 1（西より）
釜ノ口遺跡 8 次調査地	44
図 1 調査地位置図（縮尺1：25,000）	写真 1 S B 2 貼り床検出状況（北より）
図 2 遺構配置図（縮尺1：300）	写真 2 S B 3 貼り床検出状況（北より）
図 3 S B 2 測量図（縮尺1：80）	
石井幼稚園遺跡 2 次調査地	48
図 1 調査地位置図（縮尺1：25,000）	写真 1 完掘状況（北より）
図 2 遺構配置図（縮尺1：100）	写真 2 S K 2 遺物出土状況（南より）
図 3 S K 2 測量図・出土遺物実測図 (縮尺1：20、1：4)	
北久米淨蓮寺遺跡 5 次調査地	52
図 1 調査地位置図（縮尺1：25,000）	写真 1 遺構検出状況（南東より）

図 2 遺構配置図（縮尺1：120）	写真 2 遺構完掘状況（東より）
	写真 3 S B 1 完掘状況（北より）
	写真 4 挖立 2～4 完掘状況（北より）
乃万の裏遺跡 2次調査地 56	
図 1 調査位置図（縮尺1：25,000）	写真 1 S X 5 遺物出土状況遠景（東より）
図 2 基本層位図	写真 2 S X 5 遺物出土状況近景（北西より）
図 3 遺構の変遷図（縮尺1：320）	写真 3 S D 10 検出状況（南より）
図 4 S X 5 出土遺物実測図（縮尺1：4）	写真 4 調査地全景（南北より）
久米高畠遺跡24次調査地 62	
図 1 調査位置図（縮尺1：25,000）	写真 1 調査地全景（北東より）
図 2 調査区位置図（縮尺1：1,500）	写真 2 S K 006・S K 011 上層堆積状況（南南東より）
図 3 S K 015測量図（縮尺1：40）	写真 3 土坑群完掘状況（南東より）
図 4 遺構配置図（縮尺1：200）	
久米高畠遺跡25次調査地 68	
図 1 調査位置図（縮尺1：25,000）	写真 1 遺構検出状況（東より）
図 2 遺構配置図（縮尺1：200）	
図 3 S D 1 測量図（縮尺1：100）	
来住町遺跡 6 次調査地 72	
図 1 調査位置図（縮尺1：25,000）	写真 1 完掘状況①（北西より）
図 2 遺構配置図（縮尺1：100）	写真 2 完掘状況②（南東より）
図 3 S X 1 測量図（縮尺1：40）	
図 4 S X 1 出土遺物実測図（縮尺1：2、1：3）	
来住町遺跡 7 次調査地 76	
図 1 調査位置図（縮尺1：25,000）	写真 1 1 区遺構検出状況（南東より）
図 2 遺構配置図（縮尺1：100）	写真 2 S B 004 完掘状況（南東より）
図 3 出土遺物実測図（縮尺1：3）	写真 3 2 区完掘状況（南東より）
	写真 4 2 区西部 S D 017 工具痕跡（南西より）
下苅屋遺跡 82	
図 1 調査位置図（縮尺1：25,000）	
図 2 遺構配置図（縮尺1：200）	
図 3 S B 2 測量図（縮尺1：100）	
図 4 S B 5 測量図（縮尺1：100）	

図 5 SX1 遺物出土状況図（縮尺1：40）	
図 6 出土遺物実測図（縮尺1：2）	
 検山峰7号墳	86
図1 調査地位置図（縮尺1：25,000）	写真1 墳丘完掘状況（北西より）
図2 墳丘測量図（縮尺1：200）	写真2 石室完掘状況（南より）
図3 石室実測図（縮尺1：30）	写真3 石室遺物出土状況（南より）
 自然科学分析報告	107
図1 辻町遺跡2次調査地の植物珪酸体分析結果	
図2 植物珪酸体の顕微鏡写真（1）	
図3 植物珪酸体の顕微鏡写真（2）	
図4 辻町遺跡2次調査地出土種実	
 保存処理事業	115
写真1 遺物の取り上げ状況（釜ノ口遺跡8次調査地）	
 啓蒙普及事業	117
写真1 特別展「瀬戸内の初期農耕」	
写真2 特別展記念シンポジウム	
写真3 釜ノ口遺跡8次調査地現地説明会	
写真4 特別展「瀬戸内の初期農耕」ポスター	
写真5 松山市横谷古墳より出土の考古資料	

平成 7 年度

松山市埋蔵文化財調査概要

タイ サン ジ キョウデン
太山寺経田遺跡 3次調査地

所在地 松山市太山寺町乙694-2 外
期 間 平成7年6月1日～
同年8月31日
面 積 2,500m²
担 当 山本健一・武正良浩



図1 調査位置図

経過 本調査は「No10 片廻遺跡（弥生時代）太山寺古墳群 片廻古墳群 素鷺神社」内における松山市農林土木課による農道新設工事に伴う事前調査である。平成7年4月4日～同年5月31日にかけて試掘調査を実施し、土坑状遺構1基、弥生土器、須恵器、石鐵等、弥生時代から近現代にかけての遺構及び遺物を確認した。そのため、当該地における遺跡の取扱について文化教育課と農林土木課（及び地権者）は協議を行い、開発工事によって失われる遺跡について、記録保存のために発掘調査を実施することとなった。

調査地は、松山平野北西部、太山寺丘陵の東側、標高44m～57mの緩斜面上に立地する。太山寺丘陵上には、高月山古墳群、勝岡古墳群、太山寺古墳群、鶴ヶ崎古墳群、船ヶ谷古墳群、北山古墳群、東山町古墳群等の古墳群が所在している。これらのうち高月山古墳、船ヶ谷向山古墳、船ヶ谷三ツ石山古墳、鶴ヶ崎古墳では発掘調査が実施され、前期～後期の古墳が継続經營されていることが分かっている。今回の調査では周囲のデータを踏まえ、太山寺経田遺跡1次、2次調査によって住居址、土坑、溝、集石遺構等が確認されていることより、集落関連遺構の広がりと古墳の確認を主目的として調査を行った。

遺構・遺物 試掘調査の結果よりA区、B区の2地点において本格調査を実施した。

A区は、調査地南東部の尾根筋の緩斜面に位置する。層位は第I層耕作土、第II層淡黄灰色砂質土、第III層茶褐色土、第IV層茶褐色砂質土、第V層黄橙色砂質土～茶褐色砂粒岩盤（地山）である。検出した遺構は溝と土坑である。S D 3は幅50～85cmで検出長は13.2mである。溝の中央に人頭大の礫石が配列されていた。また、不整橢円形の焼失土坑を1基検出した（時期不明）。

B区は、調査地西部の東方向へ開口する谷間部に位置する。層位は第I層明灰黄色砂質土、第II層淡黄灰色砂質土、第III層淡黄茶色土、第IV層暗灰褐色砂質土、第V層黒褐色粘質土、第VI層淡黄灰褐色土、第VII層灰色砂質土、第VIII層灰色粘土、第IX層茶褐色粘質土である。調査の結果、三層の遺物包含層を検出した。第IV・V層は弥生土器、土師器、須恵器を包含している。第VI層から石斧1点が出土した。遺構は第VI層上面にて溝4条、性格不明遺構2基を検出した。

小結 本調査において弥生時代から近現代に至る遺構・遺物を検出した。中でも興味深いのは、B区の遺物包含層である。堆積層も安定し分層できたことは、今後周辺の発掘調査をおこなううえでの好資料となるものである。

（山本）

太山寺経田遺跡 3次調査地

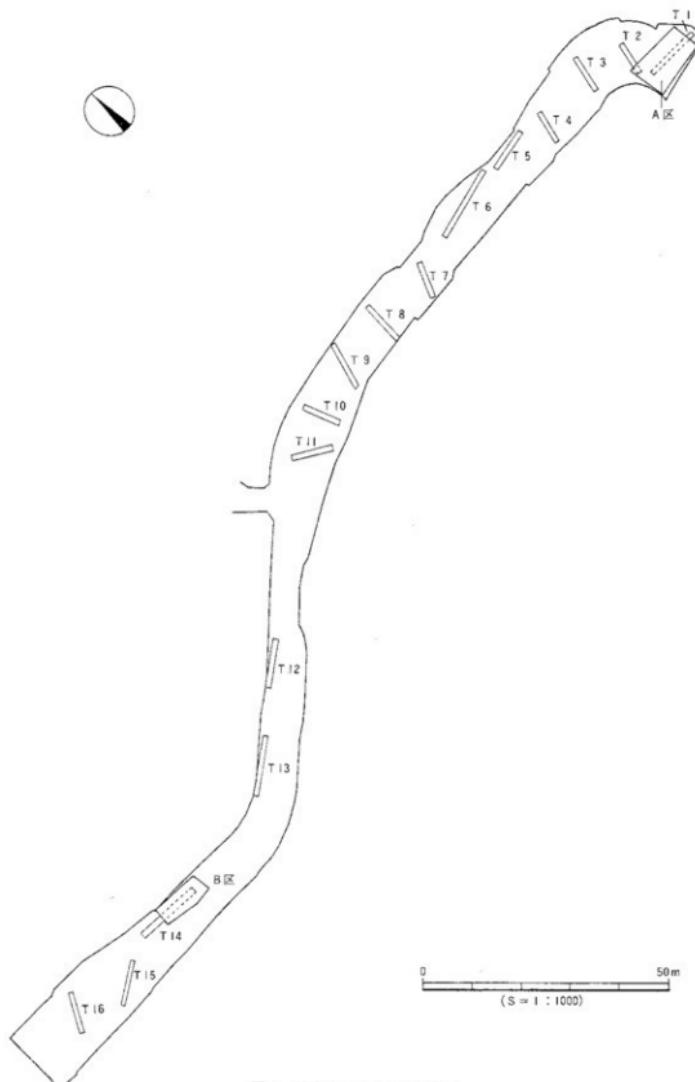


図2 調査地・トレンチ位置図

太山寺経田遺跡 3 次調査地

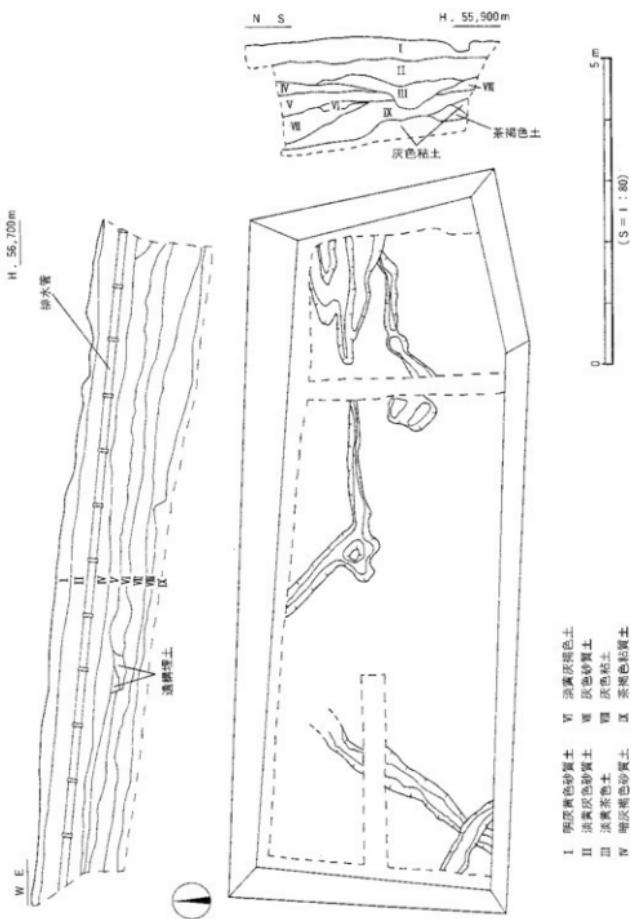


図 3 B 区測量図

太山寺経田遺跡 3次調査地



写真1 A区完掘状況遠景（北より）

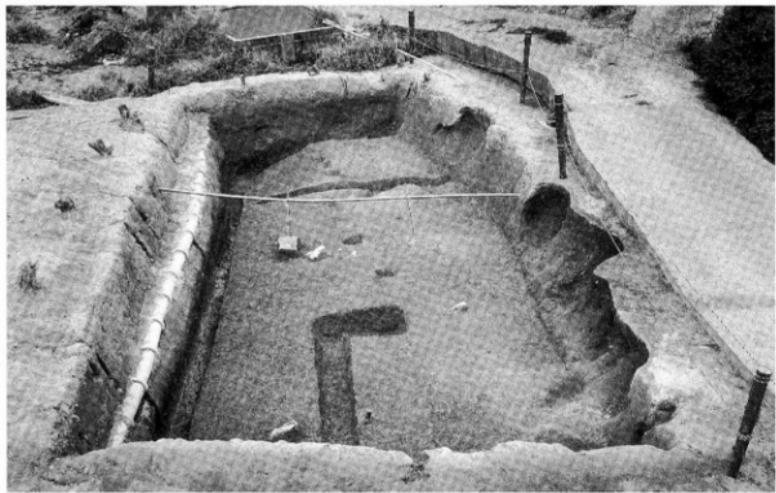


写真2 B区完掘状況（西より）

タニ マチ
谷町遺跡

所在地 松山市谷町371
期 間 平成7年9月1日～
同年10月26日
面 積 701m²
担 当 山本健一・武正良浩



図1 調査地位置図

経過 本調査は「No41 潤見古墳群・遺物包含地」内における宅地造成に伴う事前調査である。平成7年3月に試掘調査を実施し、竪穴状遺構、溝状遺構、弥生土器、土師器、須恵器等、弥生時代から中世にかけての遺構や遺物及び包含層を確認した。そのため当該地における遺跡の取り扱いについて文化教育課と地権者は協議を行い、宅地開発によって失われる遺構について、記録保存のために発掘調査を実施することとなった。

調査地は、堀江地溝帶南東辺部の標高16m、松山平野北東部にそびえる高龜山系分岐丘陵の南裾部に立地する。周辺の遺跡には、当調査地を含む丘陵裾部では金毘羅山遺跡、座拝坂遺跡、潤見遺跡が、堀江地溝帶西辺部では大瀬遺跡、三光遺跡、船ヶ谷遺跡等がある。今回の調査地の約70m南東の座拝坂遺跡では弥生時代から古代の集落の存在が確認されており、今回もこれら遺構の確認を目的として調査を行った。

遺構・遺物 今回の調査によって確認された遺構は、弥生時代～中世を含め、竪穴式住居址1棟、溝状遺構3条、土坑2基、柱穴13基を検出し、遺物は弥生土器、須恵器、土師器、瓦器の他に鉄製品、石製品などが出土している。

弥生時代の遺構としては竪穴式住居址（S B 1）がある。調査区東半分で検出された。調査区の南北隅で周壁の一部分を検出したが、全容及び平面形態は不明である。検出された規模は東西4.5m、南北3.4m、聖高は44cmを測る。住居址内からは内部施設として主柱穴2基、周壁溝、ベット状の窓床部、貯蔵穴2基、土坑2基を検出した。遺物は弥生土器の甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高杯形土器の他に石器1点が出土した。

古墳時代の遺構は溝（S D 1）がある。調査区西部で検出した。調査地地表面（第VI層上面）の等高線とはほぼ平行する南北溝である。検出長2.8m、幅1.1m、深さ19cmを測る。埋土は黒灰色土である。遺物は須恵器の他に弥生土器、礫石が散在して出土した。溝の性格については解明できなかった。

小結 今回の調査は調査地が狭小であったため課題を残すものであったが、弥生時代から中世までの遺構と遺物を確認することができた。弥生時代については、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての境目に位置する時期の竪穴式住居址が確認された事から、当時代の集落の存在が明らかとなつた。古墳時代から中世については遺構、遺物が確認されてはいるが、その性格は不明であり、解明については今後の周辺地での発掘調査の資料の増加とともに検討をしてゆきたい。

（山本）

谷町遺跡

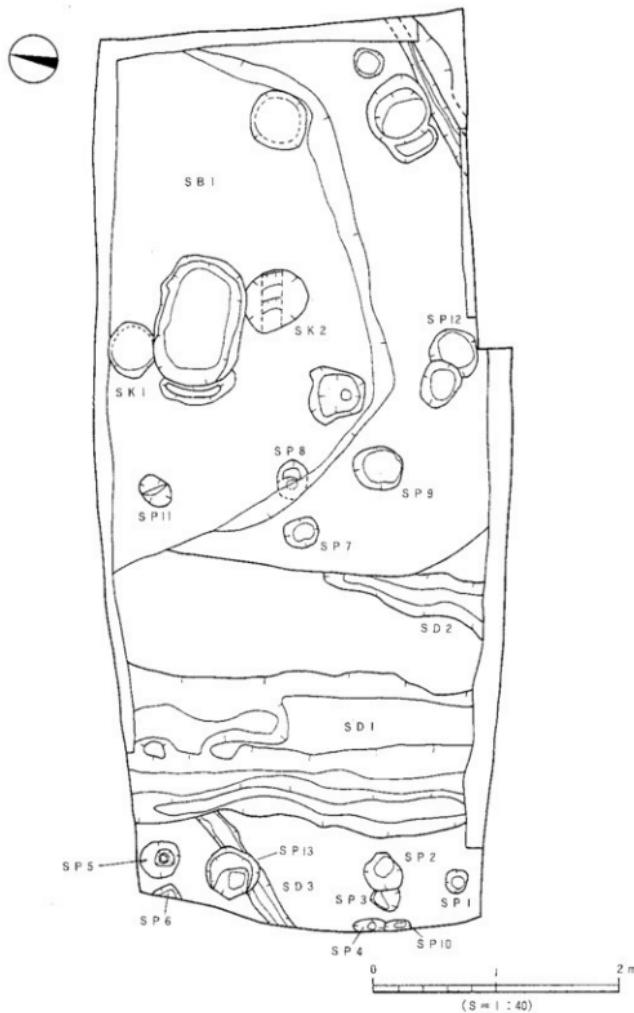


図2 造構配置図

谷町遺跡

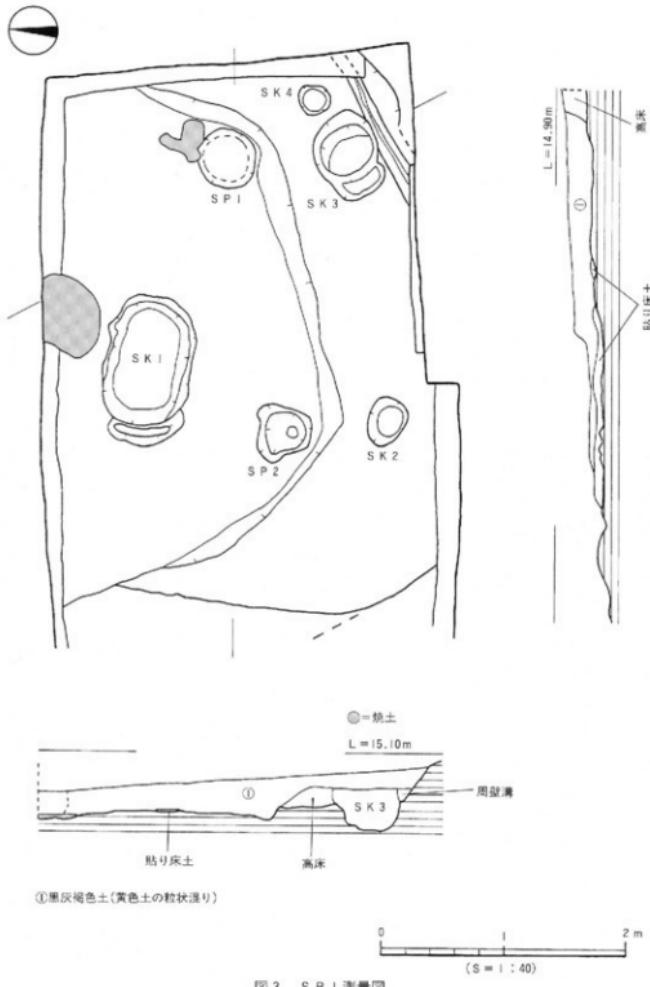


図3 SBI測量図

谷町遺跡

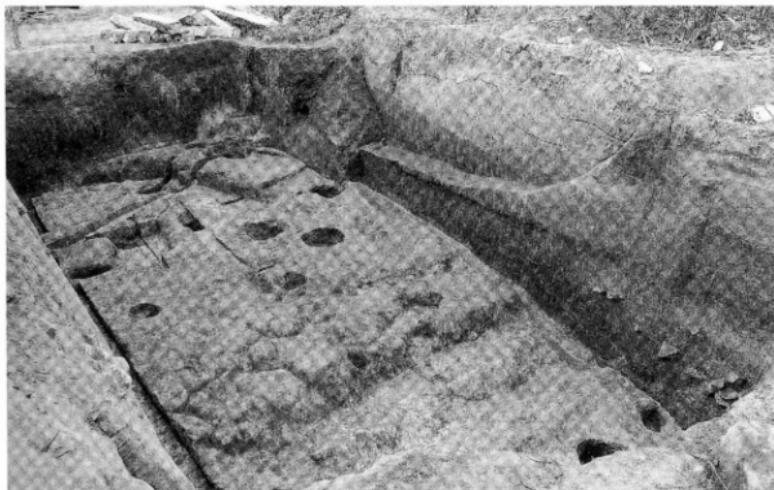


写真1 完掘状況（北西より）

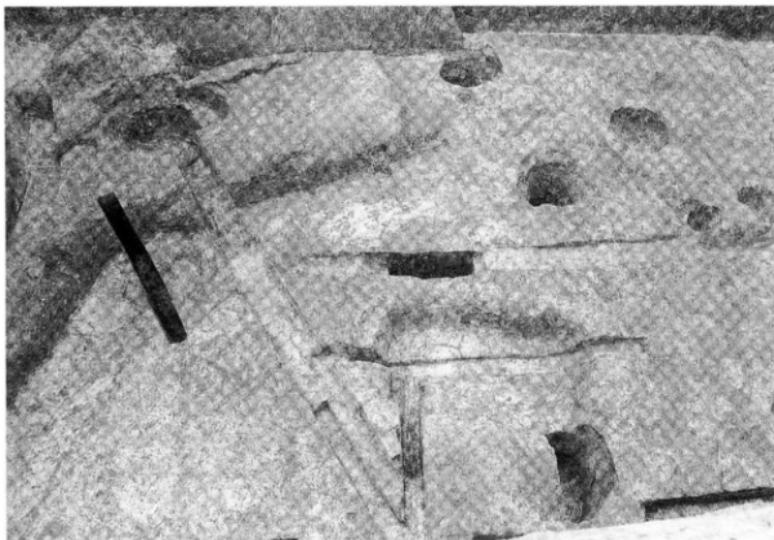


写真2 SBI（北より）

セトカゼトウゲ 瀬戸風峠遺跡（B・C区）

所在地 松山市下伊町乙188-1外106筆
期間 平成7年4月5日～
平成9年9月30日（予定）
面積 257,349m²
担当 相原浩二・大森一成



図1 調査地位置図

経過 瀬戸風峠遺跡は下伊町の南西丘陵部、瀬戸風峠の北西丘陵部に所在する。本調査は松山市の指定する包蔵地の「No52 瀬戸風峠古墳群」内における宅地開発に伴う事前緊急調査である。

調査対象面積が広大なため丘陵部全体の遺跡の有無について、平成6年4月から翌年の3月にかけて、丘陵支群ごとにA区～F区までの6区画に区分し、確認調査を行った。その結果、A区では遺構・遺物は検出されなかったが、B区で古墳2基（うち丘陵頂部にある古墳については、愛媛県教育委員会が行った古墳分布調査において瀬戸風峠1号墳として紹介されており、周知の古墳である）、箱式石棺2基（うち1基については調査により石蓋土壙墓であった）、C区で箱式石棺2基、D区、E区、F区でそれぞれ古墳を1基ずつ確認したことから、それらの遺構と周辺部について調査を行うことになった。尚、現在調査はC区の箱式石棺2基（1号石棺、2号石棺）の調査を終え、B区、D区の調査途中である。

遺構・遺物 C区の1号、2号石棺はB区から北東へのびる丘陵尾根上で検出された。両者とも尾根筋に直交するように造営され、墓域の掘り方には余裕ではなく、石材には同丘陵中に普通にみられる花崗岩が使用されている。1号石棺は主軸方位をE-20°-Sにとり、天井石3枚が残存するが安定した状態ではなかった。棺内長1.70m、棺内幅0.25m～0.40mで西側が狭くなる。遺物は出土していない。2号石棺の主軸方位はE-14°-Sにとり、天井石と西側の側石は削平されている。棺内長は現存で1.40m、棺内幅は0.40mを測る。棺内には人骨が遺存しており、頭骨を東にして脊椎、大腿骨の一部を検出しているが副葬品は見られない。1号、2号石棺とも時期決定に有効な遺物が検出されず時期不明の石棺である。

次に、B区にある調査中の瀬戸風峠1号墳について若干ふれておく。標高254mにあるこの古墳から望む景色は絶景で松山平野はもとより瀬戸内海の島々を一望のもとに見渡せる。主体部は天井石が残っており、盜掘により奥壁と側壁の一部が落下しているものの、比較的遺存状態の良好な横穴式石室である。石室内には流入土砂が堆積しているものの、現況で石室の高さ2.0m、室長約4.0m、幅2.2mを測る。現在は墓道の調査を終え、遺存する閉塞石の一部を取り除き、石室内に流れ込んだ土砂の除去を行っているが、遺物は出土していない。

小結 瀬戸風峠遺跡は現在も調査途中のため、今回は平成7年度の調査状況を簡単に報告するものである。8年度調査予定のB区、D区、F区の調査については次回の年報にて報告するものとする。

（相原）

瀬戸風峠遺跡（B・C区）

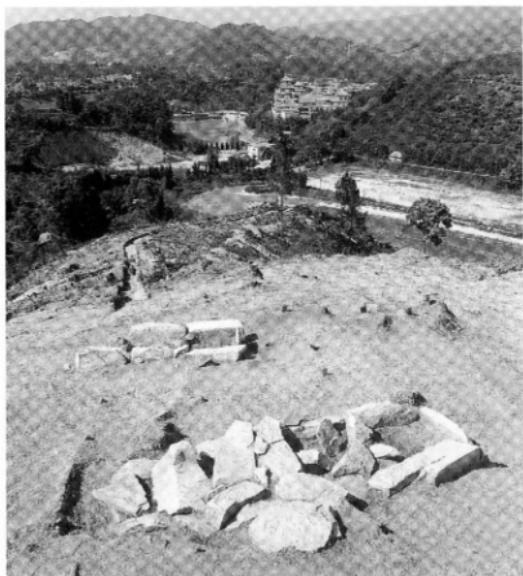


写真1 C区1号石棺(手前)と2号石棺(南より)

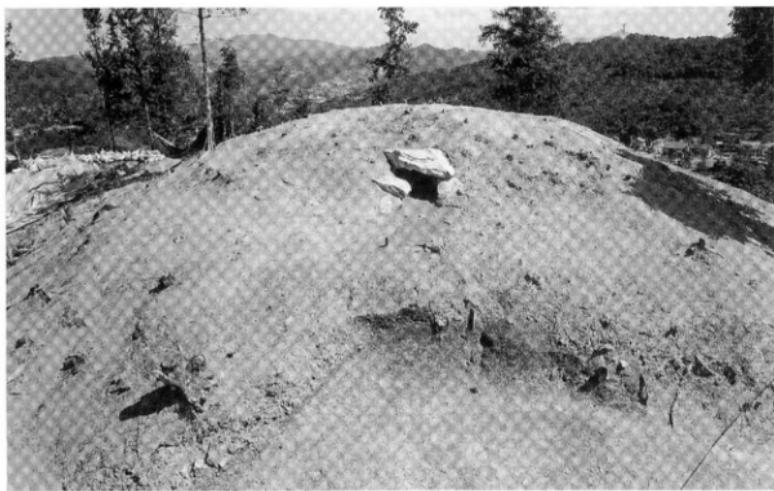


写真2 B区瀬戸風峠1号墳墓道検出状況（西より）

オオミネ　ダイ
大峰ヶ台遺跡 9次調査地（4区）

所在地 松山市南江戸5丁目・6丁目
期間 平成7年4月1日～
平成8年3月31日
面積 12,000m²
担当 梅木謙一・高尾和長・相原浩二
宮内慎一・水本完児



図1 調査位置図

経過 本調査地は大峰ヶ台主丘陵に対して谷間を挟んだ西側に聳える分岐丘陵上に位置する。調査地の地形は南北方向に尾根線が長く、裾部は東西に広がり、丘陵全体にわたり急勾配をもった斜面である。調査地周辺には大峰ヶ台遺跡（弥生時代中期）や朝日谷古墳、客谷古墳などが存在する。とりわけ昨年度の調査では古墳時代後期の横穴式石室をもつ大池東1号墳が確認されている。

遺構・遺物 調査は南北に延びる頂上尾根部〔①区〕と南西に向けて分岐する丘陵部〔②区〕とに分けて行った。両地区的調査とともにトレーンチ調査を主体とした。その結果、①区では1基、②区では3基の古墳を検出した。

〔1〕①区の調査 調査は19本のトレーンチを設定し、土層観察及び古墳の有無の確認を行った。その結果、東斜面裾部北端にて石室を検出した（客谷11号墳と呼称）。墳丘はすべて消滅しており、主体部がわずかに残存している。石室は天井石は失われ、側壁と奥壁は1～2段目までが残る程度で、床面は1/2を検出するにとどまった。主軸は東西方向であり、東へ開口する。規模は奥壁長1.3m、側壁長1.4m、両側壁間は床面中央部で1.2m、奥・側壁の残存高は約30cmを測る。敷石等の施設は未検出であるが床面の一部には貼り床が施されていた。遺物はトレーンチ調査時に須恵器提瓶が1点出土した。遺物はT字43型式に比定されることから、本古墳の造営時期は6世紀後半頃と考えられる。

〔2〕②区の調査 調査は①区と同様にトレーンチ調査を主体とした。調査地の地形を考慮したうえで上段・中段・下段に分けて順次、調査を行った。下段の調査では11本のトレーンチを設定し土層確認等を行った。その結果、下段のほぼ中央部にて古墳を1基確認した（大池東2号墳と呼称）。

次に中段では、現況でマウンド状になる土の高まりを2ヶ所確認した。これら2つのマウンドに対してトレーンチを設定し、土層観察を行った結果、各々に周溝状の造構を確認した。それぞれ、大池東3号墳、大池東4号墳と呼称し、調査を進めた。上段は尾根線上に沿ってトレーンチを設定し、土層確認を行ったが、古墳を確認するには至らなかった。

〔1〕大池東2号墳の調査 本古墳は昨年度確認した大池東1号墳の北東部、標高約30mに立地する。1号墳と同様、南北方向に開口する横穴式石室を有する円墳である。墳丘を構築する盛土の多くは失われ、現在の地表面から30cm下で石室を検出した。石室は天井石は失われ、奥壁と両側壁の1/2程度が残存している。規模は奥壁長1.8m、側壁長4.2m、奥壁の残存高は約1.5mを測る。渓門は石の抜き跡から判断すると、幅1.5m前後と推測される。床面には中央部より奥壁側に20～30cm程度の大きさの角礫が散かれており、一部ではあるが貼り床を検出した。

大峰ヶ台遺跡 9次調査地（4区）

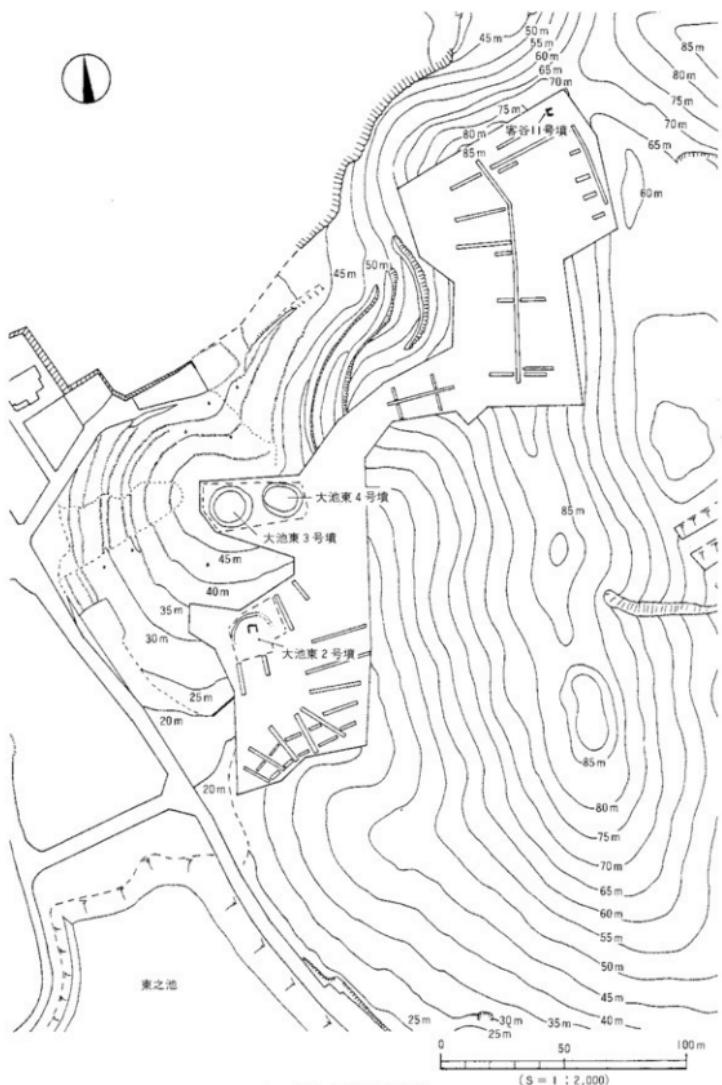


図2 調査地測量図

大峰ヶ台遺跡9次調査地（4区）

石室掘り方は楕円形を呈し、主軸長6.0m、幅4.0m、深さ2m前後を測る。周溝は全周せず石室の北西部と北東部の一部に検出された。幅60~80cm、深さ20cm、断面形は浅い「U」字状を呈している。遺物は石室内から須恵器壺蓋・壺身1点、土師器壺1点、耳環3点、鉄器2点他が出土した。出土した須恵器がTK209型式に比定されることから、本古墳の造営時期は6世紀後半頃と考えられる。

(2) 大池東3号墳の調査 大池東3号墳は大峰ヶ台西丘陵の南北に延びる尾根線上の緩傾斜地の標高51~53mに4号墳とともに東西に並んで立地する。本墳は周溝を伴う円墳で、墳丘は直径11m、盛土は全体的に大きく削られており、特に周囲の墳端部近くでは殆ど失われている。盛土が残っているのは、墳丘中央付近に厚さ0.3mを最大として、他の部分では0.1m前後である。主体部は削平のため失われていると思われる未検出である。周溝は、幅1.5~3.0m、深さ0.05~0.25mで西側が深くなるもののはば全周する。

出土遺物は西側周溝内の基底面に掘られた長軸1.0m、短軸0.65m、深さ0.1mの長方形を呈する土坑SK1より完形の須恵器壺环と蓋がセットで10点出土したほか、周溝南東部から南西部にかけて周溝底より須恵器大甕、甕、土師器甕片、円筒埴輪片、壺笠片、人物埴輪片が出土している。周溝内からは埴輪が出土したものの墳丘上、墳丘中からは埴輪の出土ではなく、本墳築造時から比較的早い段階に墳頂から全て周溝内に崩落したものと思われる。

この古墳の時期については、主体部が失われており、主体部内からの土器によって知ることはできないが、周溝内出土の須恵器はTK23型式もしくはTK47型式に比定されるもので、6世紀初頭におさまるものと思われる。

(3) 大池東4号墳の調査 大池東4号墳は3号墳から東へ21mに位置する。本墳の北東部は若干調査区外となるものの、3号墳と同様の周溝を伴う円墳と思われる。墳丘は直径約13mで、盛土は全体的に墳裾から墳端にかけて削平されている。特に北西部から南西部にかけては近現代の地割りの溝等により大きくカットされ盛土は殆ど失われている。中央付近は厚さ0.45mと3号墳よりは若干残りはよい。主体部は明確に検出していない。周溝は北東側が調査区外になるため全容はしれないが、検出部では幅1.0~3.0m、深さ0.05~0.20mで、南から西にかけてはやや急傾斜になるためか、溝幅が小さくなり、周溝外側の立ち上がりが見られなくなる。また、東から北にかけても岩盤層になるため掘削が行われず、溝は途切れてしまう。

出土遺物は墳丘中央部盛土上面と裾部表土中に鉄刀が一振ずつ出土している。埴輪は上部2/3近くを失った円筒埴輪が墳頂から1点出土しているが原位置を保った状態ではなかった。周溝中からは、周溝南東部から南西部にかけて須恵器片、土師器片、円筒埴輪片、楕円埴輪片などが出土している。

この古墳の時期についても周溝内の出土遺物より3号墳とほぼ同時期と思われる。

小結 本調査では4基の古墳を確認した。客谷11号墳は大峰ヶ台西丘陵の東斜面流部に立地し、6世紀後半の古墳と考えられる。近隣には客谷1号墳、2号墳があり、これらの古墳とほぼ同時期のものであろう。また、大池東2号墳、3号墳、4号墳は南東方向に分歧する丘陵尾根線上に立地し、6世紀前半から7世紀前半に比定される古墳である。出土品より3号墳と4号墳は6世紀初頭頃に同時に存在し、使用されたものと考えられる。今回の調査結果は、大峰ヶ台丘陵西側における古墳時代の墓域とその構造を解明するうえで貴重な資料となるものである。

（宮内・相原）

大峰ヶ台遺跡 9 次調査地（4 区）

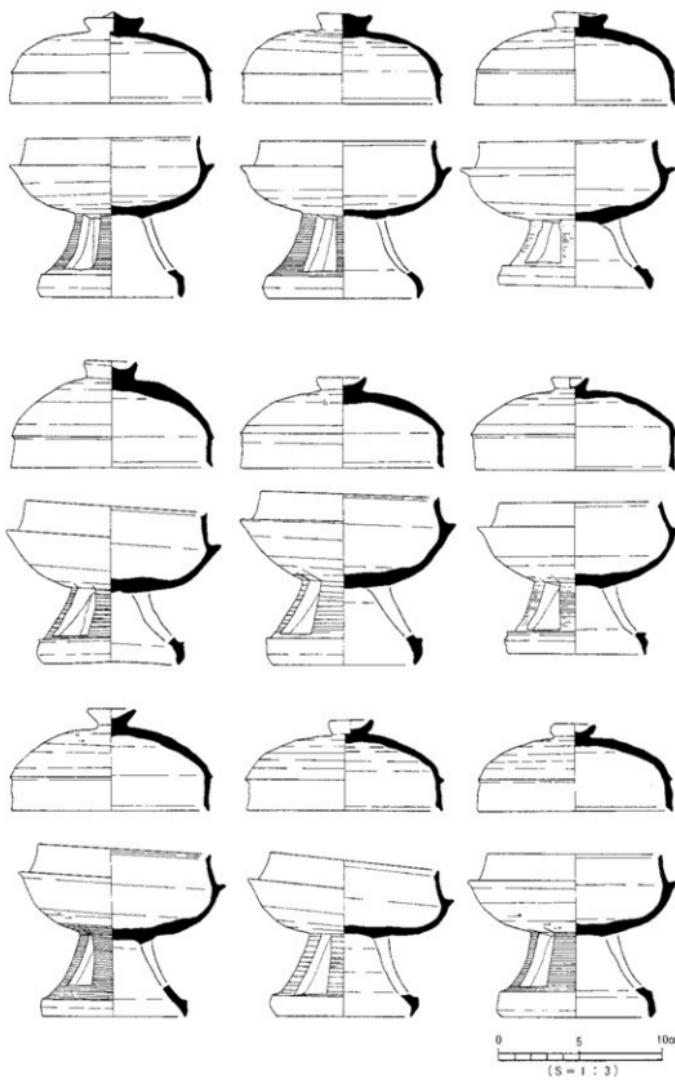


図3 大池東3号墳 S K I 出土遺物実測図

大峰ヶ台遺跡 9次調査地（4区）



写真1 調査地全景（北東より）



写真2 大池東3号墳・4号墳（東より）

大峰ヶ台遺跡 9次調査地（4区）

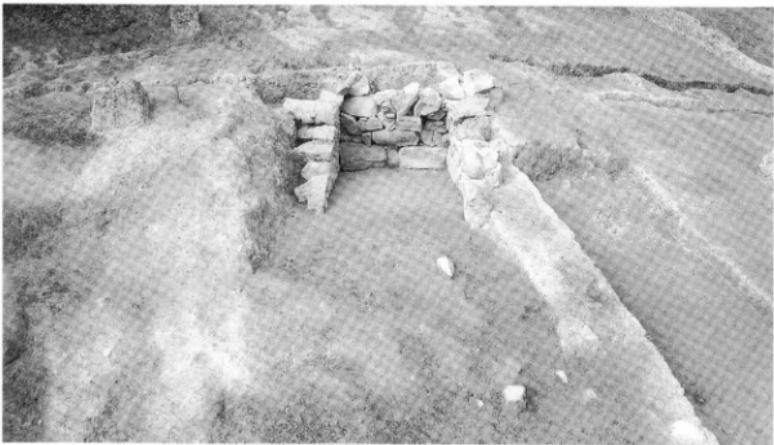


写真3 大池東2号墳（南西より）



写真4 大池東2号墳敷石検出状況（南西より）

コアラ 古照ゴウラ遺跡 5次調査地

所在地 松山市南江戸3丁目912, 913, 913-2

915, 916, 917-1

期間 平成7年4月5日～

同年9月22日

面積 6,319m²

担当 河野史知・相原秀仁



図1 調査地位置図

経過 本調査は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「No.35 古照遺跡」内における店舗建設に伴う事前調査である。調査地は松山平野中央部を東から西に流れる石手川等により形成された沖積平野の扇端付近の標高12.6～13.0mに立地する。

本調査地西方には古照遺跡が位置しており、第1～11次までの調査が行われた結果、「井堰」に纏わる周辺環境や中世における集落址が検出されている。また、北西の大峰ヶ台丘陵では弥生時代の集落址や古墳時代の集落址・古墳群の存在が確認されている。特に西隣の松環古照遺跡や東隣の古照ゴウラ遺跡4次調査において中世集落の存在が確認されており、当地域における中世集落の復元がなされつつある。

遺構・遺物 調査地の基本層位は、第

I層造成土、第II層耕作土、第III層床上土、第IV層旧耕作土、第V層は中世の遺物包含層、第VI層上面にて遺構を検出し、第VII層淡黄色粗砂、第VIII層粘土、第IX層シルト、第X層微粒砂。第XI層の粘土層上面にて古墳時代の文化層を検出した。

A区南壁にて自然堤防と考えられる砂層の盛り上がり、B区南壁の第V層上面に近世の河川の氾濫原が西に延びることを確認した。

検出遺構はA区より掘立柱建物址2棟、櫛列1条、木棺墓1基、土坑8基、溝4条、柱穴103基、井戸2基、鋤跡状遺構、水田面を検出した。

B区は掘立柱建物址2棟、櫛列1条、木棺墓1基、土墳墓1基、土坑2基、柱穴35基、溝5条、井戸1基、鋤跡状遺構、水田面、性格不明遺構4基を検

S-N	L = 13.20m
I	造成土
II	耕作土
III	疊土
IV	灰色シルト
V	オリーブ灰色シルト (遺物包含層)
VI	緑灰色砂質土 (遺構検出層)
VII	淡黄色粗砂
VIII	暗灰色粘土
IX	暗青灰色シルト
X	暗青灰色微粒砂
XI	暗灰色粘土 (古墳時代の文化層)

図2 基本層位図 (S = 1:20)

古黒ゴウラ遺跡5次調査地

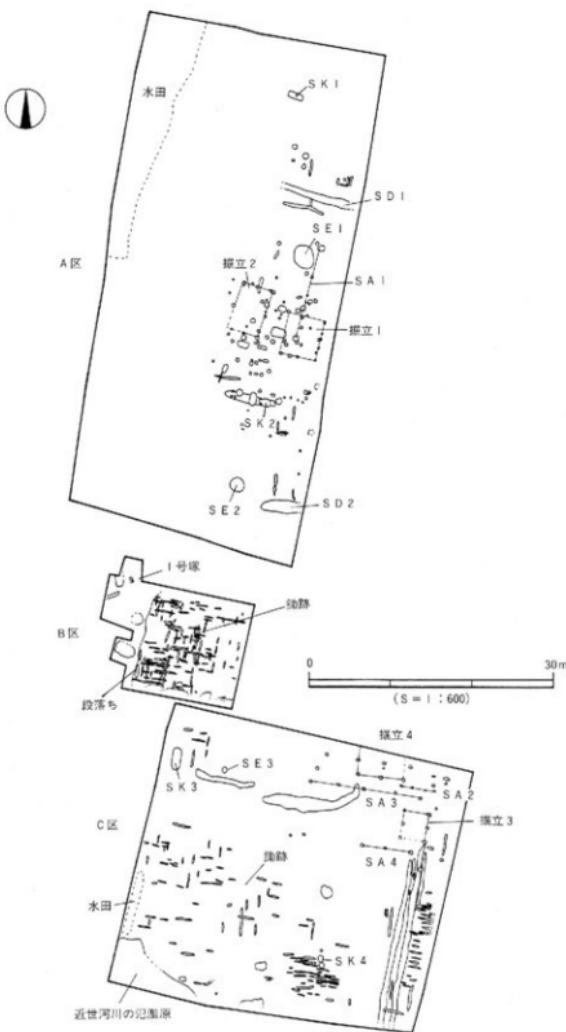


図3 遺構配図

古廬ゴウラ遺跡5次調査地

出した。C区は土坑3基、塚1基、溝1条、鈎跡状遺構、第VII層の段落ちを検出した。

(A区) 調査区中央部に南北棟の掘立柱建物址が2棟検出された。その南側の東西に延びる浅い溝の床面より、土坑(SK2)を検出した。平面形は長方形で断面形は逆台形状を呈しており、土坑内より、ほぼ完形で鋳造製の鉄錠が南北壁面から床面にもたれる様に相向い合わせに置かれた状態にて出土した。掘立柱建物址の南北において曲げ物井戸を検出しているが、北側の井戸(SE1)からは曲げ物の据え代えが確認できた。

調査区北側に掘立柱建物址とそれに直交するY字溝が東西に走っており、その北側に木棺墓(SK1)を検出した。遺構上層の地上に墓標施設と考えられる約10cm大の礫を散乱した状態で検出し、平面形は長方形、断面形は皿状を呈する。木棺の側板・蓋板は土圧で崩落している。薄く残存している底板上に北向き東枕の人骨の安置が推定され、骨・歯より成人男性が考えられる。副葬品は、頭部付近の側板の外側より土器皿4枚、瓦器皿1枚を出土した。

調査区北西部にて西に広がる水田面を検出した。粘土層上面において無数の人・牛の足跡を砂層に覆われた状態で検出した。

(B区) 調査区の北東部において掘立柱建物址2棟とそれに付随する柵列、東側に南北に延びる溝を検出した。調査区南半分に東西の鈎跡群とそれに直交する鈎跡を検出し、南西部には水田面とそれに伴う牛の足跡を検出した。調査区北西部で検出された土壙墓(SK3)は床面に小石を敷いており、木片が残存している。

第VII層下の砂質土層において、第VI層が埋土となり東西に延びる溝状遺構4条を確認した。調査区北寄り2ヶ所に、つば掘り調査を実施した。その結果、標高11.7mより、古廬遺跡9・10次調査において多数の布留式土器が出土した層につながると考えられる黒褐色のシルト層を検出し、上面より炭や木片が出土した。

(C区) A・B区の鈎跡のつながりと考えられる小溝群を東西・南北方向に検出した。遺構検出面である第VII層が調査区西側において段落ち状に約10cm下がっていることを確認した。

塚源区において塚(1号塚)を検出した。この塚は第VII層に礫が積まれた状態で築かれており、礫に混じて凝灰岩製の五輪塔が混在している。土坑内に水輪部が埋まった状態で検出された。礫は上部が近世の耕作面にまで達している。おそらく、五輪塔が何らかの原因で崩壊した後、河原石を積み上げ塚として伝承したものが考えられる。

小結 今回の調査において古廬遺跡、その周辺遺跡で検出された中世遺跡のつながりが確認できた。特に、△地区において検出された遺構は、人が生活する場所である生活域、農耕行為を行う生産域、生活域よりやや離れた所の墓域に分かれており、一つの聚落の構成が窺える。農耕は畑作が中心であり、西側の低湿地において水田が営まれている。墓の形態もそれぞれ個性があり、当地域における中世墓変遷にも貴重な資料である。また、土坑内より出土した鉄錠は松山平野において初めての出土であり、埋納状態も全国的に見ても珍しく、何らかの祭祀として使用されたのかを解明することが今後整理していく上での重要な課題である。この様に、今回検出した遺構は当地域における遺跡の全体像を映す上で非常に興味深い資料の出現である。(河野)

古里ゴウラ遺跡5次調査地

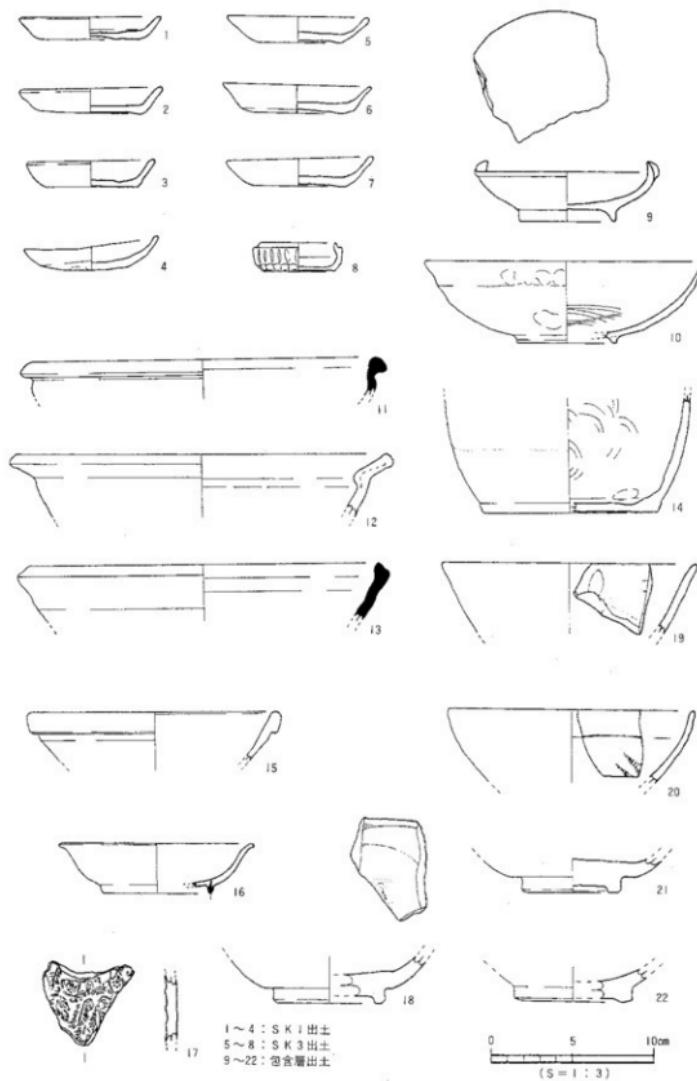


図4 出土遺物実測図

古照ゴウラ遺跡 5次調査地



写真1 A区発掘状況（南より）

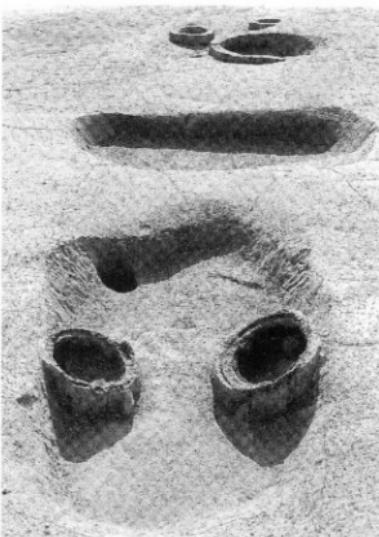


写真2 A区SK2遺物出土状況（東より）

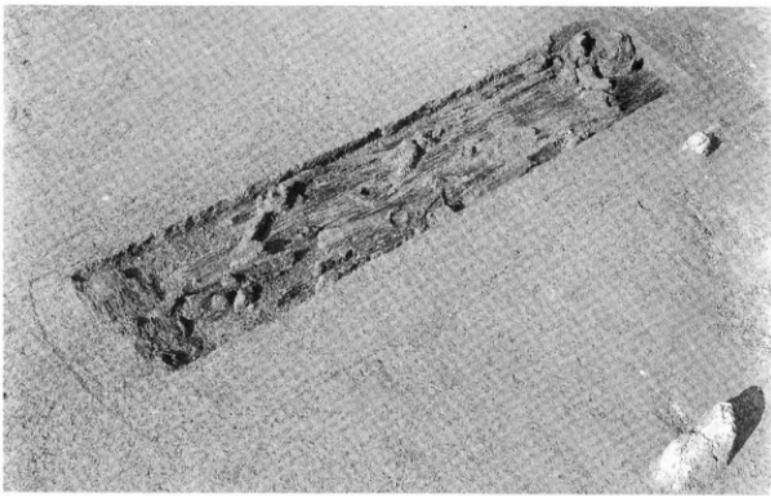


写真3 A区SK1人骨・木棺出土状況（南西より）

古瓶ゴウラ遺跡 5次調査地

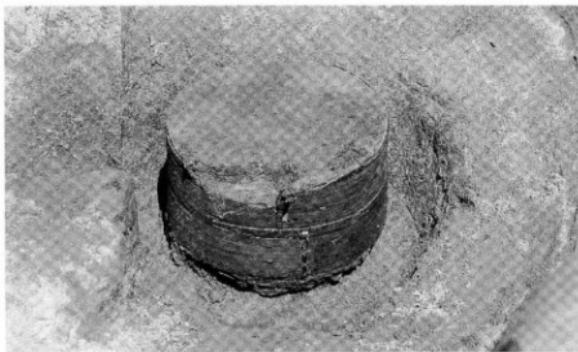


写真 4
A区 S E 2
井戸枠出土状況
(西より)

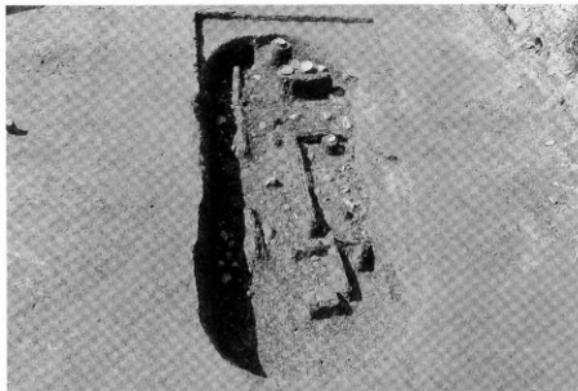


写真 5
B区 S K 3
遺物出土状況
(北より)

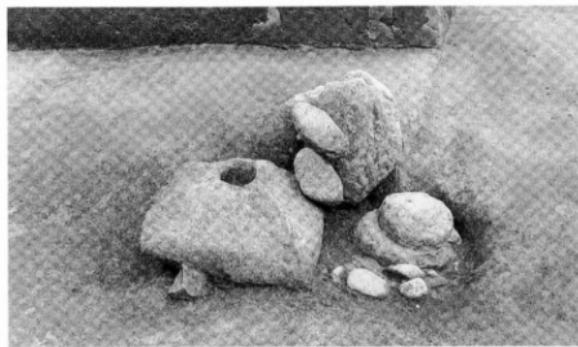


写真 6
C区 I号塚
五輪塔出土状況
(西より)

溝辺 2 号墳

所在地 松山市溝辺町乙437番

期 間 平成 8 年 1 月 16 日～
同年 1 月 23 日

面 積 2,732m²
担 当 栗田正芳



図 1 調査地位置図

経過 本墳は、包蔵地「溝辺古墳群」内に所在している。本調査は、墓地造成工事に伴う事前のトレンチ調査である。3本のトレンチを尾根上に設定し調査を行った。その結果、周溝と石室1基が検出された。開発工事が本墳にまで及ばないため、現状保存することになっている。

本墳は、石手川の左岸の北側の丘陵尾根上、標高112mに立地しており、この丘陵は「神前」と呼ばれている。本墳周辺には、石手川対岸に溝辺1号墳（1・2号石室）が発掘調査されており、西南方にある四国八十八ヶ寺51番札所の「石手寺」裏山の丘陵には現在も多数の古墳が確認されている。

遺構・遺物 本墳は、墳丘や石室の天井部は既に削平されているが、石室の北側で厲溝の一部を確認した。トレンチ調査ではあるが、小規模な竪穴式石室を内部主体とする円墳と思われる。

本墳の石室内法は、南北長0.63mを測り、東西長は0.5m分のみを検出しているが、試掘棒による調査では東西約2m前後あることを確認している。石室の長軸方向は、N-29°-Eを測る。石室は削平を受けているため、基底石またはその上の2段積み分が遺存している状況である。

石室内からは、土師器甕1点、須恵器には高环1点、环身1点、环蓋2点、無蓋・有蓋短頸壺各1点、甕1点が出土している。土師器甕には、环蓋（図4-3）が逆さまに入れ子状にされていた。他に、有蓋短頸壺の周辺には赤色顔料がまかれ、人骨と思われる小片1点が確認されている。

石室の周囲には、地山面で南北幅約1.5mを測る墓坑を確認し、東西約0.9m分を検出している。墓坑の南西角からは、尾根の傾斜に合わせ南へと排水溝が延びている。この排水溝は、幅約0.20m、深さ約0.15mを測り、断面逆台形状を呈している。

本墳は、出土遺物から田辺昭三氏の陶邑編年の中M.T-15に併行する時期が考えられる。

小結 本墳に副葬されていた須恵器と土師器は、当平野における当該期土器の基準的資料になるもので貴重な遺物である。

本墳と同時期の古墳には溝辺1号墳の1号横穴式石室が挙げられるが、本墳が小型の竪穴式石室で松山平野の中でも調査例がないため、本墳の位置づけは今後の資料増にゆだねるものである。

(栗田)

溝辺2号墳

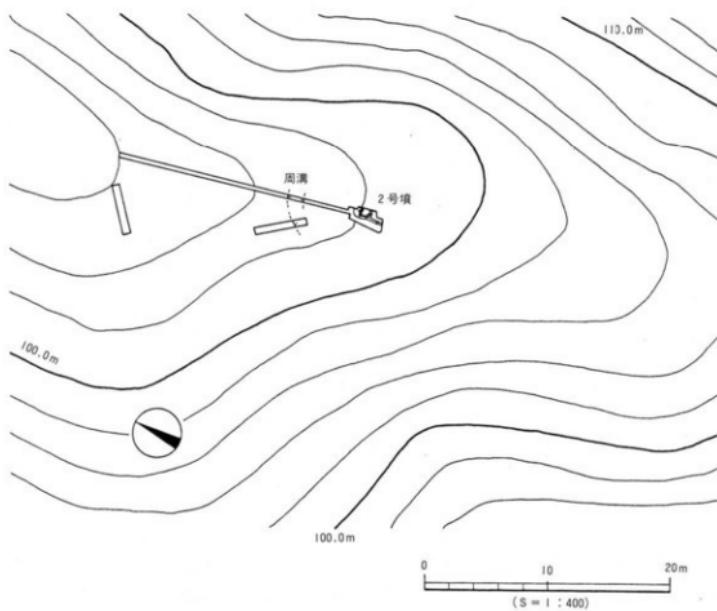


図2 トレンチ測量図

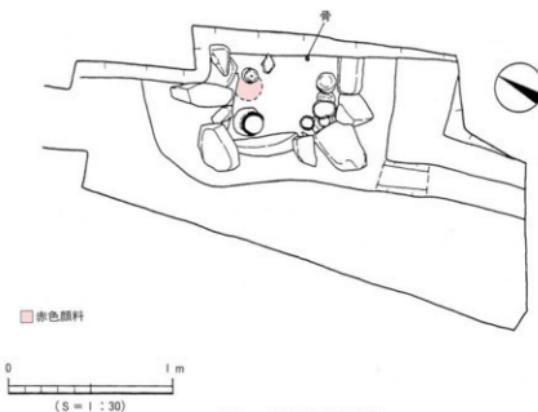


図3 2号墳石室平面図

溝辺 2 号墳

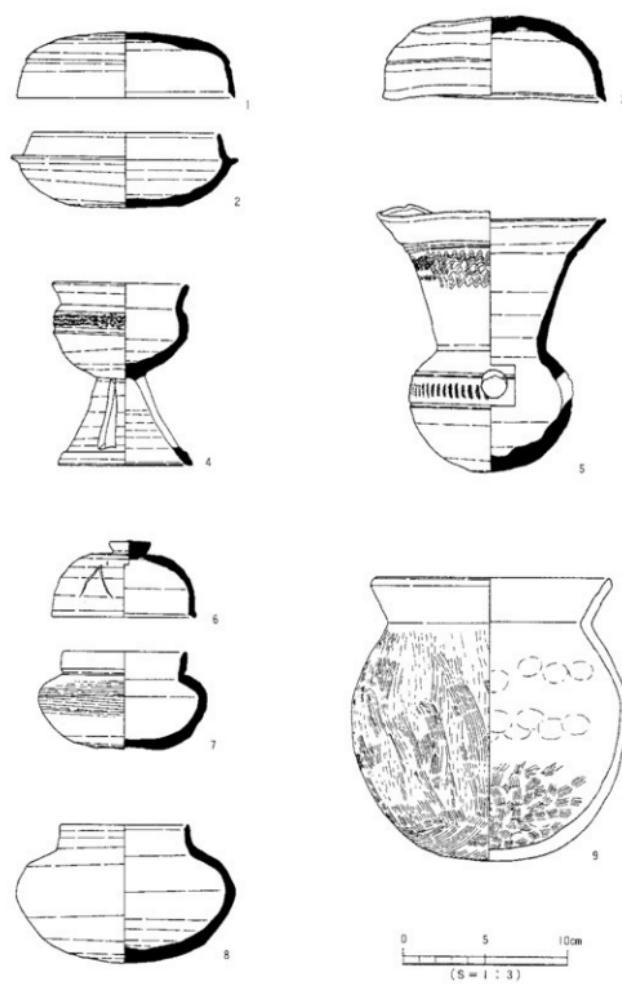


図 4 2 号墳出土物実測図

溝辺2号墳



写真1 調査地全景（北より）



写真2 2号墳石室内遺物出土状況（東より）

ヒガシノ チャヤダイ
東野お茶屋台遺跡 5次調査地

所在地 松山市東野5丁目甲838番1外7筆
期間 平成7年6月1日～
同年11月30日
面積 3,465m²
担当 橋本雄一・小笠原善治



図1 調査位置図

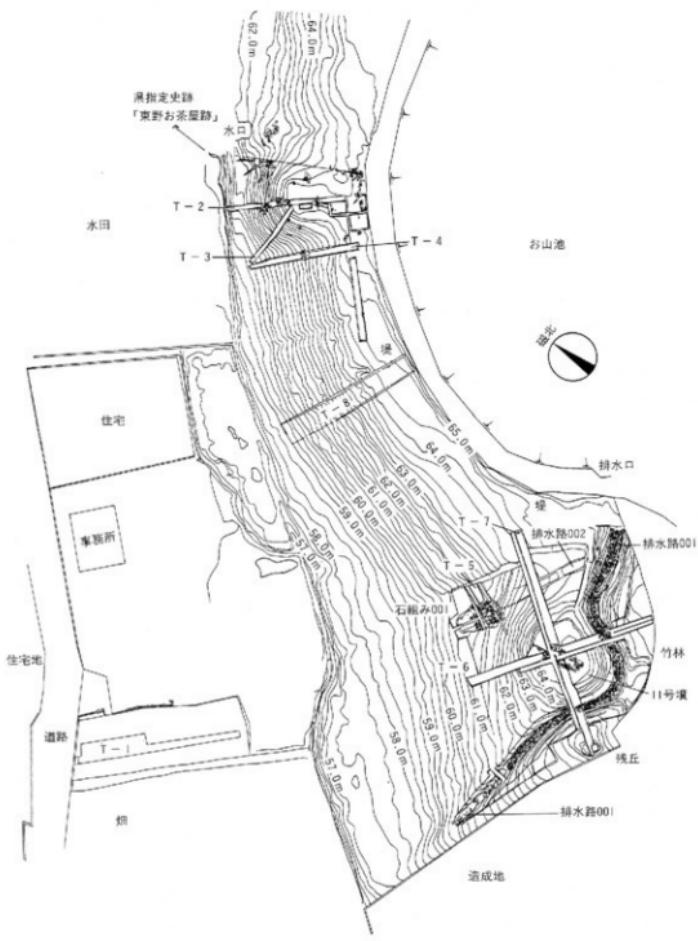
経過 東野と呼ばれる地域は、市の北東部の高縄山塊に平野が接する場所に位置している。この地点は、道後平野を流れる石手川が平野部に至る箇所の南側に位置し、川を挟んで対岸の山際には、四国靈場五十一番札所である石手寺を望むことができる。周辺においては、過去に県と市によって4次にわたる本格調査が実施され、古墳群や江戸時代の遺構の存在が明らかにされている。今回、民間の宅地開発に先立って、江戸時代に松山藩主の別邸として造られた「東野御殿」の中に位置する「お山池」と呼ばれる池の堤と、それに隣接する古墳について発掘調査を行った。

遺構・遺物 発掘調査の成果は主として2つの項目に区分される。ひとつは、江戸時代の藩主の別邸の庭園の一部に関する諸施設の確認が行われたこと。第2点は、江戸時代の盛り土に半ば埋もれた未確認の古墳一基を検出し、7世紀初頭の特徴的な石室の在り方を解明することができた点にある。

当調査地周辺の開発は、1650年代に行われた松山藩主松平定行による隠居所の造営以降、本格化する。加藤家の転封、蒲生家の断絶の後、この地に入った松平(久松)家の初代にあたるこの人物の存在は、その後の松山藩政史に大きな影響を与えることになる。その定行によって東野に造られた別邸が後に「東野御殿」と呼ばれるもので、庭園施設の一部として造られた「お山池」の側には、多くの茶屋や御殿が建てられていたという。明治維新の後、敷地の大半は松平家の手を離れ、県や民間の所有地となつた。現在、県有地の一部には県の関連施設が建てられているほか、古墳群が現存する池の周囲については、その一部が県指定史跡として景観の保全がなされている。

調査の着手当初は、調査地内にある「丘陵」を自然の丘であると誤認していたが、調査が進展するにつれて、盛り土による堤であることが判明した。調査地北端に位置する「盛り土」部分は、お茶屋台古墳群8号墳として県がまとめた古墳台帳にも登録されているものであるが、これについても池の堤と同一工程で造られたものであることが判明した。この「盛り土」部分の頂上部からは、祭祀に用いられたと考えられる土師器の皿が複数個体、さらに寛永通宝が数枚出土した。これらの遺物は、頂上部もしくは堤との接点の谷部において、擾乱土中から散乱した状態で検出されたことから、どのような状況のもとにおいて使用されたものか、その詳細は明らかではない。ただし、出土した銭の内、判読可能なものの3点が、1650年代までに鋳造された「古寛永」と呼ばれる書体が用いられていることと、調査地のほかの場所からは出土していないことなどから、盛り土部分と土師器の皿、寛永通宝は密接な関係にあったものと理解している。堤完成後の祭祀の場として設定されたのが「盛り土」部分ではないかと考えている。

東野お茶屋台遺跡 5次調査地



江戸時代に築かれた池の堤の一部を掘削し、
11号墳の填丘斜面などを検出した段階の
全測図である。

0 10 20m
(S = 1 : 600)

図2 調査地測量図

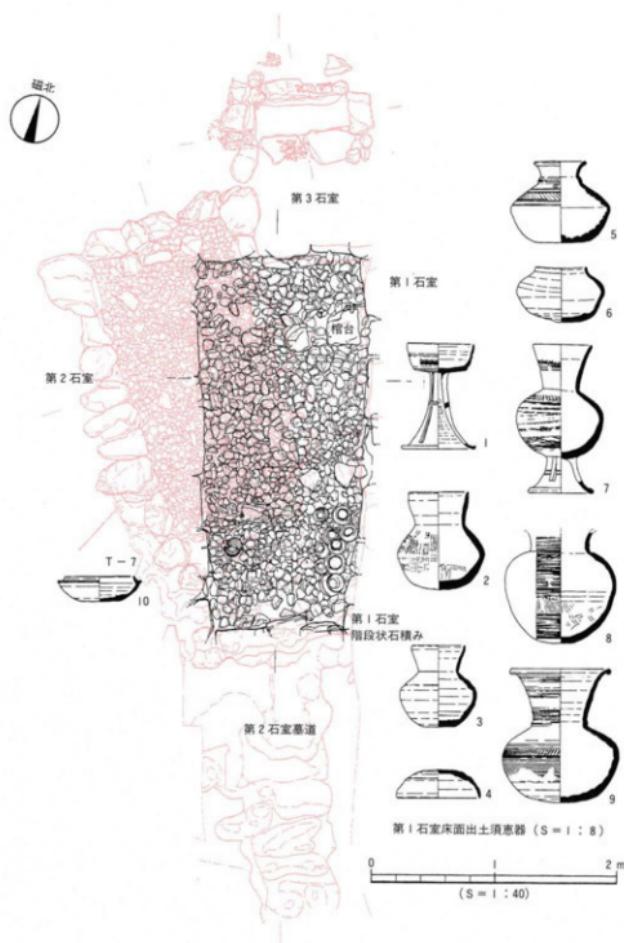


図3 11号填石室平面図

この他の江戸時代の遺構としては、11号墳周辺の調査地南部に位置する池の排水に関わる一連の施設が挙げられる。排水路001は、11号墳の墳丘の南斜面を回り込む位置に設定されている。この水路は、池からあふれ出た水を流す為に設けられたもので、その半ばまで埋没していたが、大雨の際などには現在でも機能しているものである。堤と地山をV字形の谷状に掘削し、底に円礫を敷き詰め、両脇には花崗岩の大きな石を間隔を開けて配置している（写真1）。この石は、水を流す水路の壁の保護の為だけでなく、むしろ装饰を意図したものであると考えられる。池の水があふれた際の排水施設としては、当初、排水路002と右組み001が設定されていた。この水路は、堤の盛り土を最大で深さ3m以上にわたって掘削し、最終的に右組み001に至るものと考えられる。この石組みから先には、溝の続きは延びていないことから、石組みの部分において水を地下にしみ込ませる構造であったものと考えられるが、何らかの不都合により最終的に埋め戻され、古渕を回り込む排水路001に付け替えられたようである。堤の高さは、調査地の中央部において旧地表面から約7mにも達している。南に向かうにしたがって、徐々にその高さを減じ、調査地南端において新たに確認された11号墳が構築されている丘陵部に連結する。したがって、堤の構築によって11号墳は部分的に覆い隠されていたわけである。

11号墳は直径20数mの円墳であると考えられる古墳で、3基の石室が検出された。墳丘の構築と一緒に造られたのが第2石室と第3石室の2基である。その後、第2石室が使えなくなる事情が生じたので、穴を掘って石室の基底部の一部や床面を除く大半の石材を抜き取り、平均で20cm程度の厚さに粘土を貼って第1石室の床面を造っている。第2石室の床面はきれいで片付けられているため、土師器片1点を除いて遺物は出土していない。この第2石室の床面を基礎として活用しながら、第1石室の基底石の一部が設置されているのだが、それらの石は第2石室の基底石と比べて大きく、石材の広い面が石室の壁面となるように配置されている。このように新旧2基の石室を比較すると、石材の使用のあり方に大きな差異が認められる。

第1石室の入り口部分の構造は、スロープ状の短い「墓道」を通って階段状の石積みを降りて玄室内に至る形が採られている。調査時に天井石は失われていたが、石積みが施されている墓道の側壁部分には、基本的に天井石は架からないものと考えられている。したがって狭道と呼べる場所は、閉塞部の石積みが行われている箇所のみということになる。他の石室の例では、この箇所の側壁部分に袖が取り出されたり玄門立柱が設けられるケースもあるが、この石室の場合、無袖の形状が採用されている。第1石室よりも下位に位置する第2石室の墓道は、前者と同様にスロープ状の構造で、地山を削り出すことによって形成されている。この墓道部分の掘削は、第2石室を構築する際の基壇を掘る工程と同時に行われたようである。その後、穴を掘って石材が抜き取られ第1石室が構築されるが、その段階の墓道面は前段階の墓道埋土を削って設定されている。閉塞の石積みはこの面に置かれている（写真6）。

第2石室および墳丘と一緒に構築された第3石室は、非常に規模が小さなものである。側壁はひとつの石か上下2段積みで形成され、板状の3枚の天井石が嵌せられていた。第2石室に近接する木口面の石材が小さく、天井石との隙間に角礫で埋めた構造になっていることから、こちら側が入り口として意識されていた可能性がある。したがって、箱式石棺あるいは小空穴的なものではなく、横穴式石室の一形態であると理解しておきたい。なお、この石室の内部は、天井から10cm程度の空間を残して、親指の先大の円礫を大量に含む土砂によって均一に埋められていた。これら的小礫は、天井石を固定する際にも隙間に詰められており、外部からの流入ではなく、円礫そのものが埋納されたもので

東野お茶屋台遺跡5次調査地

ある。何らかの行為に使用された特別な小碑が、第2石室の基底石を設置する段階に、小型の石室に納められたものと考えられる。

小結 第1石室において埋葬が行われた年代は、床面から出土した須恵器の形状から、6世紀末から7世紀初頭前後であると推測される。棺台である可能性が高いいくつかの碑の配置から、遺物が集中する右側壁沿いに一体の埋葬が行われたことは確実であるが、左側壁側にも候補となる碑が位置することから、複数回の埋葬が行われた可能性も否定できない。ただし墓道埋土の観察からは裏付けがされていない。なお、第1石室からは、2点の銅製の耳環のほか、鉄矛1点、鉄鎌3点が出土したが、鉄釘は一本も出土していない。松山市北梅木町の業佐池古墳（年報VII）において鉄釘を使用しない組み合わせ式の木棺の実例が知られているので、これと同様の形態の埋葬が行われた可能性が高い。

(橋本)

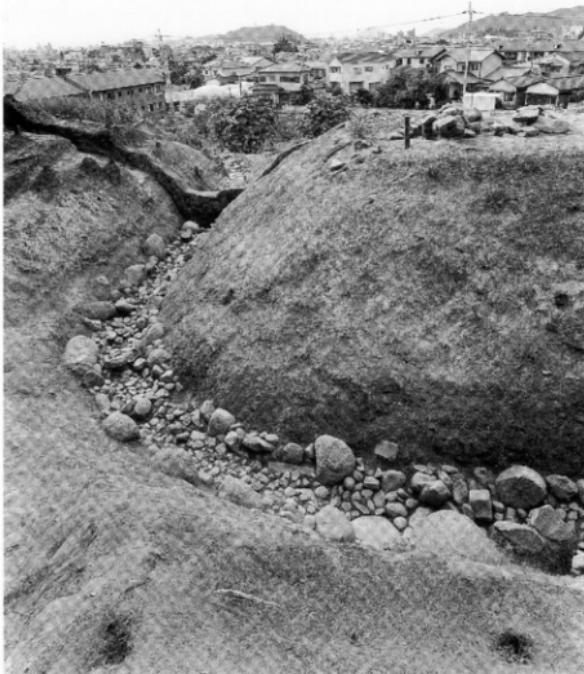


写真1 排水路001完掘状況(東より)

東野お茶屋台遺跡 5 次調査地



写真2 調査地全景（西より）



写真3 11号墳と江戸時代の遺構（北北西より）

東野お茶屋台遺跡 5次調査地

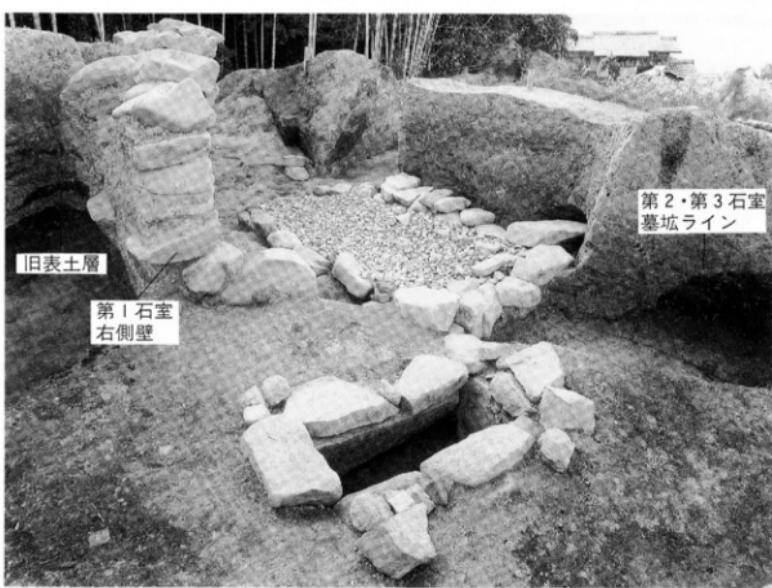


写真4 11号墳第1石室床面検出状況（南より）



写真5 石室の重複状況（南より）

東野お茶屋台遺跡 5次調査地



タルミテカギ
樽味高木遺跡4次調査地

所在地 松山市樽味2丁目278-1・5

期間 平成7年10月11日～

同年12月11日

面積 462m²

担当 河野史知・相原秀仁



図1 調査地位置図

経過 本調査は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「No.81 樽味遺物包含地」内における宅地開発に伴う事前調査である。調査地は石手川左岸の洪積世扇状地上の標高41m前後に立地する。周辺ではこれまでに樽味遺跡（愛媛大学農学部）をはじめ、樽味四反地遺跡、樽味立派遺跡、樽味高木遺跡1～3次調査、東本遺跡など数多くの調査が行われ、弥生時代から中世にかけての遺構や遺物が多数検出されている。特に調査地の北東約150mの樽味立派遺跡では、中国古代貨幣である『貨泉』が中四国では初めて出土している。また、南方約40mの樽味高木遺跡3次調査においては「船」を描いた線刻土器など貴重な資料が出土している。

遺構・遺物 基本層位は、第Ⅰ層耕作土、第Ⅱ層床土、第Ⅲ層黄灰色シルト（地山とよばれるものであり、この面において遺構を検出した）である。

検出された遺構は主に、古墳時代から近世までのものである。古墳時代は土坑8基、柱穴12基を検出している。SK2は平面形は円形、断面形は皿状を呈し推定直径3.6mを測る。SK3はSR3に大半を切られた状態で検出した。残存状況は一辺が約4mの隅丸方形プランの様相を呈している。出土遺物は、上面より須恵器の高环、ガラス玉が出土している。古代は自然流路3条、土坑4基を検出しており、SR3の床面よりSR1・2を検出した。石手川の支流とみられるSR1・2は調査区西側にて合流している。SR1内から多数の礫が検出された。近世は棚列1条、土坑2基、集石遺構1基、溝3条、柱穴6基を検出しており、この集石遺構上面より蓋で束ねられた寛永通寶10枚（古寛永1枚、新寛永8枚、不明1枚）が出土している。

小結 古墳時代の土坑であるSK2は規模・残存状況より円形の竪穴式住居址、SK3・9は隅丸形の竪穴式住居址の可能性が考えられる。古代においては、8世紀代の集落に関連する土坑はSR1・2が機能する以前に埋没したことが考えられる。SR1は暗渠状の施設があったことも想定できる。その後、氾濫によりSR1・2が崩壊し、大きな自然流路SR3が形成されたのである。このSR3は、8世紀中頃まで機能していたことが推測できる。なお、自然流路内からは線刻土器が出土している。この土器は弥生時代後期に属する広口壺の口縁部内面に、格子状の広がりをもつ線刻がなされており、これが何を意味しているか現在のところ不明である。

近世の溝に付随する棚列、その棚列に直交する円形の土坑（SK01・02）や集石遺構（SX01）の関連性も含め、その性格を探ることが、今後の整理上の課題となるものである。

（河野）

樽味高木遺跡 4 次調査地

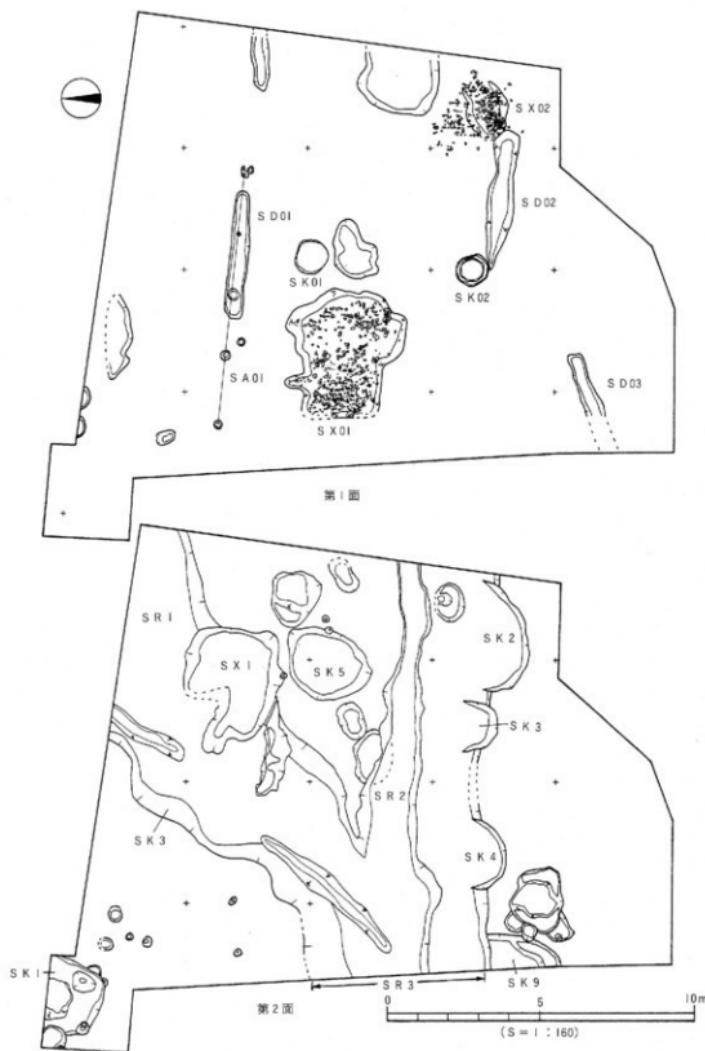


図2 遺構配置図

梅味高木遺跡 4 次調査地

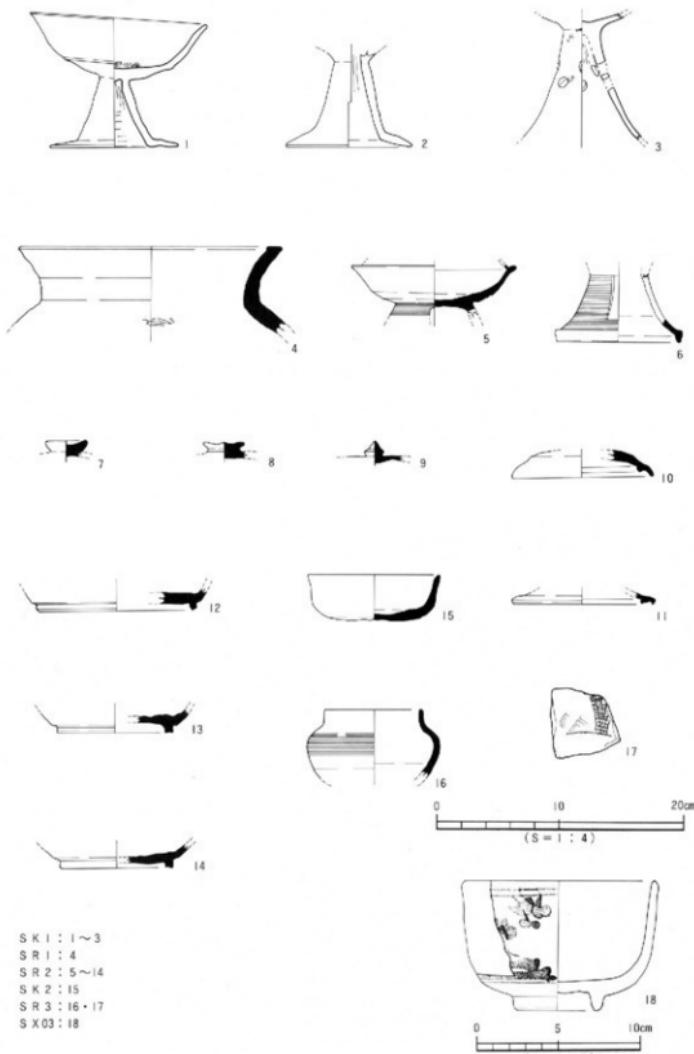


図3 出土遺物実測図

梅味高木遺跡4次調査地



写真1 SRI 碓出土状況（北東より）



写真2 第2面遺構完掘状況（北東より）

クワ バラ タ ナカ 桑原田中遺跡 3次調査地

所在地 松山市桑原5丁目559-2、-4
 期 間 平成7年11月10日～
 平成8年1月12日
 面 積 896m²
 担 当 山本健一・武正良浩



図1 調査地位置図

経過 本調査は「No82 東本遺物包含地」内における宅地開発に伴う事前調査である。本調査に先立つ試掘調査の結果、土坑状遺構、溝、柱穴、土師器、須恵器等、古代から近現代にかけての遺構及び遺物を確認した。そのため、当該地における遺跡の取り扱いについて文化教育課と地権者は協議を行い、開発によって失われる遺跡について、記録保存のために発掘調査を実施することになった。

本調査地に近接する桑原田中遺跡1次及び2次調査地からは、掘立柱建物址、土坑、溝等が確認されている。よって本調査は弥生時代から中世にわたる集落構造解明を主目的とした。

遺構・遺物 検出した遺構は掘立柱建物址1棟、溝10条、土坑10基、柱穴59基、性格不明遺構8基である。掘立柱建物址は調査区南側中央に所在しており、10基の柱穴を確認した。規模は、2×4間の東西棟で桁行長7.7m、梁行長3.3mを測る。柱穴プランは、楕円形と不整円形である。各柱穴とも埋土は灰茶色土で柱痕は確認されなかった。なお各柱穴の基底部からは根石が検出されている。出土遺物は、柱穴(S P 6)の基底部から錢貨が一枚検出された。腐食の為、銭文の判読は不可能であった。また検出された土坑10基の内4基から土師質土器の壺が出土した。

小結 本調査において検出された遺構・遺物は、概ね3時期に分けられる。

1. 中世 土坑SK10からは土師質土器の壺、皿、小皿がセットで出土した。松山平野の土師質土器編年を考える上で好資料(一括資料)となる

ものである。また、SK7、8、9からは同形状の土師質土器の小皿が1点ずつ出土している。

2. 中世 遺構の切り合ひ関係から土坑SK7、8、9、10より後出するのが1号掘立柱建物址である。柱穴から錢貨が出土したことより建立時に「地鎮め」の祭祀が行われた可能性がある。

3. 近現代 調査区内において随所に粘土の抜き取り痕が見受けられた。しかし、詳細な時期については不明である。
 (武正)

H. 33.700 m	
I	耕作土 (11~50cm)
II	茶色埴土 (6~104cm)
III	沼耕作土 (2~20cm)
IV	茶褐色土 (5~30cm)
V	暗灰茶褐色土 (6~32cm)
VI	淡黄茶色粘質土 (3~32cm)
VII	明青茶色粘質砂 (3~22cm)
VIII	灰色粗砂 (10~42cm)

図2 基本層位図 (S = 1:40)

桑原田中遺跡 3 次調査地

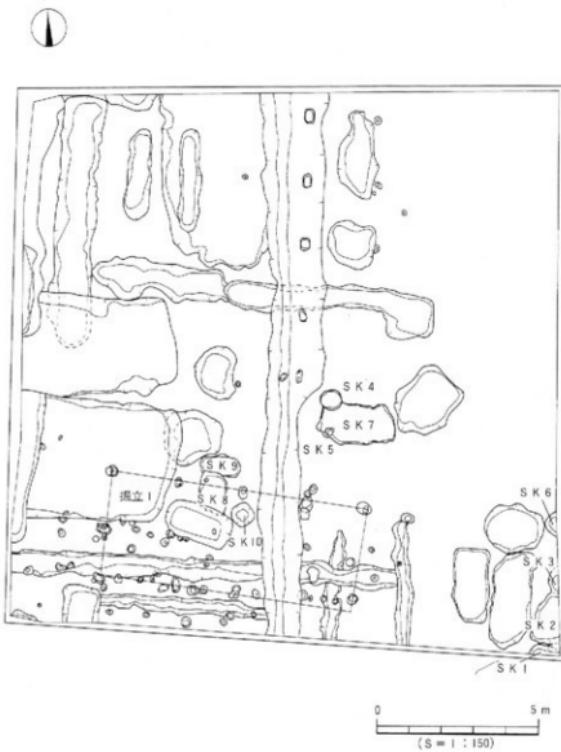


図3 遺構配図

桑原田中遺跡 3 次調査地



写真Ⅰ 完墾状況（北より）

桑原田中遺跡 3 次調査地



写真2 調査区南側完掘状況（北より）

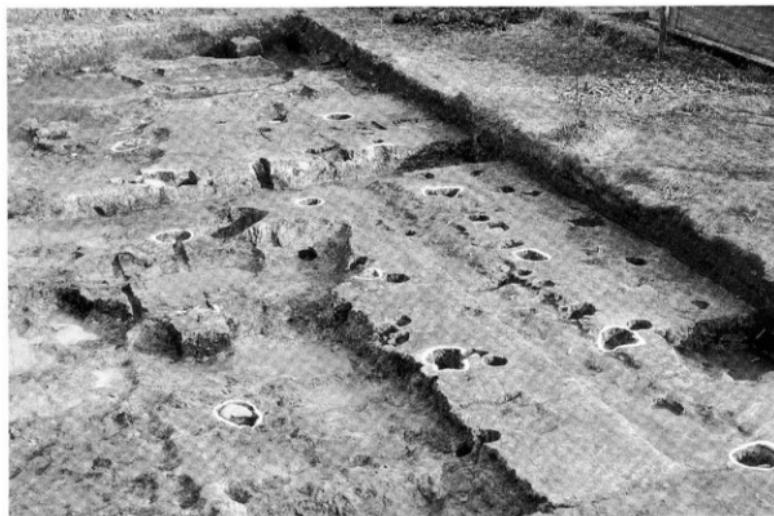


写真3 墳立I（西より）

カマ クチ 釜ノ口遺跡 8次調査地

所在地 松山市小坂4丁目1-28-1-1、2他
期間 平成7年12月1日～
平成8年3月21日
面積 1,485m²
担当 山本健一・相原秀仁



図1 調査位置図

経過 本調査は、民間の土地開発に伴う事前発掘調査である。調査地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「No113 枝松5丁目遺物包含地」内にあたり、周知の遺跡として知られている。

本遺跡周辺では、東本遺跡・拓南中学校遺跡・中村松田遺跡などの調査が実施されており、弥生時代の集落が存在していたことが明らかになっている。調査は、枝松・小坂地区の広い範囲にみられる集落の西南地域の広がりや集落構造の解明を主目的に実施された。

遺構・遺物 調査地は、右手川左岸の標高26.0m前後に立地し、調査以前は水田と駐車場であった。遺構や遺物は地表下20cm～30cmの間で確認された。

調査地の基本層位は、第I層表土、第II層床土、第III層旧耕作土、第IV層包含層（中世）、第V層-a暗灰黄色土、第V層-b灰黄色土、第VI層茶褐色土、第VII層-a浅黄色土（AT火山灰2次堆積）、第VII層-b乳褐色土（AT火山灰1次堆積）、第VIII層オリーブ灰色土である。遺構は第VI層上面で検出した。

検出された遺構は、弥生時代から中世までのもので竪穴式住居址4棟、掘立柱建物址2棟、土坑1基、貯蔵穴1基、溝7条、柱穴31基他である。

S B 2は、直径約5.5mの円形竪穴式住居址で、3ヵ所に張り出し部が設けられた花弁型住居の可能性が考えられる。この住居の主柱穴は5本柱で構成され、内部施設として中央部に炉をもつものである。このような平面形の住居址は、県内でも数例しか確認されておらず非常に珍しいものである。S B 3は隅丸方形を呈し、1辺約5m規模のもので内部施設として中央部に炉が設けられている。なお、住居内からは焼土や炭化材が検出された。柱穴の数よりこの住居は4本柱で建っていたと考えられる。また、柱材が柱穴から良好な状態のままで出土している。両者の竪穴式住居址からは弥生土器・石砲丁・ガラス玉が出土している。

S K 1は円形の土坑で直径74cm、深さ46cmを測る。遺物は、弥生時代後期の菱形土器の他に種子、果実の核、炭化米が出土した。これらの遺物から貯蔵穴と考えられる。

遺物の中で特に注目されるものの中にS D 3出土の破鏡（中国鏡）がある。鏡の大きさは6.1cm×1.1cm、厚みが2.55mmであった。

小結 今回の調査で弥生時代後期の集落が広い範囲で存在することが明らかになった。さらに破鏡が出土したことにより、弥生時代後期における松山平野の主要な集落のひとつであることを確認することができた。S B 2の張り出し部の機能については判然としないが、弥生時代の住居構造研究の上で、貴重な資料を得ることができた。また S K 1出土の植物遺体、住居の炭化材、柱材、土壤の分析をすることにより、当時の食生活や自然環境が復元されるものと思われ、現在調査中である。（相原）

釜ノ口遺跡 8次調査地

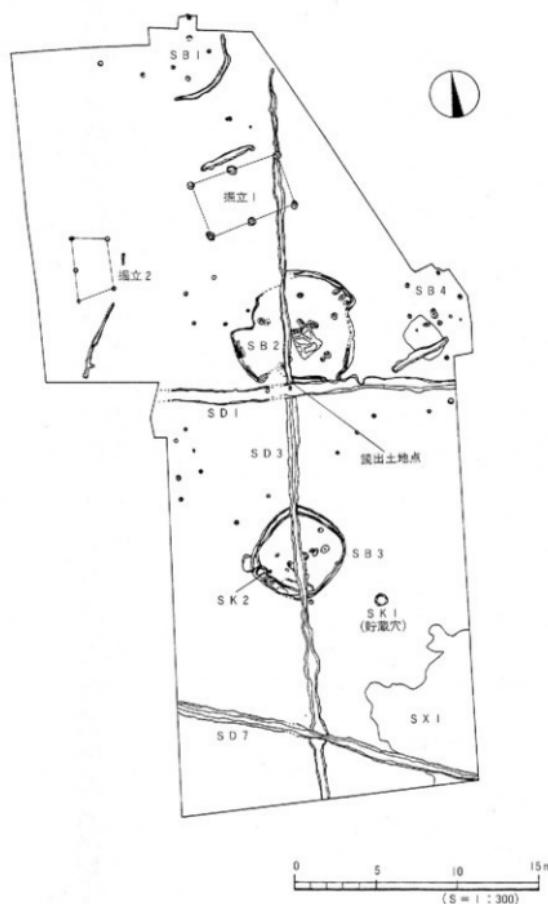


図2 遺構配置図

孟ノ口遺跡8次調査地

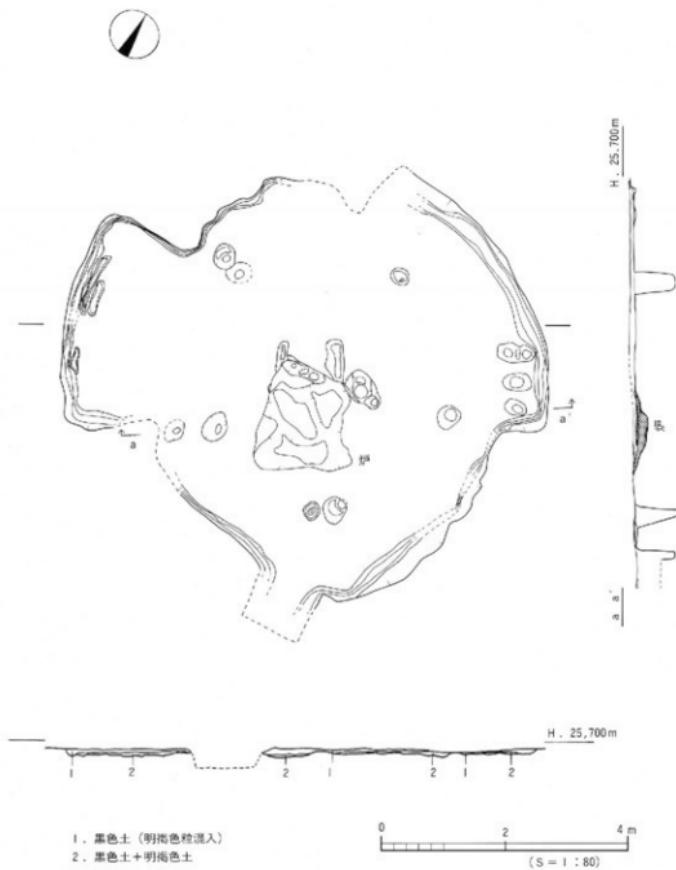


図3 SB2測量図

釜ノ口遺跡 8次調査地

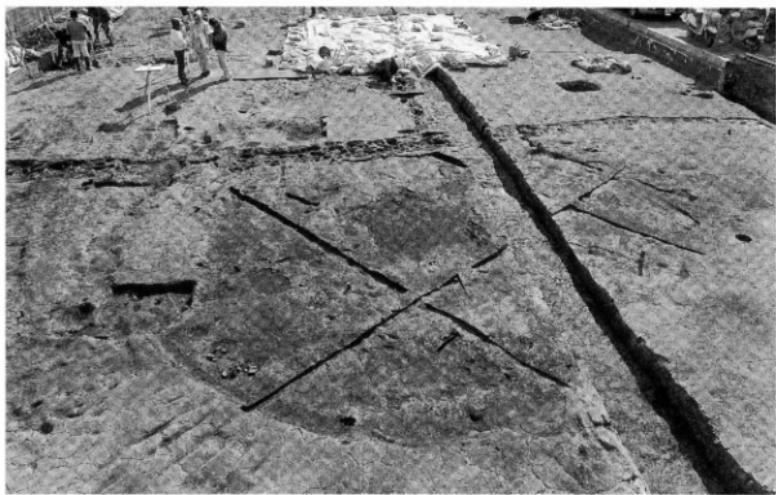


写真1 SB2貼り床検出状況（北より）

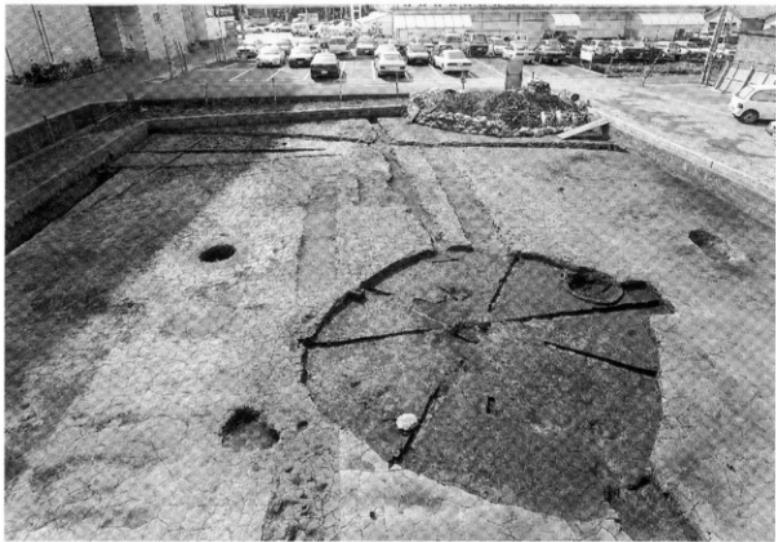


写真2 SB3貼り床検出状況（北より）

イシ イ ヨウ チ エン 石井幼稚園遺跡 2次調査地

所在地 松山市西石井町4-1

期間 平成7年4月24日～

同年7月4日

面積 884m²

担当 梅木謙一・宮内慎一

水本完児



図1 調査位置図

経過 本調査は、西石井町に所在する石井幼稚園の運動場建設に伴う緊急調査である。調査地は松山平野中央部に広がる重信川の氾濫原上、海拔21mに立地する。石井幼稚園遺跡(栗田茂敏1994)は1985年に1次調査が行われ、古墳時代から中世の遺構・遺物が検出され、同時代の集落の存在が明らかになっている。

遺構・遺物 調査地の基本層序は、第I層表土(耕作土+水田底土)、第II層黒色シルト(包含層)、第III層黄褐色シルト(包含層)、第IV層黒褐色シルト、第V層茶褐色砂、第VI層灰色砂疊である。第V層と第VI層は重信川の氾濫により形成されたものである。第II層は古墳時代の遺物包含層である。第III層は細分され第III①層は弥生時代の遺物を包含している。

遺構は第III①層上面と第III②層上面で検出した。第III①層上面では竪穴式住居址1棟(古墳時代中期)、掘立柱建物址3棟(古代～中世)、土坑5基(SK1:中世、SK2～4:弥生時代後期、SK5:時期不明)、土器割り1基(弥生時代後期)、柱穴81基を検出した。また、第III②層上面では柱穴1基を検出している(図2)。

竪穴式住居址SB1は調査区外に統くが、平面形態は方形になるものと考えられる。屋内施設は貼り床を検出したが、炉・壁体溝・主柱穴は未検出であった。土坑SK2は完形品の甕2点が出土しており、貯蔵施設の性格をもつものである。1号掘立柱建物址は3間×5間の東西棟で、床面積は36m²である。2号掘立柱建物址は3間×3間の東西棟で、床面積は約25.2m²である。3号掘立柱建物址は南北3間、東西1間分を検出し調査区外へ統く。床面積は6.38m以上である。

遺物は遺構内及び第II・第III①層中から出土し、弥生時代後期の土器と石器(石庖丁)、古墳～中世の土師器と須恵器、陶磁器がある。

小結 本調査においては弥生時代から中世に至る遺構と遺物を確認することができた。今回の調査は1次調査では確認できなかった弥生時代後期の資料を得ている。当地域に弥生時代後期の集落が存在していたことを新たに示すものである。古墳時代の竪穴式住居址SB1は、1次調査においても同時期の住居址が検出されており、当地域の古墳時代中期における集落構造解明の追認資料になるものである。古代～中世にかけての掘立柱建物址の検出は1次調査にはみられなかったものである。なお、1次調査検出の10世紀代の溝は当調査地では確認できなかった。

(水本)

石井幼稚園遺跡 2次調査地

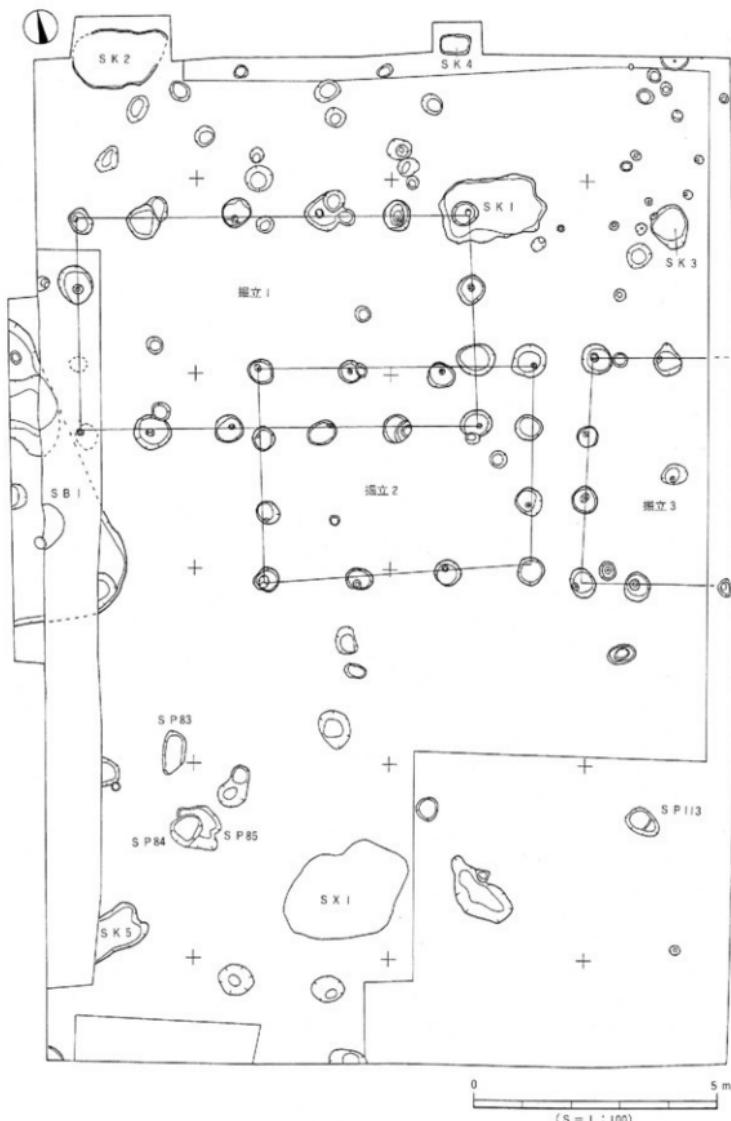


図2 遺構配置図

石井幼稚園道路 2次調査地

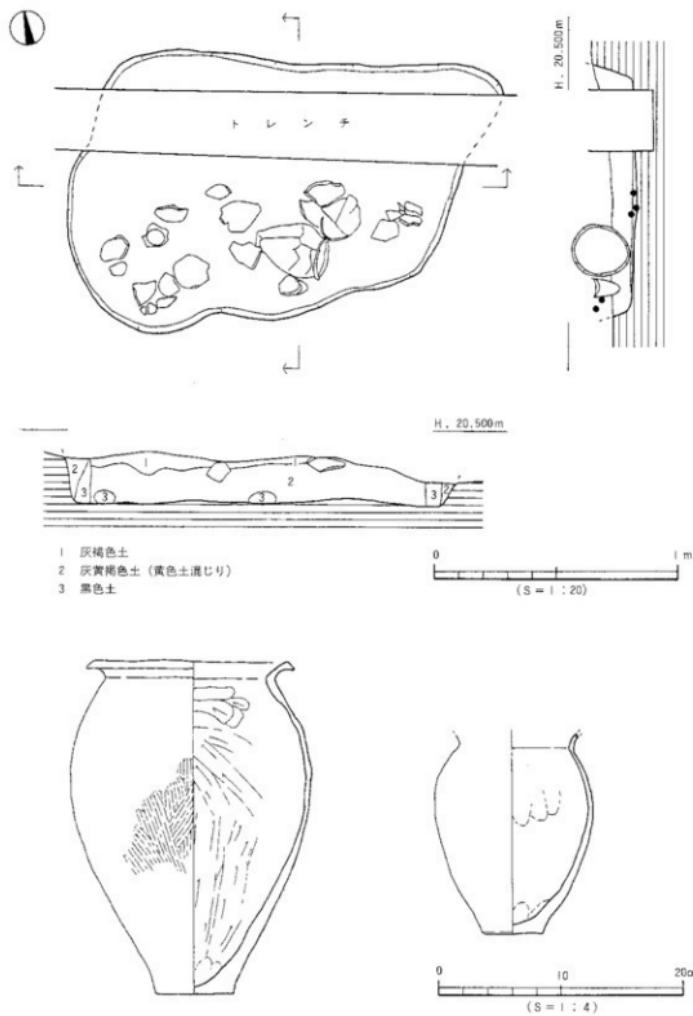


図3 SK 2測量図・出土遺物実測図

石井幼稚園跡 2次調査地

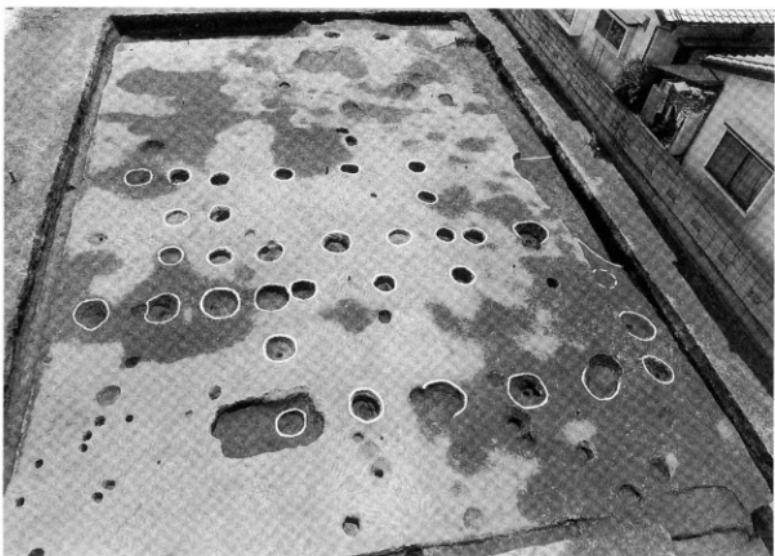


写真1 完掘状況（北より）



写真2 SK2 遺物出土状況（南より）

キタ ク メ ジョウレン ジ 北久米淨蓮寺遺跡 5次調査地

所在地 松山市北久米町703番地
期間 平成8年2月15日～
同年3月31日
面積 252m²
担当 河野史知・武正良浩



図1 調査地位置図

経過 本調査は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「No124 北久米遺物包含地」内における宅地開発に伴う事前調査である。調査地は、来住台地から福音寺にかけての低丘陵地上の標高31.5mに立地する。

調査地周辺ではこれまでに、北西に国道11号線バイパス建設に伴う発掘調査や福音小学校構内遺跡、筋違遺跡、南東の来住台地には、久米高廬遺跡群、来住遺跡群など有数の遺跡地帯があり、弥生時代から古代にかけての遺構や遺物を多数検出している。また、隣接する北久米淨蓮寺遺跡1～4次調査においては古墳時代から古代に至る集落に関連した遺構・遺物を多数検出している。

遺構・遺物 調査地は調査以前は水田である。基本層位は、第Ⅰ層耕作土、第Ⅱ層床土、第Ⅲ層明黄色シルト（北側は小礫を多く含む）の地山であり、旧地形は西側へ緩傾斜をしていたことが窺える。

検出された遺構は古墳時代から中世のもので、掘立柱建物址5棟、竪穴式住居址1棟、土坑1基、溝3条、柱穴28基、小穴36基、倒木痕6基、性格不明遺構5基を検出した。

竪穴式住居址S B 1は、建物の大部分が調査区外へ延びており、倒木3を切り、掘立3・4に切られている。平面形は隅丸方形を呈し、規模は南北5.5m、東西2.2m以上、壁高は10cmを測る。主柱穴、周壁溝等の施設は未検出である。

掘立2・3の主軸は真北より西へ11～12°振っており、柱穴の規模が70～100cmの大型のものに対し、掘立1・5は主軸が西へ26～39°振り、柱穴の規模が35～80cmである。他に、主軸がほぼ真北で柱穴の規模が30～65cmの小型のものに分けられる。掘立1は2×3間の南北棟であるが、他は調査区外へ延びており規模は不明である。時期決定の出来る遺物は掘立2より6世紀後半の須恵器の环身片が出土している。

S X 1は平面形が長方形で、東西に長く浅い人為的な遺構であり、床面に凹凸がみられる。

S D 1は、2次調査で検出した南北の正方位を指向する区画施設である溝のつながりであり、北側は調査区外へ延びる。

小結 今回の調査では、当地域における古墳時代中期から中世にかけての遺構を検出した。掘立柱建物址の時期は古墳時代後期であり、掘立2・3は柱穴の大きさに比較して柱痕は小さい。S X 1は、中世期における家畜の水飲み場として使用していたことも考えられる。これらのことから淨蓮寺地区で見られた集落の北西部への広がりを確認することができた。今後の課題として、掘立柱建物址の詳細な重複関係を検討する必要がある。

(河野)

北久米淨蓮寺遺跡 5 次調査地

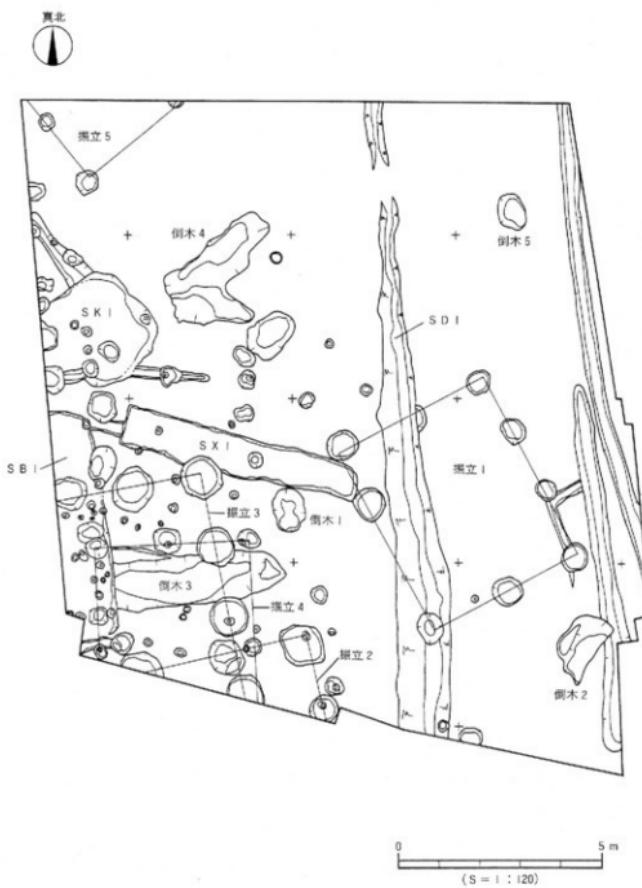


図2 遺構配置図

北久米淨蓮寺遺跡 5 次調査地

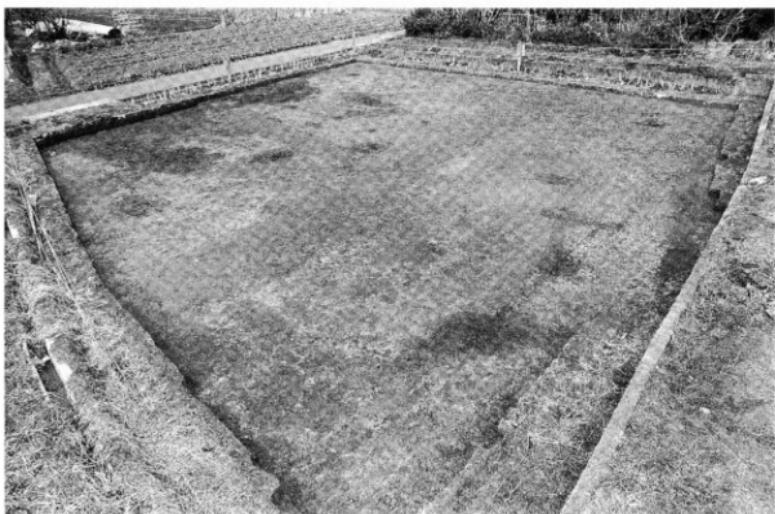


写真1 遺構検出状況（南東より）



写真2 遺構完掘状況（東より）

北久米淨蓮寺遺跡 5次調査地



写真3 SB1 完掘状況（北より）

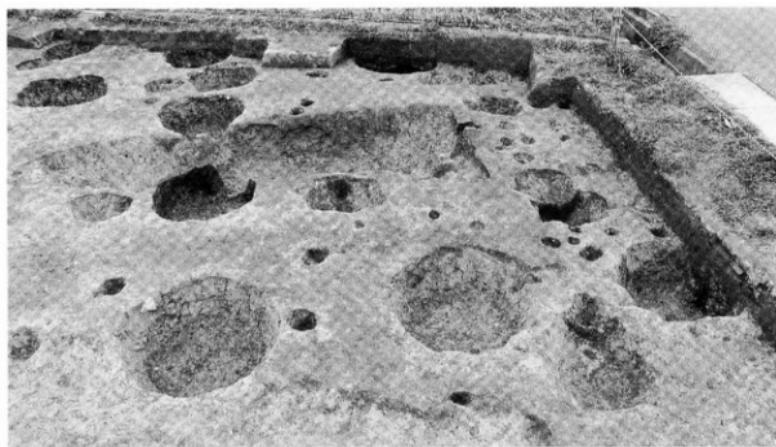


写真4 挖立2～4 完掘状況（北より）

乃万の裏遺跡 2次調査地

所在地 松山市北久米町773-1外
期 間 平成7年7月17日～
同年11月24日
面 槍 2,475m²
担 当 栗田茂敏・加島次郎・小玉亜紀子

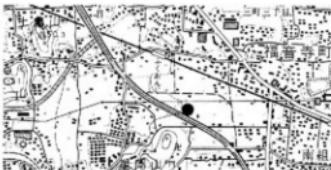


図1 調査地位置図

経過 本調査は、宅地開発に伴う事前調査である。調査地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「No116 川付遺物包含地」内にあたり、周知の遺跡地帯として知られている。本調査地は、松山平野の主要河川である重信川の中流右岸を東から西へ流れる川附川や小野川によって形成された扇状地間の洪積台地上の標高27m前後に立地する。同包蔵地内ではこれまでに、福音小学校構内遺跡や筋違遺跡（A～J）など多くの調査が実施されている。また、調査地の東には5世紀～7世紀段階の集落遺跡である北久米淨蓮寺遺跡が位置している。既往の調査成果から、当地周辺では弥生時代から中世にかけての集落遺跡が存在していたことが明らかとなっている。本調査は、弥生時代から中世にわたる集落関連構造の広がりと、各期の集落構造の解明を主目的に実施した。

遺構・遺物 調査地は、調査以前は耕地整備された水田であった。基本層序（図2）は、第I～III層までが現在の水田にかかる土層であり、地表下40～60cmまで開発が及んでいる。この第III層までを重機による掘削で除去している。

第IV層（灰褐色土）は弥生～中世の遺物包含層であり、層厚15～20cmを測る。本層上面で、中世以降の比較的新しい時期の遺構を検出している。第V層（黒褐色シルト質土）は弥生後期～古墳時代の遺物包含層であり、層厚30～35cmを測る。本層上面で古墳～中世の遺構を多数検出した。第VI層（黄褐色シルト質土）は「地山」と呼ばれる層であり、人によって深掘りをおこなったが遺物は出土しなかった。本層上面では弥生～古墳時代を主体とする遺構と旧河川を検出した。なお、第V層の調査中に、遺物集中地点（SX5）を検出し多量の遺物を確認している。

弥生時代の主要遺構は、区画溝（SD10）、遺物集中地点（SX5）、旧河川（SR1）である（図3～1期）。SD10は、遺存は良好ではなく、後述するSD11に大きく切られる。幅6m以上を割り、埋土から判断して、恒常に流水があったとは考え難い。遺物は、土器が溝の西端から比較的まとまって出土した。SX5は、面的に遺物の集中が認められたところである。遺物は、調査区東端付近で11m×7mの範囲に集中しているが、遺物に伴う人為的な掘り込みは認められない。遺物は、拳大の円盤とともに多量の破碎した土器が出土した（図4）。甕と壺を主体として鉢、高杯、器台、支脚が伴う。SR1は、東西に走る幅10mを越える旧河川である。洪積台地端に沿うかたちで旧河川が東西方向に流れていったと考えられる。旧河川埋没土である砂礫上からは、磨滅の著しい弥生土器片、土師器片、須恵器片等が多量に出土したが、その多くは小破片であった。このことからSR1は弥生後期から古墳後期にかけて機能していたと理解できる。SD10、SX5は弥生後期後半段階に位置付けられる。

古墳時代の主要遺構は、区画溝（SD9・SD11）、性格不明遺構（SX12・SX13）、SR1であ

乃万の裏遺跡 2次調査地

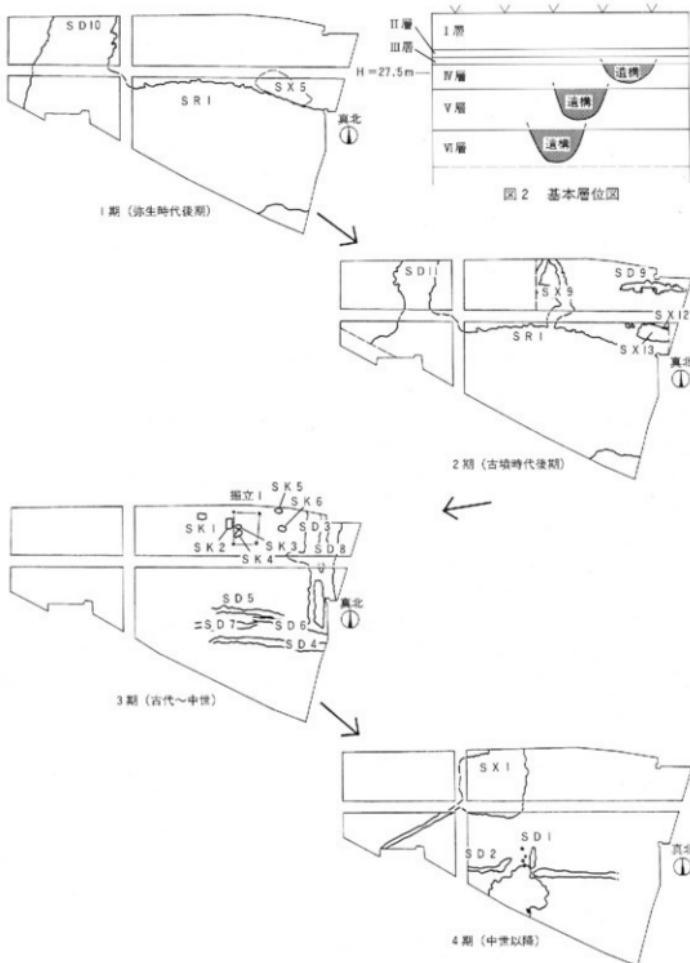


図3 遺構の変遷図 (S=1:320)

乃万の裏遺跡 2次調査地

る（図3－2期）。S D11は幅1.4～5.6mを測り一定していない。埋土は拳～人頭大の円礫を含む砂礫土で構成されており、洪水のような土石流的な流れによって本遺構が埋没したと考えられる。埋土中から磨滅した弥生土器片、土師器片、須恵器片が出土し、特に須恵器片が多く認められた。また、完春で出土した翡翠製の丁字頭勾玉は注目すべき遺物として挙げられる。性格不明遺構は、いずれも須恵器片が多量に出土した不整形の土坑状の遺構である。これらの古墳時代の遺構は、6世紀後半～7世紀段階に位置付けられる。

古代～中世の遺構は、1号掘立柱建物址（掘立1）、土坑群（SK 1～6）、小溝群（SD 3～8）である（図3－3期）。掘立1は、梁間、桁行とともに1間の建物である。梁間2.4m、桁間3.1mと小規模である。建物を構成する4基の柱穴からは出土遺物が認められず、埋土と規模から時期を想定している。土坑群は、調査区の中央北寄りに6基を検出している。形態や規模に大きな差異は認められず、また、分布範囲が限定するが、切り合い関係にはないことから計画的に構築されたことが考えられる。土坑に伴う遺物はわずかしかみられないことから、遺構の時期や性格を特定することは困難である。小溝群は幅1m前後の規模を有する。南北方向を指向する溝は、田畠に水を引く小規模な水路の可能性がある。SD 3からは土師器の三足付き羽蓋片が出土している。

中世以降の遺構は、第IV層上面で検出された、性格不明遺構（SX 1・2）、小溝群（SD 1・2）、柱穴群（SP 1～6）である（図3－4期）。SX 1は方形プランの土坑状遺構で、南西部に幅の狭い小溝が取り付くものである。埋土の堆積状況から2次的に埋め戻された可能性が高く、本來は溜め池として機能していたことが考えられる。

包含層からは多量の遺物が出土している。遺物には弥生土器（後期）、土師器、須恵器、瓦器のほかに、石庖丁、刀子、瓦、貿易陶磁器等があり、本調査地を含めた周辺地域が弥生後期～中世の複合遺跡として機能していたことが理解される。

小結 本調査において、弥生～中世にわたる遺構と遺物を確認することができた。このことは当時の人々が積極的に土地開発をおこなったことを示し、既往の調査を裏付けるものであった。弥生時代の遺構は、いずれも該期の景観ならびに集落構造を考える上で有効な資料となるものである。SD 10やSX 5は、福音小学校構内遺跡で検出されたSD 3や土器窯りと有機的な関係にあるものと考えられる。これらの遺構から出土した多量の土器は、近年精力的に進められている該期の土器編年を考える上で有効な追加資料となるものである。確認された二層の遺物包含層から弥生後期と古墳後期に時期比定されるものが多く出土している。これは、多量の余剰生産物を生み出せる拠点的な集落が該期に当地周辺に存在したことを示唆するものである。さらに、古代～中世の遺構と遺物の存在は、占墳時代以降も継続して土地開発が行われていたことを示している。

なお、本調査の詳細は報告書にておこなうものとする。

（加島）

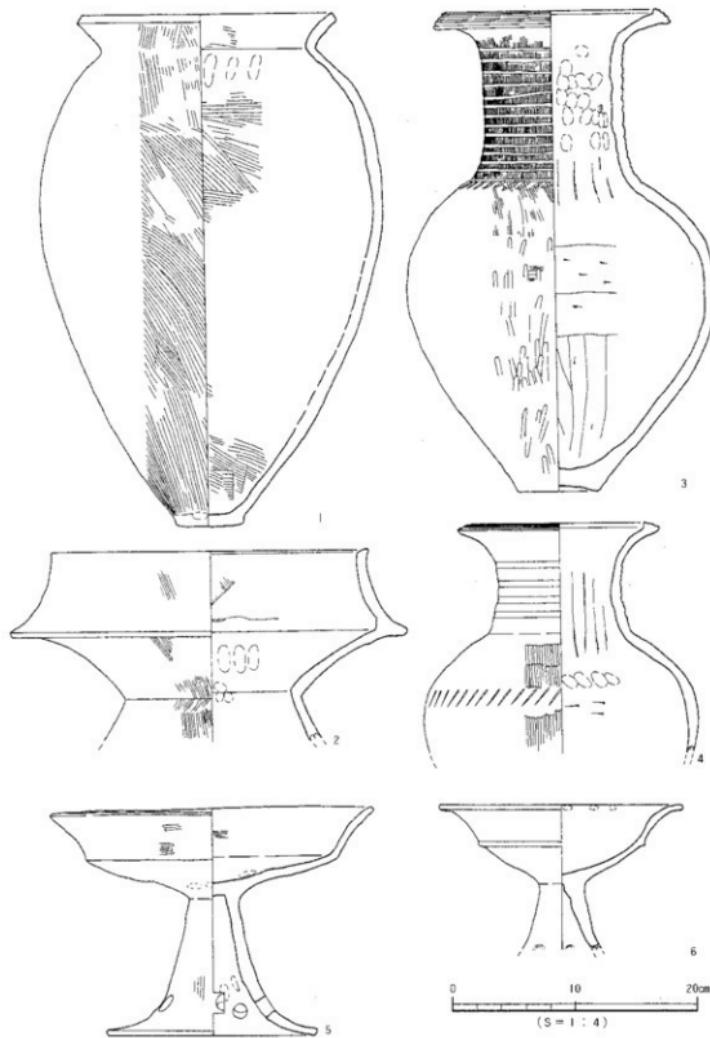


図4 S X 5出土遺物実測図

乃万の裏遺跡 2次調査地



写真 1
S X 5 遺物出土状況遠景
(東より)



写真 2
S X 5 遺物出土状況近景
(北西より)

乃万の裏道路 2次調査地



写真 3
S D 10検出状況
(南より)



写真 4
調査地全景
(南西より)

久米高畠遺跡24次調査地

所在地 松山市南久米町723-1外

期間 平成7年4月4日～
同年5月31日

面積 約995m²
担当 橋本雄一・小笠原善治



図1 調査地位置図

経過 病院の病棟建設に先だって、国庫補助事業として発掘調査を行った。調査地点は、平成6年度に調査を行い弥生時代の大溝が検出された同23次調査地（年報VII）の東50m付近に位置する。西方約150mには、久米官衙遺跡群を構成する官衙関連遺構が位置しているほか、南には方一町規模の区画溝によって囲まれた二重の柵列である「回廊状遺構」などが隣接している。また、付近は弥生時代の遺構・遺物の密度が高いことでも知られており、今回の調査は官衙遺跡群および弥生集落の周辺部への広がりを知る目的で実施された。

遺構・遺物 官衙遺跡群との関係を積極的に説明できる遺構や遺物は、ほとんど確認されなかった。ただし、調査区の北東部で検出された掘立001については、その方向性がほぼ正方位に対応することと、平面形状が梁間2間の東西棟であることなどから、官衙成立期前後ものである可能性が高い。調査区の南東部にも多くの柱穴が認められる事から、この時期の建物が東側隔棟地にかけて広がっている可能性も考えられる。

この他、古墳時代後期の遺構としてはS B001・002・003が確認された。S B003からは、6世紀後葉の須恵器の坏身の破片が出土している。住居の床面付近が僅かに遺存していたものである。S B001と002は、ともに方形で、掘り方の底面から5cm程度の厚さに粘土質の土を貼り床された状況が確認された。壁材の痕跡は識別できなかったが、壁の押さえに使用されたと考えられる上層も確認されている。両者の間には新旧の関係があるものと考えられるが、切り合い関係が認められないことから判断できなかった。

弥生時代の遺構としては、長方形の土坑10基の検出が特筆される。近年掘られた多数の擾乱坑の存在のため、正確な数は特定できないが10基を越えていることは確実である。最大規模のSK015（図3）の場合、長軸の長さ3.6m、短軸の長さ1.8m、地山上面からの深さは0.4mで、長軸線上に一对の小ビットが掘り込まれている。この場合、ビットは土坑の下場のライン上に一致するように掘られているので、上場のラインがやや外側へ膨らんでいる状況が認められた。この一对のビットはSK001においても認められるが、この場合、掘り方に接する位置もしくは、やや外側に掘り込まれている。この他にも同様のビットの存在を復元可能な土坑が有ることに加えて、過去の隣接地における調査の際にも同じ特徴を持つ土坑がいくつか検出されていることから、2本の柱によって支えられる上部構造を伴っていた可能性が考えられている。この土坑には他のものと同様に、下半部にはブロック状の地

久米高畠遺跡24次調査地

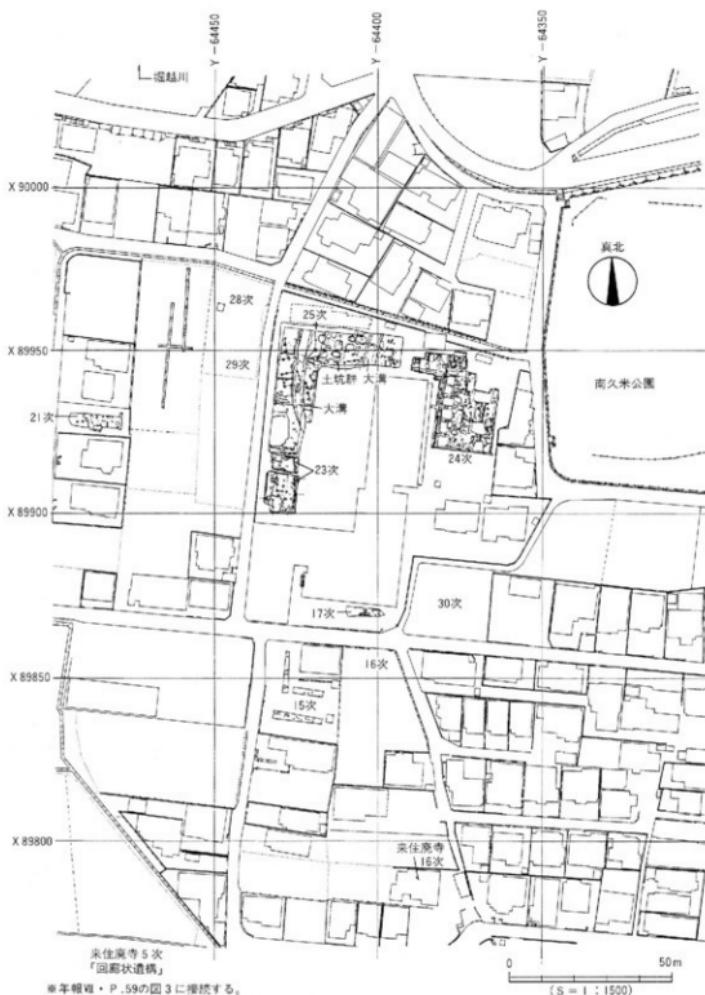


図2 調査区位置図

久米高塙遺跡24次調査地

山泥じりの土、上半部には泥じりの少ないやや黒味の強い土が堆積していた。土は概ね水平に堆積しており、流れ込み状の土層が確認されたのは調査区北部に位置するS K020の1基のみであった。

この長方形土坑の特徴のひとつに、比較的狭い範囲に群れた状態で検出される点をあげることができる。少なくとも7基を越える数の土坑が、調査地の西壁沿いにおいて部分的に重複するか極めて近接した状況で検出されている。一方、調査区の中央から東にはほとんど分布していない。この状況は、この土坑の性格を考えるうえで重要な観点となる可能性がある。また、その方向性について着目すると、大きく2群に区分可能である。S K015やS K001に代表される長軸が東西方向のものと、S K006やS K013などの南北方向を向く土坑が近接して掘り込まれているのである。これは、特定の目的のもとで、ある程度長期にわたって一定の区域が選ばれたことを示しているのではないかと考えられる。

問題となるのはその性格であるが、当該地域の一般的な住居址の床面よりも明らかに深く掘り込まれたうえ、覆い屋も伴う可能性があることから、貯蔵施設あるいは作業小屋的なものを想定しておきたい。しかし後者の場合、住居址のレベルと比較してこれほど深く掘る必要性を説明できないことから、ここでは前者の可能性を考えておきたい。なお、墓である可能性についても検討したが、そのような痕跡は一切確認されなかった。先に述べた配置の在り方も、弥生時代の墓に特徴的に認められる状況とは異なっている。

いずれの土坑からも、遺物は少量しか出土していない。

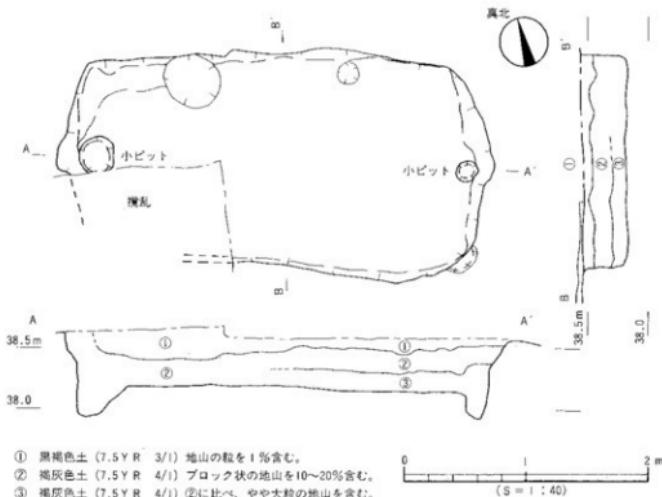


図3 S K015測量図

久米高畠遺跡24次調査地



*メッシュは国土地理院が座標系に対応する。
*スクリーン・トーンは、擾乱を受けている箇所を示す。

図4 造構配置図

久米高畠遺跡24次調査地

小結 これらの土坑を、貯蔵のための施設として理解しようとする場合、西側に隣接する同23次調査地ならびに引き続いて調査された同25次調査地（図2）において検出された大溝との関係が問題となる。25次調査では、2条の大溝が平行に位置し、その間の空間と溝の東側区域に長方形土坑が多数分布する状況が明らかにされている（P69・図2）。一方これらの土坑は、溝の西側には存在しないことから、その分布範囲は大溝によって規定されているものと考えられる。したがって将来的には、「環濠」によって囲われた区域内に貯蔵施設が立地する「環濠集落」としての位置づけを行うことが可能になるかもしれない。その所属時期は、大溝出土の土器などから弥生時代前期末から中期の初頭頃を中心とする時期であると考えられる。しかし、当該期の住居址の確認例がほとんど無いことに加えて、2条の大溝に時期差が有在するのか、あるいは同時併存の可能性があるのか不明なため、集落としての構造の把握を行える段階には至っていない。平成8年度中に、本調査地の南および西側に隣接する複数の地点において本格調査が予定されているので、広範囲に展開するこの弥生時代の遺跡の全容解明に向けて、総合的な視点に立った整理作業を進めていきたいと考えている。

（橋本）

関連文献：橋本雄一・相原秀仁 1995「久米高畠遺跡23次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報』VII
平成6年度 松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター



写真1 調査地全景（北東より）

久米高畠遺跡24次調査地

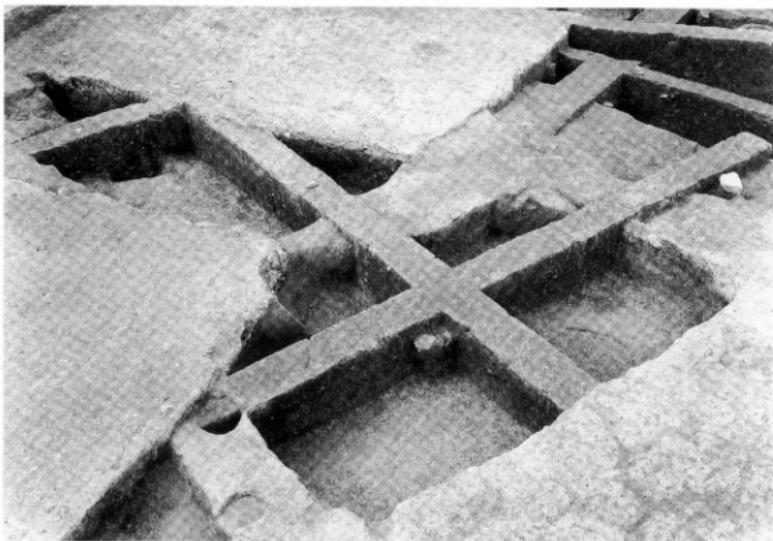


写真2 SK006・SK011土層堆積状況（南南東より）

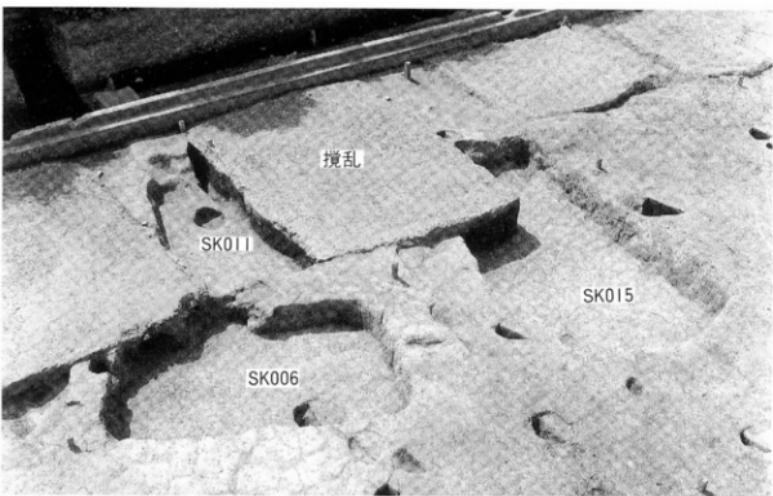


写真3 土坑群完掘状況（南東より）

久米高畠遺跡25次調査地

所在地 松山市南久米723-1他

期間 平成7年7月17日～

同年7年8月31日

面積 844m²

担当 高尾和長・宮内慎一



図1 調査地位図

経過 久米高畠遺跡25次調査地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地「No127 来住庵寺跡」にあたる。同包蔵地のある来住舌状台地には、近年の調査で来住庵寺跡や大規模な回廊状遺構、官衙関連遺構が存在していることが明らかになっている。本調査地の南方300mには、指定史跡の「来住庵寺」があり、調査により塔基壇や僧坊、白鳳期の瓦が確認されている。本調査地周辺でも多数の調査が行われており、久米高畠遺跡〔西尾幸則・池田一学 1989・1991〕は、古代の官衙である可能性が高くなってきた。このうち『久米評』線刻須恵器が出土した久米高畠遺跡7次調査地は注目されるところである。また、本調査地に隣接する久米高畠遺跡23・24次調査地からは、古代の集落跡以外に弥生時代の住居址、土坑、大溝など弥生集落に関連する遺構が多数検出されている。

よって、当該地における埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲やその性格を認識するため、原因者の協力のもと調査を開始した。

遺構・遺物 本遺跡は、松山平野東部に広がる来住舌状台地の北部域、標高39.2mに立地する。本調査では、掘立柱建物址3棟（擬立1～3）、土坑16基（SK1～16）、溝2条（SD1・2）、柱穴100基を検出している。SD1・2は、弥生前期末～中期初頭の土器が出土しており、特にSD1からは瓶形土器・壺形土器など多量の土器が出土している。また、SD1・2は、深さ、埋土が同じであり出土遺物も弥生時代前期末～中期前半のものである。これらのことより、SD1・2は弥生時代中期前半の同時期のものであると考えられる。その他の遺構については、出土遺物が少量であり時期決定は難しい遺構もある。

小結 本調査で検出したSD1は、調査区南側に隣接する23次調査地で検出した溝に続くものである。また、SD2はSD1と平行に伸びるものと思われ、来住台地での弥生時代の大規模な集落の可能性を示す重要な資料となるものであり、今後、調査地周辺の調査は細心な注意をはらう必要があると考えられる。また、今回、土坑を16基検出した。そのうち、SD1とSD2の間で15基を検出した。その中で時期比定できるのはSK5である。SK5はSD1を切っていることと、出土遺物より弥生時代中期前半～後半にかけての土坑と考えられる。その他の土坑についても、出土した小量の遺物と埋土から考えるとSK5と同時期の土坑と思われる。このような土坑は、24次調査地からも検出しており不明な点があり、今後の調査での解明が必要と思われる。

（高尾）

久米高畠遺跡25次調査地

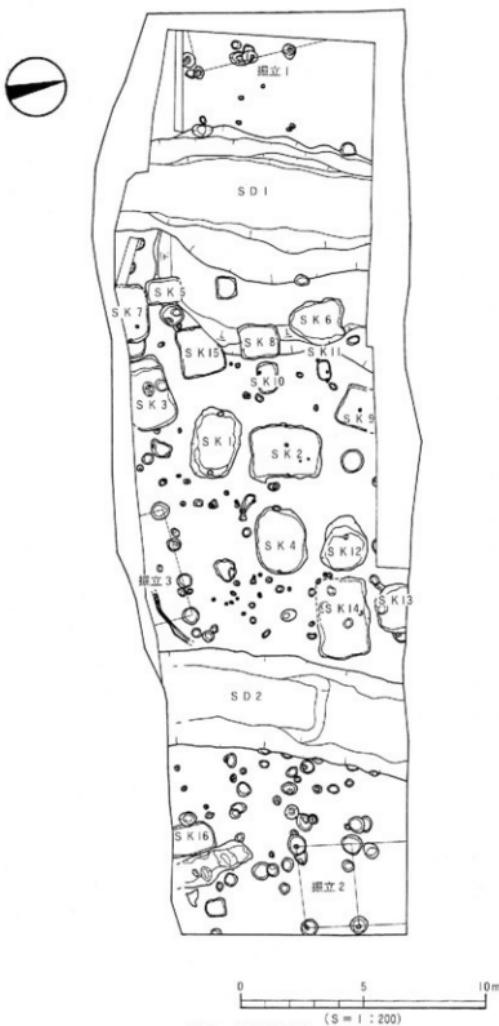


図2 遺構配置図

久米高畠遠野25次調査地

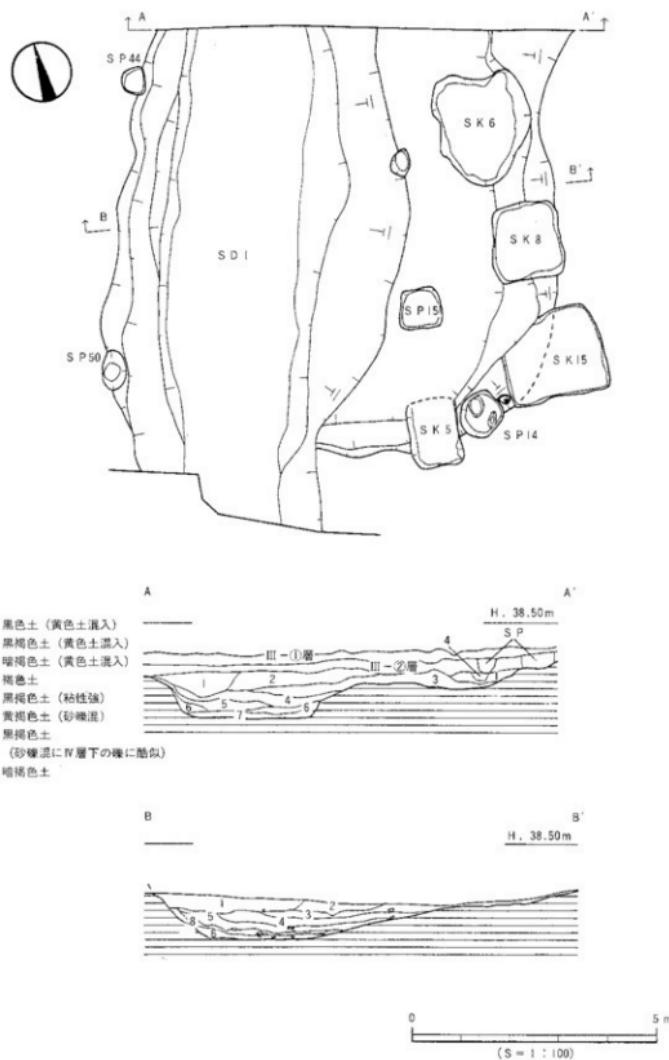


図3 SD I測量図

久米高畠遺跡25次調査地

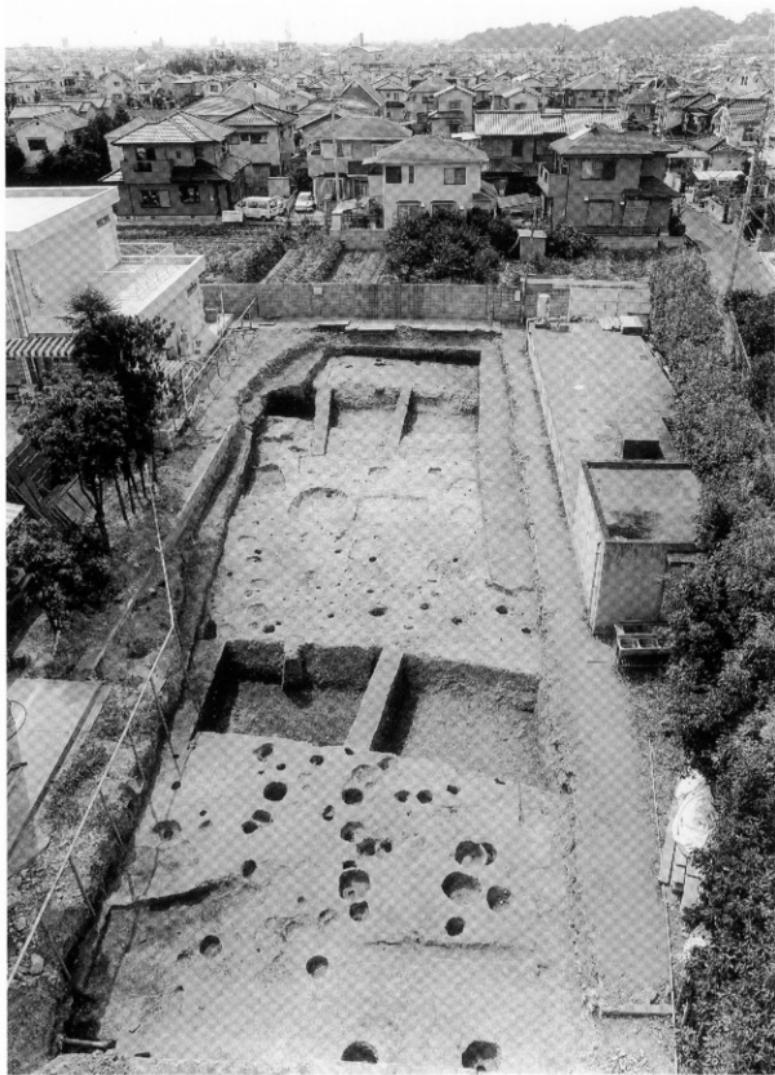


写真1　遺構検出状況（東より）

キシマチ 来住町遺跡6次調査地

所在地 松山市来住町533-1
期 間 平成7年12月11日～
平成8年2月9日
面 積 385m²
担 当 栗田茂敏・加島次郎・小玉亜紀子



図1 調査位置図

経過 本調査は「No.127 来住庵寺跡」包含地における宅地開発に伴う事前の発掘調査である。調査地は、松山平野東部の来住台地上、標高約39mに立地している。台地上では、来住庵寺跡、官衙関連遺構のある久米高畠遺跡群や来住町遺跡などが密集しており、绳文時代から古代にかけての遺構が数多く確認されている。調査地点は来住庵寺跡の東方約200mに位置する。今回の調査は北側に隣接する3次調査との遺構のつながりを確認することを主目的として行った。

遺構・遺物 基本層位は以下のとおりである。第Ⅰ層造成土(約90cm)、第Ⅱ層褐色粘質土(約20cm)、第Ⅲ層褐色粘質土(約10cm)、第Ⅳ層暗褐色粘質土(約20cm)、第Ⅴ層黒褐色シルト土(約10cm)、第Ⅵ層暗褐色シルト土とにびい黄橙土の混合土、これは地山漸移層である(約10cm)。そして第Ⅶ層黄色粘質土、地山である。このうち、第Ⅳ・第Ⅴ層が遺物包含層である。調査地の地山面は3次調査から南に向かって低く緩やかに傾斜している。

遺構は第VI層とVII層上面での検出であり、いずれの遺構も残存状況は良好とはいえないかった。検出遺構は溝状遺構59条、土坑状遺構6基、柱穴約170基、性格不明遺構9基である。遺物は遺構出土のものが多く、弥生土器、土師器、須恵器、中世の土器、近世の土器、そして石器などが出土している。いずれも細片であった。

主な遺構は弥生時代～古墳時代にかけての性格不明遺構9基と溝1条があげられる。性格不明遺構(SX1)の平面形は不整形であり、断面形は東側が浅くテラス状で、西側が深い。埋土は3層に分けられる。遺物は西側の中層(黒褐色シルト)より二次焼成を受けた弥生土器片と石器片が集中して出土した。また、須恵器片も同埋土より出土している。焼土は全く確認されなかった。のことより、別の場所で二次焼成を受け、SX1に持ち込まれたものと考えられる。

他には、中世以降の溝1条と小溝群があげられる。溝(SD5)は耕作に係わる遺構であろう。性格は耕作地を区画する溝または、排水施設の可能性が考えられる。小溝群は耕作に伴う痕、鋤先遺構と考えられる。小溝の方向は2方向あった。これは耕作地の方向がある時期変わったためであろう。

小結 本調査においては2時期の遺構が確認できた。ひとつは弥生時代～古墳時代にかけての遺構で、もうひとつは中世以降の遺構である。北隣地の3次調査地では7世紀中葉の土坑や竪穴状遺構が確認されている。遺構の形状などから6次調査の性格不明遺構と類似しており、これらは一連の遺構の可能性が高い。3次調査では掘立柱建物址が検出されているが、6次調査では確認できなかった。また、来住庵寺や官衙遺構に直接関連する遺構は確認されなかった。今後の課題は来住町周辺に隣接する遺跡を検討し、来住町遺跡と来住台地の各時期における土地開発を解明することである。

(小玉)

来住町遺跡 6次調査地

【文献】

藤原敏秀 1992 「来住町遺跡 3次調査」『来住・久米地区的遺跡』松山市文化財調査報告書第27集
(財)松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター

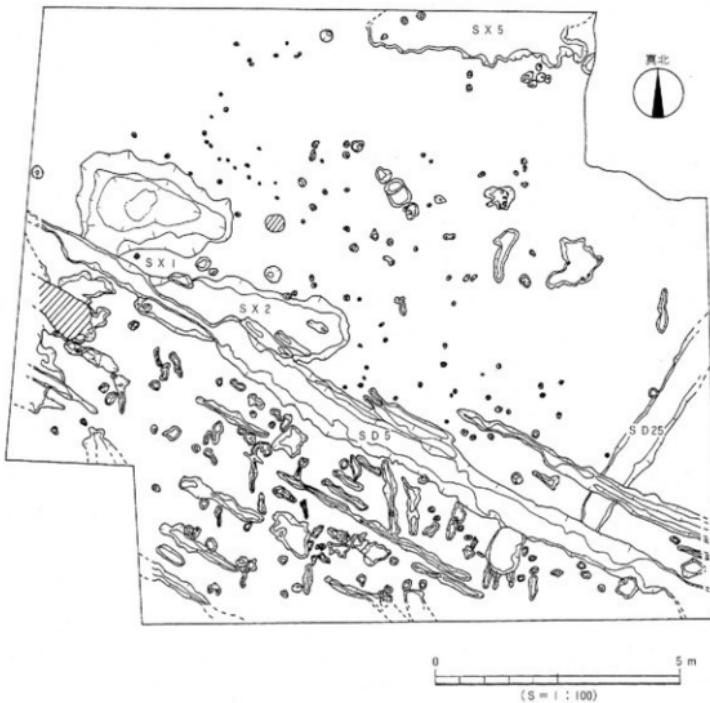


図2 遺構配置図

来住町遺跡 6 次調査地

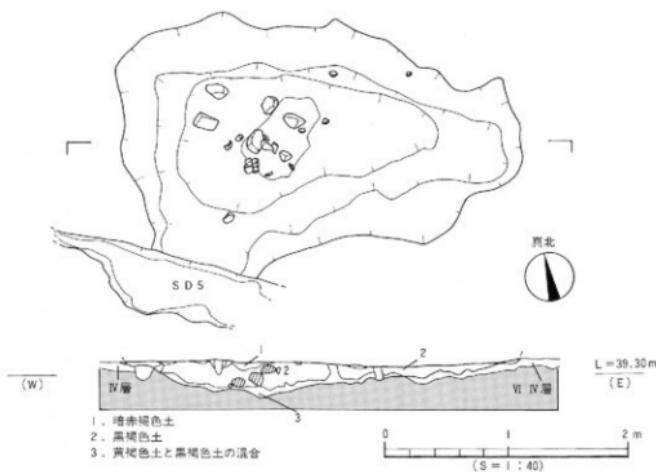


図3 SXI測量図

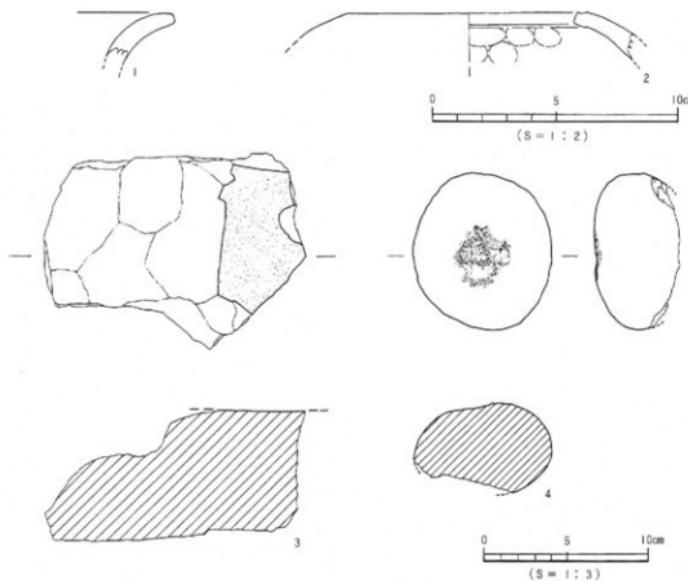


図4 SXI出土遺物実測図

来住町遺跡 6 次調査地

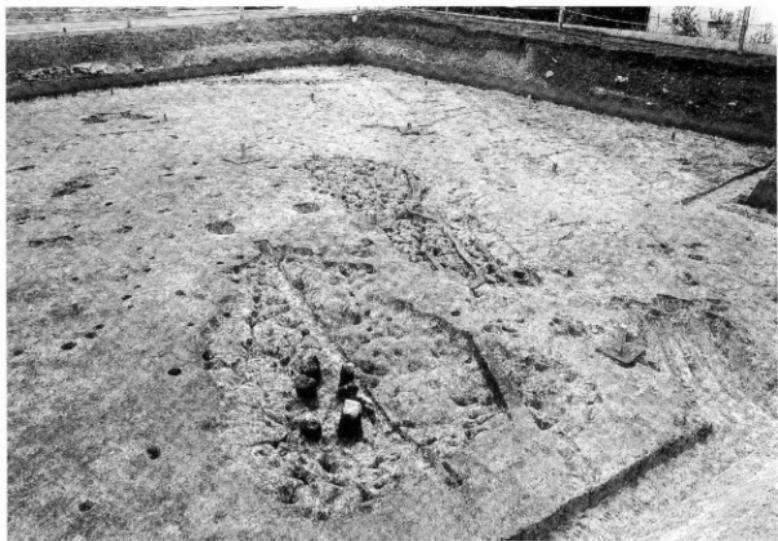


写真1 完掘状況①（北西より）

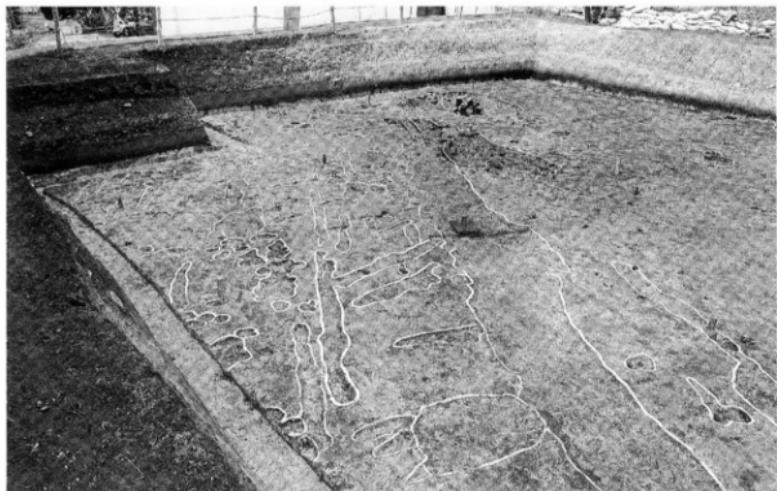


写真2 完掘状況②（南東より）

キシマチ 来住町遺跡 7次調査地

所在地 松山市来住町235-1
期間 平成7年12月11日～
平成8年3月31日
面積 1,574m²
担当 橋本雄一・小笠原善治



図1 調査位置図

経過 民間の開発行為に先立って、国からの補助を受けて実施された発掘調査である。これまでに来住町遺跡として6次に渡って調査が行われてきた区域は、国道11号線の北側に限られていた。今回調査を行った地点は、国道の南側において本格的な調査が実施されたものとしては、はじめてのケースとなるものである。この地点は、古代の官衙遺跡群の存在で有名な来住台地が、国道よりも南へ延び、小野川へ至る微高地に位置している。来住の中心部からは南東に400mほど離れているが、官衙および寺院関連遺構と、古墳時代後期の集落の存在の有無を確認することが調査の最大の目的となった。

遺構・遺物 本調査において注目された最大の成果は、6世紀末から7世紀中葉段階の集落の変遷過程をとらえることができたことである。以下、大きく5つの段階に区分して概説する。

I段階は6世紀末から7世紀初頭頃に位置づけられる4棟の竪穴式住居によって集落が構成されている。SB001と003の2棟は北辺の中央付近に造り付けのカマドを持ち、4本の柱によって上屋を支える構造で、幅の狭い周壁溝がめぐる。これらのものは、一般的な住居として使用された建物であると考えられる。一方、SB002と004はカマドを持たず2本柱によって支えられ、壁沿いに幅広の溝がめぐらされている。SB004においては、住居床面の中央部に炉が造られているほか、幅広の溝の部分を粘土質の土によって塗り込めた箇所に2つの大きな礎が配置されている。鉄床石として使用されたものかもしれない。この2棟の床面付近からは、若干の鉄片も出土しているので、「工房」的な性格を持った建物であった可能性が高いものと考えている。ただしSB002に関しては、住居の掘り方そのものが浅く、中央部に炉跡があったことの確認はとれていない。壁沿いの溝に関しては、住居の床面に貼られている粘土混じりの土によって塗り込められているようである。いわゆる周壁溝として理解するにはその幅が広すぎることから、住居の周辺部からの湿気を防ぐ目的で設けられた構造であることを想定している。これら4棟の住居跡から出土した遺物の形態からは、時期差を読みとることができないので、2種類の住居形態が同時に存在した可能性も考えておく必要がある。

II段階は、I段階の住居より後出する掘立柱建物群によって構成される。建物の軸線は真北から西に大きく振り、大型の円形ピットが掘られている点が特徴的である。来住の中心部においては珍しい2間四方の掘立002や、東柱を持つ掘立001などについては、通常の住居とは異なった機能を持っていた可能性がある。なお、各住居の床面積は、掘立002で約13.4m²、掘立001で約21.3m²を測る。この数値は、SBの床面積が掘り方の外周でおよそ14.3m² (SB004) ~21.2m² (SB002) であることとよく対応している。

米住町遺跡 7次調査地

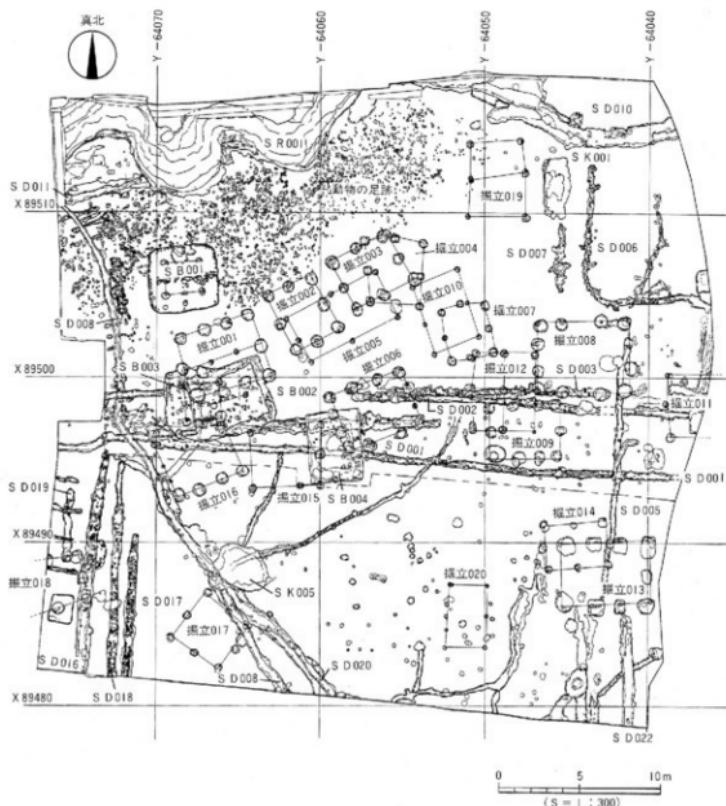


図2 遺構配置図

III段階になると、掘立群は調査地の東部に立地するようになる。建物の軸線は、現在の真北とは同一の方向が選択され、柱掘り方の中には明らかに方形のものも含まれるようになる。掘立004や013などがそれであるが、円形の柱穴のものもある。

統いてIV段階に至ると、III段階以前に属する掘立の一部を切る形で、複数の直線的な溝が掘られる。これらの溝の真北からの方向角は、かなり厳密に $N - 93^{\circ} \sim - 95^{\circ} - E$ ・ $N - 3^{\circ} \sim - 5^{\circ} - E$ の値が採用されている。この方向性は、近隣の官衙関連遺構に伴う溝や柵のそれと対応することから、関係が注目されるものである。S D001とS D002がほぼ平行に位置することから、道路の側溝である可能性を想定し

た時期もあるが、完掘時の溝の下場の形状が全く異なることから、時間差を持って掘られたものと解釈している。また、仮に道路であったとしても、当時の地表面はその後の水田化に伴って完全に失われており確認がとれる状況にはないので、ひとまず土地を区画するための溝であると考えておきたい。なお、特に明確な方形ピットから構成される掘立004と013の2棟については、これらの溝と重複関係はないことから、直線溝と同時に存在していた可能性も否定できない。いずれにしてもIII・IV段階は方形ピットと均一に掘られた極めて直線的な溝から構成され、当地において官衙施設が展開する7世紀中葉以降の諸遺構の特徴と共通している点が注目される。なお、直線的な溝の一部において、地山を掘り込んだ工具の痕跡が確認されている。特にS D001と017においては幅20cm未溝の三日月形の掘り込みか、溝の掘り方に沿って2列平行に続く状況が認められた（写真4）。地山上面が鉄製の鋤先状の工具によって刺突された箇所にこのような痕跡が残されたものと考えられる。溝幅がやや広いSD016などの場合には、溝の掘り方に沿って刺突した後、さらに中央部の掘り残し箇所を再度突くため平坦な仕上がりとなり、痕跡は認定しづらくなるようである。

その後の遺構の中で、明確に所属時期を推定できるものは、いずれも中世の後半期以降、近世段階のものばかりである。少数の土坑と溝から構成される段階で、溝の方向性は真北もしくは明らかに西に振っており、古代の土地の区画のありかたと比較して差異が認められる。米住の他の区域同様、中世後半期以降盛んになるとされる水田開発に伴って採用された土地の区画の方法は、水を利用する際の都合もあって、古代の原理とは異なるものであったものと考えられる。

以上が当調査地において確認された集落の変遷過程であるが、その他の遺構の中では、調査地の北西部において検出されたSR001の存在が注目される。この川は調査地内で大きく蛇行しながら東から西へ流れおり、明らかに河川の水の流れによって堆積した土層が認められた。この堆積土中からは、6世紀後葉から7世紀中葉にかけての時期の遺物が多数出土した。最も出土量が多いのは、7世紀の前葉に該当するもので、明確に6世紀の中葉や7世紀の後半であると認定可能な遺物は皆無に近い状況である。このあたりは、川のすぐ南に展開する集落の継続期間および各段階ごとの建物の棟数の増減と連動しているものと考えられる。最も人間の活動が活発であった1段階およびII段階にかけての遺物が、川に多く捨てられているわけである。やや時期が遡るものと考えているIII・IV段階に該当する遺物が極端に少ない状況ともうまく対応している。

SR001とSB004出土の遺物の内、主なものを図3にまとめた。1と2はやや古い時期の坏身であるが、この段階の遺物は多くない。主体を成すのは3から15に代表されるもので、炉を伴うSB004出土遺物の形態も、これらと共通している。注目すべきは土師器の存在である。11は須恵器の坏身に似せて作られているが、胎土や焼成方法は完全に土師器としての扱いがなされているものである。土師器は器形全体の復元が困難なものが大半を占めているが、15に代表される椀の個体数が多いようである。なお、ここにあげた土器よりも新しい時期に属する可能性のあるものは、SR等の遺構からは抽出されていない。

小結 この集落はさらに周辺に広がるものと予想されるので、今後、久米官衙遺跡群の評価を進めていくうえで、当該区域の重要性はますます高まるものと期待される。特に、SD001・002や005・017などに代表される直線的な溝が、周辺においてどのような展開を見せるのか、という点に注目しておきたい。その際、今回確認された工具痕跡の有無という点も、この段階の土地区画のための溝を識別する際の視点となるものと考えられるので注意したい。

(稿本)

来住町遺跡 7 次調査地

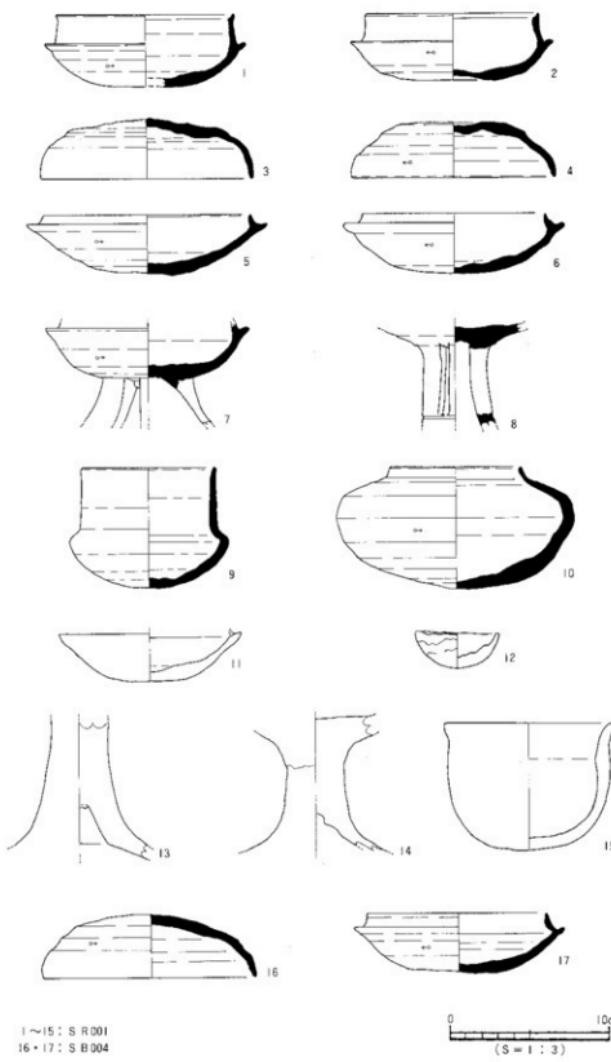


図3 出土遺物実測図

来住町遺跡 7 次調査地

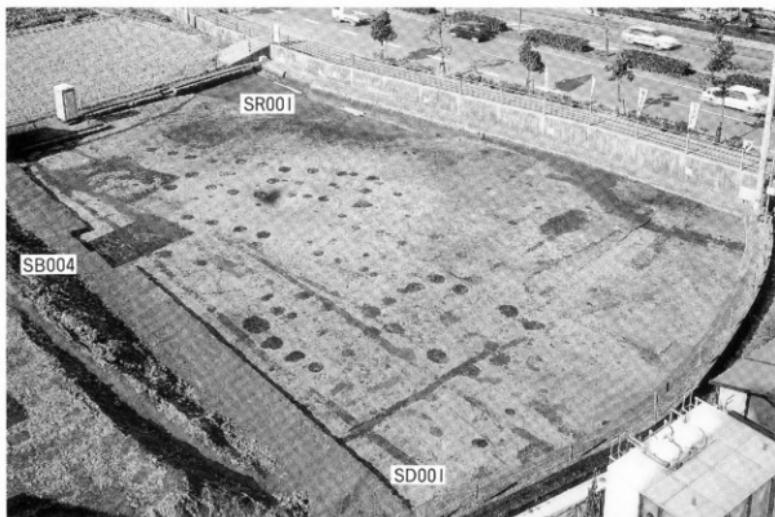


写真1　I区遺構検出状況（南東より）



写真2　SB004完掘状況（南東より）

来住町遺跡7次調査地

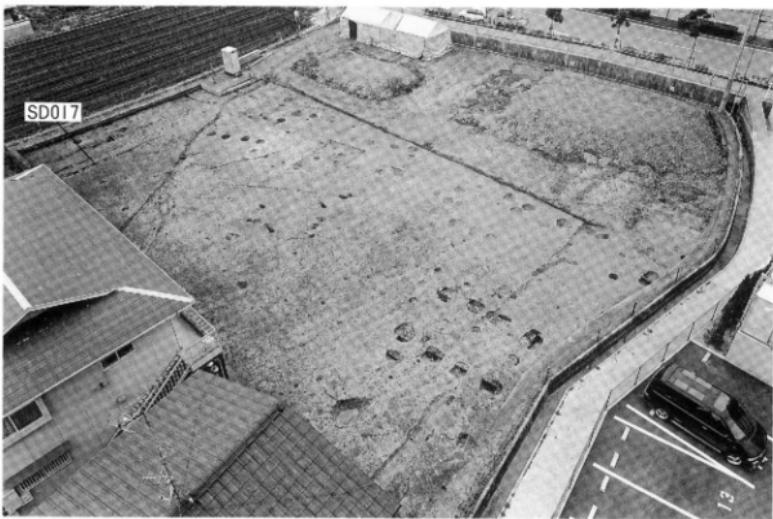


写真3 2区兜塗状況（南東より）

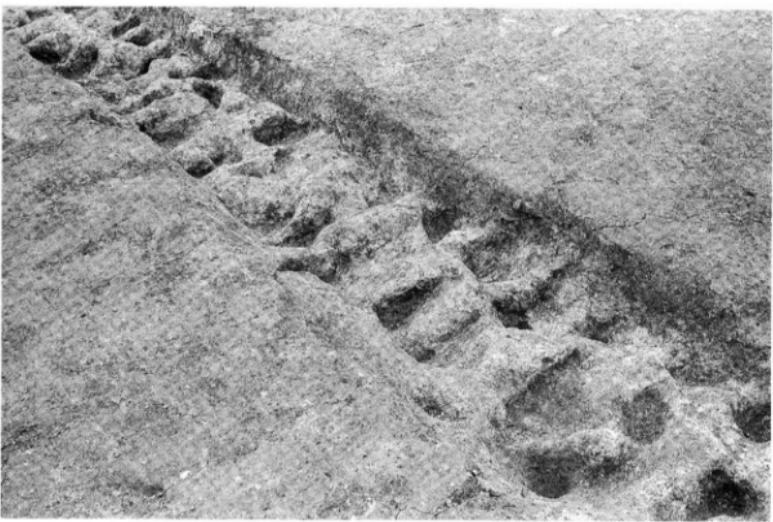


写真4 2区西部 SD017工具痕跡（南西より）

シモ カリ ヤ
下刈屋遺跡

所在地 松山市平井町甲2389、
甲2390、甲2391
期間 平成7年6月19日～
同年10月20日
面積 1,065.06m²
担当 重松住久



図1 調査地位置図

経過 本調査は、平成7年度国庫補助松山市内遺跡発掘調査事業として、民間の開発行為に先立ち発掘調査が実施されたものである。

本遺跡周辺は、北に広がる窯址と来往台地上に造営された米住廃寺や官衙遺跡群を小野川で結ぶ中間的な位置にありながらも、これまで発掘調査事例が比較的少ない地域であり、事前調査において未製品と考えられる須恵器片や竪穴式住居址・擧立柱建物群が検出されたことから、窯業集団の集落との関わり合いが予測され緊急調査が行われることとなったものである。

遺構・遺物 調査地は、小野川による河岸段丘の形成と扇状地地形の形成に伴う堆積作用が影響を及ぼす僅かに残された平坦な微高地に位置し、標高59.20mを測る。この小野地区、平井地区の平野部を望む山際には、昭和56年に実施された小野谷駄馬廻址群の続ヶ懐窯址を含めて、地元郷上史家の地道な表採活動により、概ね古窯址としても後半期の6世紀中葉段階から8世紀の初頭の窯址群の存在が指摘されている。また、当地で生産された須恵器が、小野川中流域の米住官衙遺構群で検出されつつもある。

調査地の基本層序は、第I層耕作土、第II層耕作土層（床土）、第III層淡灰褐色土（遺物包含層）、第IV層黃褐色粘性土（地山相当層）である。また、調査区の南東部隅において一部第IV層黃褐色粘性土（地山相当層）上面に帶状に堆積する洪積世段階の段丘疊層群が検出されている。遺構は、主に第III層から第IV層上面での検出であり、竪穴式住居址6棟（6世紀末～7世紀初頭）土坑状遺構6基、溝状遺構4条、石組遺構1条、擧立柱建物に伴う柱穴等が確認されている。遺物は、遺構内及び第III層淡灰褐色土中からの出土であり、6世紀末から7世紀前半の土師器及び須恵器である。SB2、SK2では、特徴的な遺物として赤褐色須恵器（环身）及び土師質須恵器（环身）が検出している。また、SX1では、一括性の高い資料が得られている。

小結 下刈屋遺跡出土の須恵器の中には、常に酸素が十分に供給された状態で焼かれたと思われる須恵器があり、胎土中の鉄分が焼成により酸化し赤褐色に発色している。通常、一般的な須恵器の生産工程においては、最終焼成段階で窯を密封し、酸素の量を制限する。この結果、窯内は酸欠状態に陥り、不完全燃焼によって発生した一酸化炭素が、胎土中の鉄分（酸化第二鉄）より酸素をうばい酸化第一鉄に変わる。須恵器の青灰色は、この段階で生成された酸化第一鉄によって生じ、この焼成方法を還元焰焼成と呼んでいる。一方、赤褐色に発色した須恵器は、この還元焰焼成が何らかの成因で行われなかった遺物と言える。また、住居址や土坑状遺構の埋土からも窯糞と呼ばれる須恵器焼成時のガラス質の不純物が検出されている。さらに、須恵器の一括窯業を示す土坑状の遺構も検出されてい

下荷屋遺跡

る。こうした事例は、基本的には、一般的な集落には見られない特徴的な状況であるが、重信川対岸域の谷田窯址群とは異なり須恵器製作そのものに関わる検出遺物は認められなかった。以上、本調査区で検出された集落は、直接的な須恵器製作址に伴う集落とは異なり、生産地的な様相を示しながらも窯業集団内の業務分化を暗示し、製作物の搬入・運搬等と言った役割を持った生産地と消費地を結ぶ間接的な集落を想定することができる。これまで当地域では、窯業を背景とした古墳時代初期の生産と流通に係る調査研究の遅れが指摘されてきたが、今後、窯業集団に係わる須恵器生産形態と流通と言った積極的な視点で、当時の社会背景に迫る研究がこの地域一帯で進むものと期待される。(重松)

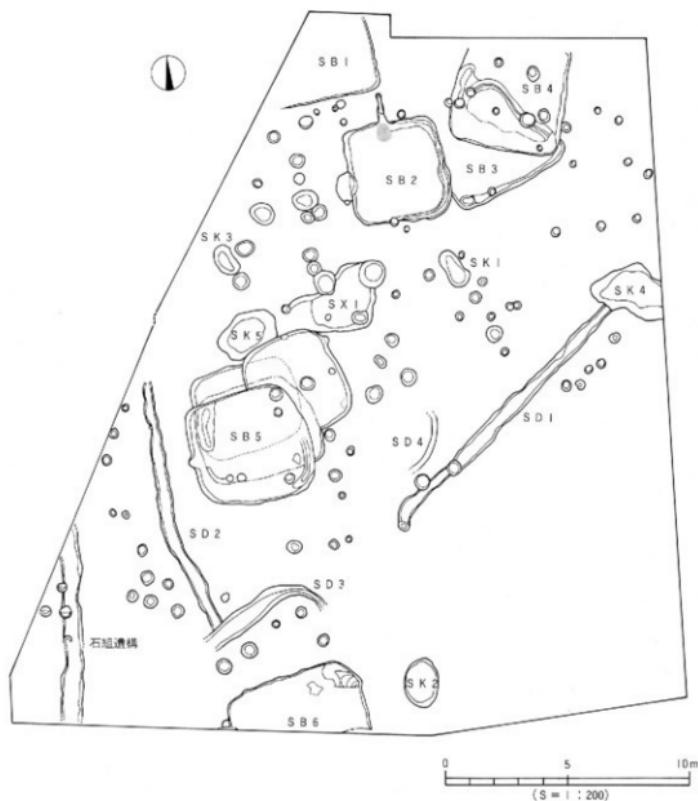


図2 遺構配図

下丸屋遺跡

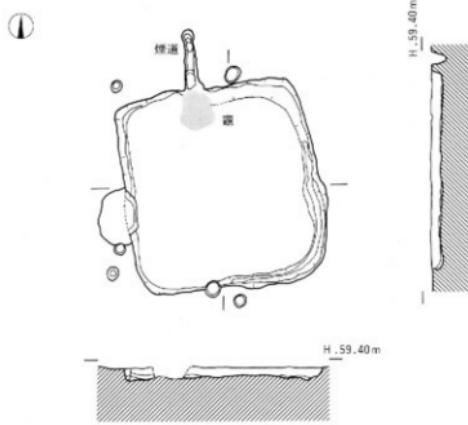


図3 SB2測量図

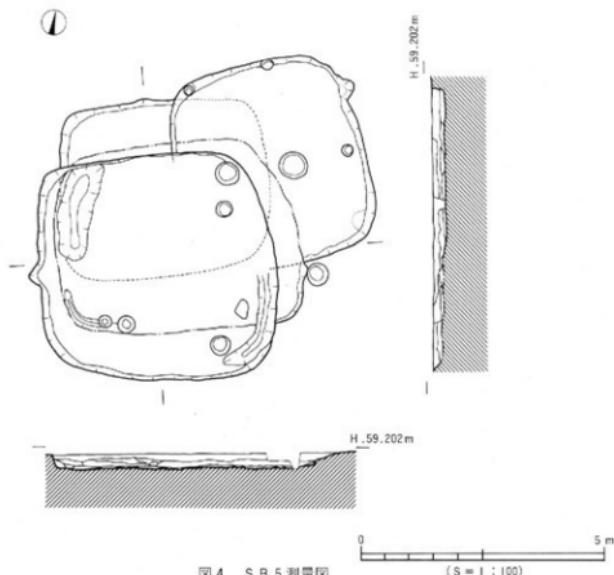


図4 SB5測量図

下荷屋遺跡

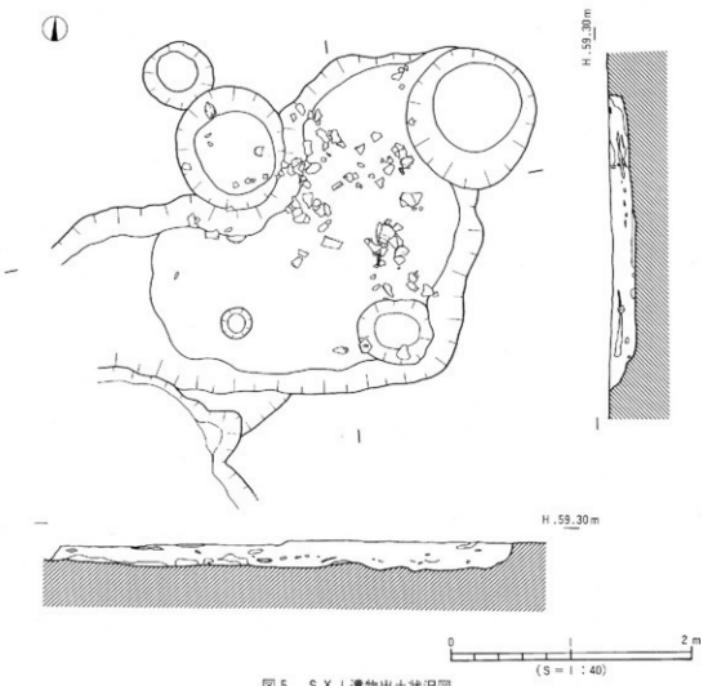


図5 S X I 遺物出土状況図

1 S B 5 出土の土師質須恵器
2 S K 2 出土の赤褐色に発色の須恵器

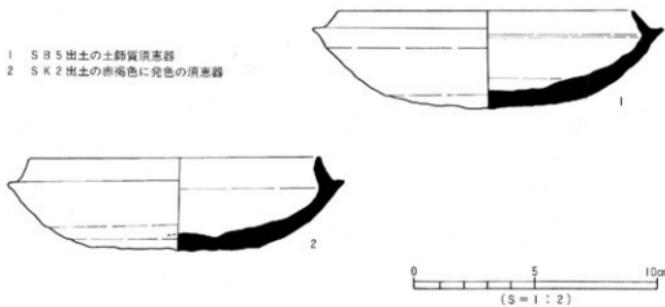


図6 出土遺物実測図

七 ヤマトウゲ
桧山峠7号墳

所在地 松山市平井町乙9-2、32-2

期間 平成7年2月22日～

同年6月9日

面積 282.33m²

担当 素田茂敏・大森一成

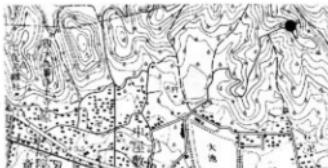


図1 調査地位置図

経過 松山平野の東部から北東部を限るのは、高繩半島の大部分を占める高繩山系である。古墳の立地する丘陵は、この高繩山系の南東面支脈のひとつにあたり、標高166.5mを測る。丘陵からの眺望は、特に南から東方向に優れ、松山平野3大河川のうち重信川、小野川流域の平野から平野東南部の海岸線を一望のもとにすることができる。周辺の丘陵は、平野でも最も密集する地域で、当古墳の属する桧山峠古墳群をはじめとして、芝ヶ峠古墳群、かいなご古墳群、久米大池古墳群など、数多くの古墳群が存在している。当古墳直近にも南東に接するように6号墳、北西に8号墳があり、桧山峠と名のつく古墳が12基まで確認されているが、実数はこの数字をかなり凌ぐものと思われる。しかしながら、その内容がわずかでも把握されているものはこの古墳群中ではなく、近隣の古墳で、ある程度内容がわかっているものには、平井町にあって5世紀末の帆立貝形首長墳といわれている観音山古墳や、平野でも最大規模の円墳とされる鷹子町素鷲神社古墳などがある。両者ともに形象埴輪を伴い、前者には五鉢鏡、後者には單鳳文環頭太刀の出土が伝えられている。これら首長クラスの古墳のほか、かいなご古墳群中のかいなご1号墳は、7世紀前半～中頃の複室構造をなす横穴式石室を主体部とする方墳として知られ、また2号墳は6世紀中頃の導入期に近い時期の横穴式石室を主体部として注目される古墳である。そのほか、芝ヶ峠古墳群中の1号墳は久米80号墳とも呼ばれ、一墳に2基の石室が並列して開口しており、6世紀後半代のものと考えられている。これらの古墳群が見おろす平野の比較的近い位置には、古代豪族久米氏の本拠地である久米・米住の遺跡群が展開していることから、これらの遺跡群とのかかわりを推定する考え方もある。

事前の踏査によれば、当該地はその一部が果樹園として利用されていたため、段カット状の整地により墳丘は半截され、主体部である石室石材の一部が法面に露出している状況であった。なお、調査は四国電力株式会社による特別高圧送電線「鷹子支線」新設に伴い実施された。

遺構・遺物 先述したように、墳丘は主体部とともに果樹園造成によって半截されており、そのカットは地表面にまで及んでいる。遺存の良好な墳丘北東半の墳形や、盛土端の位置、さらに主体部が墳丘の中心に近い位置に存在するとすれば、墳形は直径16～17mの円丘に復元できる。しかし、盛土端のレベル164.2m付近のコンクリートを拾っていくと、円形には収束せず墳丘の北部で外開きに流れる。造成による段カットのある南西部はもとより、墳丘の北部から西部にかけては既に地山が露出しており、円形に収束するためには、この周辺の地山を最大で1.2m程度はカットして整形する必要がある。したがって、墳形は後に述べる墳丘遺物の出土状況も加味して考えると概ね北西～南東方向を軸とした前方後円形になる可能性が高いが、調査区の限界や推定前方部の削平のため、前方部端やコーナー部ま

桧山峠 7 号墳

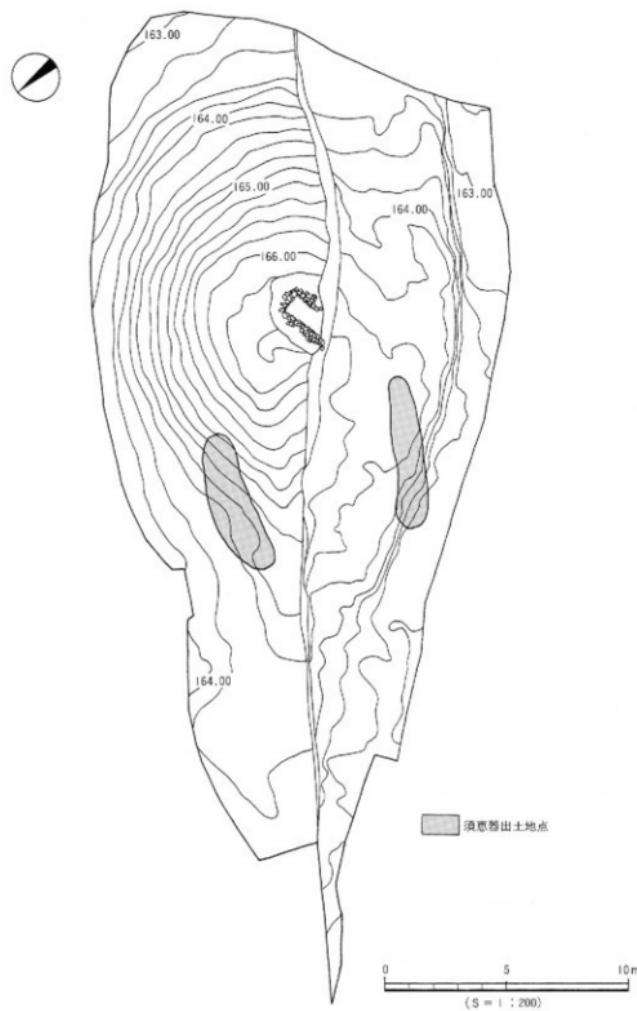


図 2 墓丘測量図

桧山峠 7号墳

でを把握することはできなかった。

墳丘の遺物は、主体部北西側・南西側の墳裾の大きく2箇所にまとまって検出され、そのすべてが須恵器で高环を主体としている。いずれも掘り方を伴わず、露出した地山直上あるいは盛土上面での出土で、すべて破碎された状況であった。北西～南東主軸の前方後円形を推定した要因のひとつには、これら2箇所の遺物出土位置にあり、くびれ部祭祀にかかわるものと判断した。

主体部は、長軸をほぼ東西にとる竪穴式石室で、砂岩の割石小口積みによる構築である。整地によって、墳丘とともに斜めに横断するように半截されている。また、調査前の段階で墳丘に径0.5m程度の擾乱穴があり、石材の一部が露出していたが、この部分が東小口壁にあたり、壁体石材が部分的に抜

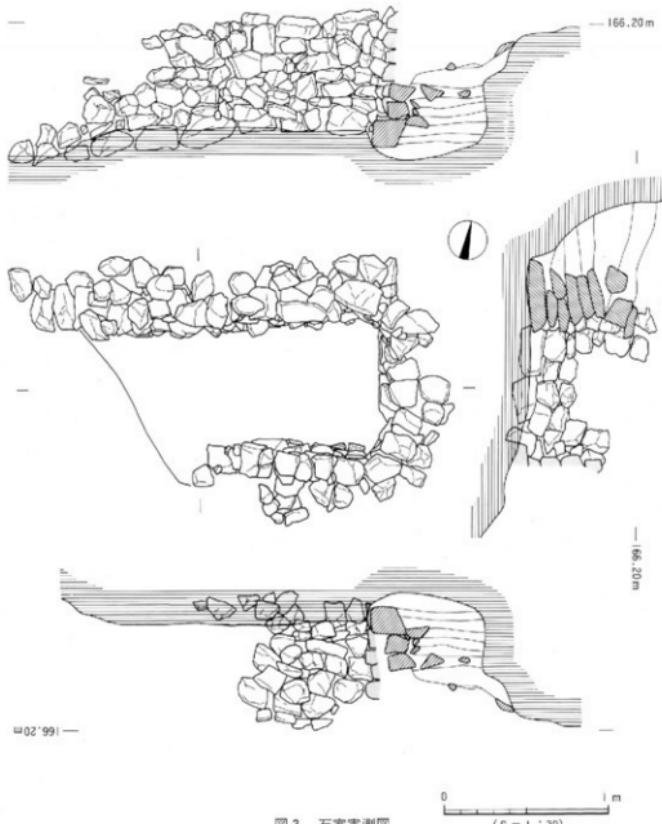


図3 石室実測図

かれていることがわかった。石室は現況で東小口床面幅0.7m、北側壁長2.1m、南側壁長1.0mを測る。高さは、遺存の良好な北壁で0.8m程度であるが、石室規模からみてこれ以上さほど高くはならないと考えられる。石材の積みは粗雑で、挖え積みもほとんどなく、裏込め土によって強度を保っている。小口および北壁の最下段には若干大きめの石を用いるが、南壁には使われていない。現存する範囲では壁体に持ち送りはみられない。また、コーナー部分が隅丸形に弧を描くように突き合わされるが、しっかりと噛み合わされるような構造ではない。

墓壇は墳丘完成後に、石室よりもふたまわり程度大きく精円形状のプランで掘り込まれ、主体部はその床面まで盛土中に構築されている。床は乳白色粘質土のフラットな面で、特別の施設を持たない。

遺物の多くは石室東小口床面直上で検出された。出土したものには鉄鎌、馬具（轡）、刀子、砾石があり、この部分には赤色顔料が分布している。鉄鎌は北東コーナー部で、刃部を小口側に向かた状態で長軸に平行に10数本の束になって置かれ、この鉄鎌の南、石室中軸ラインよりやや北には轡の一部が、さらにその南では刀子が検出されている。砾石は小口壁に接して置かれていた。

一方、北側壁直近の小口壁から1.5~1.7mの周辺で、ガラス小玉29点が出土したが、この周辺は竹根による擾乱で床面がかなり傷んでおり、出土シベルは不安定である。

小結 墳丘出土遺物からこの古墳の所属時期を判断すると、5世紀末の年代を与えることができる。ところで、松山平野での同年代の古墳を拾ってみると、東野町東野茶屋跡古墳群の数基の円墳、石風呂町鶴ヶ峰古墳群中の円墳I区1~3号墳、船ヶ谷町三ツ石山古墳、同町にあって前方後円墳の可能性が指摘されている向山古墳などがあげられる。しかしながら、これらの古墳はいずれもが削平され、主体部の構造が全く知られておらず、木棺直葬あるいは箱式石棺などを推定されるにとどまっていた。この意味で、当該時期の古墳の主体部のバリエーションとして小竪穴式石室があることが明らかになつたことは大きな収穫である。

また、詳細は本報告において行うが、墳丘築成の各工程と、墓壇・主体部との関係が精査できた調査であったことも評価されてよい。

さらに、本調査によって、道後平野北部における古墳の主体部への横穴式石室の採用が5世紀末段階までは遅らない可能性が高くなった。溝辺1号墳や三島神社古墳にみられるように、6世紀前半には確実に横穴式石室が採用されており、横穴式石室の導入時期が本調査によってさらに細かくしづられる可能性がでてきたことも重要である。

(大森)

桧山峠7号墳



写真1 墳丘完掘状況（北西より）



写真2 石室完掘状況（南より）



写真 3 石室遺物出土状況（南より）

松山市埋蔵文化財調査関係資料

例 言

1. 本編は、松山市教育委員会文化教育課・(財)松山市生涯学者振興財團埋蔵文化財センターが実施した埋蔵文化財確認調査資料である。
2. 今回は平成7年度(申請番号1号~344号、平成7年4月1日~平成8年3月31日迄)の資料を取り扱う。なお、平成6年度以前の資料については、「松山市文化財調査年報I(昭和60~61年度)」、「同年報II(昭和62~63年度)」、「同年報III(平成元年~2年度)」、「同年報IV(平成2年~3年度)」、「同年報V(平成3年~4年度)」、「同年報VI(平成4年~5年度)」、「同年報VII(平成5年~6年度)」を参照されたい。
3. 資料作成(一覧表及び付録図)は、栗田正芳、木光博武、重谷典男、藤本數夫、波多野恭久、岩岡慎一が行った。
4. 表中の番号は、埋蔵文化財確認願いの申請番号に順するものである。また、本格調査については、平成7年度に行った調査を取り扱う。
5. 付録図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図(三津浜・松山北部・郡中・松山南部)を使用した。
6. 一覧の略記について
①面積：調査対象面積、小数点以下四捨五入。②標高：地表面、()調査区内平均値。③調査目的：公=施主公共団体、私=施主一般。④調査方法：空白は未調査等。

平成7年度 松山市埋蔵文化財確認調査一覧

No.	所 在 地	面積(m ²)	標高(m)	調査目的	調査方法	包含・遺構	遺 物	備 考
1	桑原7丁目457	165		私	既済			本格調査済 余無量跡
2	道後一万771-14	121	(31.44)	私	試掘			
3	平井町甲2172-6	391	(62.30)	私	試掘			
4	北久米町477-2	348	(32.81)	私	試掘	柱穴、土坑	発生、土師器	本格調査要
5	衣山4丁目631-5	181	34.34	私	試掘			
6	桑原3丁目349他2筆	1,959	(40.02)	私	試掘			
7	桑原6丁目~1丁目	44	(35.10)	公	立会			
8	東本1丁目~桑原6丁目	37	(34.19)	公	立会			
9	上野町乙87-1	176	59.30	私	立会			市教育委員会にて処理
10	柳森2丁目4-12-2-7	326	40.50	公	立会			
11	北齋院町378-1	19	10.14	私	試掘			
12	東野5丁目8-20他4筆	324	(50.90)	私	試掘			
13	福善寺町750他1筆	2,921	(23.81)	私	試掘			
14	西石井町214-2他3筆	895	(21.48)	私	試掘			
15	桑原1丁目1001	1,105	(37.16)	私	試掘			
16	鷹子町659-6	168	45.36	私	試掘			

No.	所 在 地	面積(m ²)	標高(m)	調査目的	調査方法	包含・遺構	遺 物	備 考
17	樽林2丁目278-1、-5	462	(40.94)	私	試掘	包含層、溝	弥生土器、須 恵器、土器群	本格調査要 樽林滅失道路4次調査
18	桑原6丁目712-1	240	(35.86)	私	試掘			
19	道後北代1290-3	697	(32.21)	私	試掘			
20	北梅本町甲3271-18	233	(79.18)	私	試掘			
21	南久米町443-1	327	34.70	私	試掘			
22	来住町533-1	385	(40.28)	私	試掘	包含層、柱穴	須恵器、	本格調査要 来住町道路6次調査
23	清水町1丁目7-15、-16	103	(25.26)	私	試掘			
24	明生田町285	108	19.00	私	試掘			市教育委員会にて処理
25	東本1丁目97-5	123	(33.55)	私	試掘			
26	東石井町191-1	731	(20.87)	私	試掘			
27	朝美1丁目1313	231	14.12	私	試掘			
28	南久米町694-1	520	(39.54)	私	試掘	包含層、柱穴	弥生土器	本格調査要
29	樽林4丁目201-2	120	40.00	私	試掘			
30	今在家町61-1、-2	889	(31.85)	私	試掘			
31	安城寺町212-1	2,128	(7.98)	私	試掘			
32	平井町甲1486、1487	732	(69.56)	私	試掘			
33	船ヶ谷町330-3	210	7.11	私	試掘			
34	東石井町2-41-89、-90	326	29.78	私	試掘			
35	拓川町446-2他1筆	481	(20.73)	私	試掘			
36	小坂5丁目310-3	506	(23.17)	私	試掘			
37	南土居町99-3	237	40.28	私	試掘			
38	朝生田町222-1	232	20.15	私	試掘			
39	桑原2丁目~1丁目	571	(38.20)	公	立会			
40	福音寺町581~513	211	(25.15)	公	立会			
41	南高井町1606-12	100	36.22	私	試掘			
42	北久米町692-1	61	32.87	私	試掘			
43	北久米町698-3他3筆	697	35.16	私	立会			
44	平井町甲1376-1他2筆	545	70.30	私	試掘			
45	西野町180他	600	59.90	公	試掘			市教育委員会にて処理
46	山西町75他3筆	2,448		私	未			
47	山越1丁目328-8	336	18.57	私	試掘			
48	南久米町476-1他2筆	362	(34.19)	私	試掘	住居址、溝	弥生土器	本格調査要
49	道後鍬又1215-2、-3	355	28.13	私	試掘			
50	石風呂町463-1他1筆	564		私	既済			本格調査要 馬ヶ峰道路
51	来住町907-1	989	37.48	私	試掘	住居址、土坑	須恵器、土器群	本格調査要
52	山西町801-1	1,078	(3.10)	私	試掘			
53	桑原1丁目~2丁目	108	(37.15)	公	立会			
54	拓川町468-1、-2	989	(20.53)	私	試掘			
55	東石井町192-1	352	(19.73)	私	試掘			
56	道後今市5-48	650	30.90	私	試掘			

No	所 在 地	面積(m ²)	標高(m)	調査目的	調査方法	包含・遺構	遺 物	備 考
57	上野町甲808-66	305		私	既済			本格測量済 土壤深造跡
58	南瀬戸町乙66-18	645	(24.05)	私	試掘			
59	北前院町1244、1245	416	8.10	私	試掘			
60	北前院町1246-2	88	10.00	私	試掘			
61	道後北代155-3	200	34.30	私	試掘			
62	辻町270-5	496		私	既済			S60-4にて立会済み
63	朝生田町213	436	20.27	私	試掘			
64	當光寺町甲414	231	63.90	私	試掘			
65	山越2丁目41-1	172	(16.45)	私	試掘			
66	山越1丁目甲270-6	331	(18.09)	私	試掘			
67	山越1丁目甲272-3	319	(18.37)	私	試掘			
68	山越1丁目甲270-3他2筆	1,862		私	取消			H7-90、91に差し替え
69	三町1丁目415-2	129	32.15	私	試掘			
70	南桜木町乙107	102		公	試掘			県教育委員会にて処理
71	水泥町1195	233	62.60	私	立会			
72	小坂5丁目358-4、-7	149	24.06	私	試掘			
73	南久米町401-3	373	37.58	私	試掘			
74	久万ノ台1403~1338	231	29.50	公	立会			
75	拓川町463-6	465	19.71	私	試掘			
76	枝松6丁目10-24	673	27.77	私	試掘			
77	道後善多町1323-7他2筆	402	34.30	私	試掘			
78	道後善多町1329-8他2筆	255	34.31	私	試掘			
79	道後善多町1330-3	280	34.24	私	試掘			
80	南江戸5丁目738-4	173	13.76	私	試掘			
81	北前院町306-2	194	10.98	私	試掘			
82	桑屋4丁目878-5	331	(38.67)	私	試掘			
83	平井町1440	321	66.22	私	試掘			
84	清水町2丁目20-26	111	23.20	私	試掘			
85	来住町961-1	949	(34.89)	私	試掘			
86	畠寺2丁目456-19	1,077		私	既済			H5-51、52にて試掘完了済み
87	太山寺町554	419	3.30	私	試掘			
88	谷町263-2、264	238	17.50	私	試掘			
89	道後今市1057-12	227	(31.45)	私	試掘			
90	山越1丁目甲270-3他1筆	322	(18.06)	私	試掘			
91	山越1丁目甲271-1他2筆	1,540	(18.21)	私	試掘			
92	南久米町1163	843	39.20	私	立会	包含層、溝	発掘器、 上部器	本格測量済 久米商店清跡25次調査
93	畠寺2丁目443	309	42.80	私	立会			
94	南江戸6丁目1668	988	28.36	私	試掘			
95	別府町419-3	472	(5.08)	私	試掘			
96	枝松5丁目121-16他4筆	514	(27.42)	私	試掘			

No.	所 在 地	面積(m ²)	標高(m)	調査目的	調査方法	包含・遺構	遺 物	備 考
97	中村2丁目289-2	153	26.95	私	試掘			
98	南土居町279-1	1,352	37.93	私	試掘			
99	北梅本町丙45-2、-3	310	124.94	私	試掘			
100	道後一萬	181		公	未			
101	桑原5丁目563-5	84	34.70	私	試掘			
102	辻町33	238	14.00	私	試掘			
103	鷹子町638-1、-2	985	(47.31)	私	試掘			
104	鷹子町638-3	527	47.19	私	試掘			
105	清水町2丁目18-8	278	23.22	私	試掘			
106	南斎院町乙67-6	6,000	(32.82)	公	試掘			
107	平井町甲1780-1他2筆	306	66.40	私	試掘			
108	平井町1414-3	261	67.68	私	試掘			
109	桑原5丁目559-2、-4	896	(33.49)	私	試掘	溝、土坑	須恵器、土器等	本格調査要 桑原田中道路3次調査
110	権現町甲113-2、-4	625	(28.38)	私	試掘			
111	南久米町653-1他2筆	424	(40.90)	私	試掘			
112	福音寺町697-1	935	(23.37)	私	試掘			
113	姫原1丁目1656他	5,191	(46.50)	私	試掘			
114	清水町2丁目20-4	184	23.29	私	試掘			
115	北斎院町380-1、-2	455	9.61	私	試掘			
116	北梅本町甲3280-27	322	77.25	私	試掘			
117	小坂3丁目229-5	247	28.10	私	試掘			
118	姫原1丁目229-1他1筆	448	(22.28)	私	試掘			
119	北斎院町1066-5	197	(7.83)	私	試掘			
120	桑原5丁目870-8	336	(35.90)	私	試掘			
121	道後橋又1152-6	175	(28.40)	私	試掘			
122	南久米町442-3	165	35.40	私	試掘			
123	南久米町506	771	(31.10)	私	試掘			
124	西石井町73	565	(20.81)	私	試掘			
125	久米塙田町1-6	180	49.33	私	試掘			
126	清水町2丁目20-9	161	23.22	私	試掘			
127	別府町703	214	(8.85)	私	試掘			
128	今在家町428-1	272	(30.75)	私	試掘			
129	権現町甲360	165	(34.68)	私	立会			
130	東石井町617-21	163	26.01	私	試掘			
131	平井町甲1974-4	318	66.29	私	試掘			
132	古三津5丁目552-4	117		私	既済		H5-305にて試掘完了 済み	
133	古三津5丁目552-6	118		私	既済		H5-205にて試掘完了 済み	
134	古三津5丁目552-7	110		私	既済		H5-205にて試掘完了 済み	
135	南久米町775-10	317	37.98	私	試掘			
136	西石井町64-1	442	20.86	私	試掘			

No.	所在地	面積(m ²)	標高(m)	調査目的	調査方法	包含・遺構	遺物	備考
137	道後北代7-5	186	31.41	私	試掘			
138	南久米町373-9	215	38.33	私	試掘			
139	南久米町770-5	177		私	既済			
140	古三津5丁目552-3	119		私	既済			
141	平井町2102-1	271	60.78	私	試掘			
142	小坂5丁目322-1	879	(22.47)	私	試掘			
143	久万ノ台715	157	(15.65)	公	立会			
144	今在家町418-1	1,082	(30.58)	私	試掘			
145	廣子町576	292	(49.66)	私	試掘			
146	桑原1丁目787-6、-7	657	(36.23)	私	試掘			
147	天山町25-1	635	(20.60)	私	試掘			
148	平井町甲1595	296	70.58	私	試掘			
149	廣子町651	227	46.52	私	試掘			
150	烟寺2丁目13-40	214	46.41	私	試掘			
151	久米窪田町329-5他	447	46.70	公	立会			
152	天山町214-5	249	20.47	私	試掘			
153	来住町523-1	28	40.18	私	試掘			
154	南梅本町乙68	409	95.57	私	試掘			
155	南久米町472-1他2筆	672	34.41	私	試掘			
156	廣子町乙1-14他7筆	264	57.90	私	試掘			
157	南江戸6丁目1355-3	289	14.37	私	試掘			
158	桑原5丁目559-12	222	33.70	私	試掘			
159	祝谷町1丁目14-6	107	57.10	私	試掘			
160	来住町874、873-2	440	38.21	私	試掘	包含層、溝 弥生、須恵器	本格調査要	
161	別府町755-2	1,510	2.70	公	試掘			
162	御幸1丁目513-1	4,644		私	踏査			
163	平井町甲1418-5	157	70.40	私	立会			
164	南江戸5丁目738-1他1筆	659	(13.44)	私	試掘			
165	新浜町1118-1	909	(6.89)	私	試掘			
166	道後北代155-3	190		私	既済			H7-61にて試掘完了 済み
167	今在家町420-38	218	30.67	私	立会			
168	小坂4丁目1-28-1-1他3筆	1,486	(26.40)	私	試掘	住居址、溝 弥生土器	本格調査要 並ノ山遺跡6火葬場	
169	朝生田町459他3筆	1,595	(19.03)	私	試掘			
170	西石井町63-1他	748	(20.35)	公	立会			
171	桑原2丁目~5丁目他	503	(37.00)	公	立会			
172	南斎院町1338-16	1,156		私	踏査			
173	北斎院町379-8	182	10.02	私	試掘			
174	水泥町987-1	269	68.37	私	試掘			
175	緑町1丁目4-6	176	28.53	私	試掘			
176	松木2丁目13-7	165	27.99	私	試掘			

No.	所 在 地	面積(m ²)	標高(m)	調査目的	調査方法	包含・遺構	遺 物	備 考
177	久米塙町489	1,088	(45.39)	私	試掘			
178	権現町乙160	8,000		公	未			
179	恵源町甲1432	68,000		公	未			
180	米住町873-1	123	38.30	私	試掘	土坑	弥生、須恵器	本格調査要
181	立花6丁目393-12	134	19.94	私	試掘			
182	平井町甲1704-2391	14,500	(72.61)	公	試掘	溝	弥生、土葬器	本格調査要
183	今在家町420-26	213	30.94	私	試掘			
184	朝生田町478-1他3筆	612	18.65	私	試掘			
185	平井町甲1331-1他2筆	189	72.82	私	試掘			
186	平井町甲1523他3筆	1,368	(66.11)	私	試掘			
187	星岡町684-6、-13	102	25.84	私	試掘			
188	枝松5丁目75-1	371	28.70	私	試掘			
189	東方町甲1276-1	322	54.67	私	試掘			
190	平井町平1827~1851	1,227	(65.80)	公	立会			
191	平井町平1640~1780	1,513	(77.20)	公	立会			
192	高砂町2丁目3-11	110	22.40	私	試掘			
193	朝美1丁目1363	119	19.16	私	試掘			
194	桑原6丁目528-6	304	(32.60)	私	試掘			
195	福音寺町431-1、-2	396	(29.03)	私	試掘			
196	桑原1丁目787-1	471	(36.39)	私	試掘			
197	折川町481-6	97	19.70	私	試掘			
198	平井町3157-65	231	48.53	私	試掘			
199	桑原5丁目870-1	138		私				市教育委員会にて処理
200	松末2丁目1116	1,566	(25.66)	私	試掘			
201	新浜町1110-3他3筆	2,753	(3.13)	私	試掘			
202	平井町甲3157-181	236	48.54	私	試掘			
203	辻町343-1他2筆	1,750	(15.39)	私	試掘			
204	東石井町533-1	464	22.22	私	試掘			
205	米住町888-1他2筆	1,326	(37.40)	私	試掘	包含層、柱穴	弥生、須恵器	本格調査要 久米塙町道跡26次調査
206	北海本町	1,560	(104.00)	公	立会			
207	南久米町196-6	494	(28.00)	私	試掘			
208	別府町589他2筆	210	(5.20)	公	立会			
209	久万ノ台1112	182	28.19	私	試掘			
210	山越2丁目47-4、-11	198	17.33	私	試掘			
211	北久米町703	252		私	既済			H6-200にて本格調査要 北久米塙町道跡6次調査
212	道後名多町1009-3	522	(35.01)	私	試掘			
213	天山町208~210	26	19.80	公	立会			
214	天山町221~50	438	(21.00)	公	立会			
215	南高井町1606-5	104	36.20	私	試掘			
216	溝辺町乙6-5、8-27	249		私				市教育委員会にて処理

No	所在地	面積(m ²)	標高(m)	調査目的	調査方法	包含・遺構	遺物	備考
217	南土居町208	467	(38.64)	私	試掘			
218	来住町870-2	146	(39.30)	私	試掘			
219	北梅本町乙676	1,000		公	未			
220	太山寺町1934	2,800		公	未			
221	桑原4丁目650~622	185	(37.90)	公	立会			
222	森松町194-3	254	(34.66)	私	試掘			
223	北久米町497-1	467	(34.46)	私	試掘			
224	鷹了町乙511-1、-2	1,500	(70.21)	私	試掘			
225	南江戸4丁目1-1	272		公	未			
226	南糸井町1594-3	416	35.60	私	試掘			
227	福音寺町406-1	1,059	(28.80)	私	試掘	包含層、住居址	遺物器、 土師器	本格調査要
228	安城寺町96-3	871	(8.43)	私	試掘			
229	視谷5丁目690-1	122	43.46	私	試掘			
230	青藤1丁目742-5	140	36.94	私	試掘			
231	道後保町234-1	571	36.95	私	試掘			
232	南久米町204-4他2筆	948	(39.77)	私	試掘			
233	北梅本町甲3261-3	108	77.50	私	試掘			
234	平井町2163-1	242	61.40	私	試掘			
235	来住町870-1	208	39.12	私	試掘	柱穴	遺物器、 土師器	本格調査要
236	大街道3丁目2-40	571	(27.50)	私	試掘			
237	南江戸3丁目785-1	985	13.32	私	試掘			
238	天山町27-1、28-1	546	(24.06)	私	試掘			
239	福音寺町417-3	335	28.30	私	試掘			
240	天山町255-1他1筆	661	23.46	私	試掘			
241	満辺町乙437	2,732	(111.00)	私	試掘	石室	遺物器、 土師器	本格調査要 満辺2号墳
242	西石井町194-1	256	21.49	私	試掘			
243	平井町甲2189-13	283	64.68	私	試掘			
244	山越1丁目289-6	106	19.28	私	試掘			
245	鷹子町203-2他7筆	729		私	取消			H8-86に差し替え
246	今在家町451-1	198	30.14	私	試掘			
247	道後喜多町1010-3、-4	835	35.07	私	試掘			
248	安城寺町96-1	162	8.91	私	試掘			
249	朝美2丁目1256-1	199	14.46	私	試掘			
250	太山寺町486	972	(3.90)	私	試掘	包含層、土坑	縄文、弥生	本格調査要
251	桑原4丁目639-5	175	38.10	私	試掘			
252	桑原2丁目841-7他1筆	464	(37.14)	私	試掘			
253	小坂4丁目254-1他1筆	174	(26.60)	私	試掘			
254	南土居町101-2	105	39.64	私	試掘			
255	東石井町乙68-3	209		私	既済			本格調査要 東山古墳・森古墳
256	樺現町甲347-1他1筆	641	35.38	私	試掘			

No	所 在 地	面積(㎡)	標高(m)	調査目的	調査方法	包含・遺構	遺 物	備 考
257	衣山2丁目325-2	272	(17.76)	私	試掘			
258	米住町1145	1,335	(35.13)	私	試掘	包含層、住居址 須恵器、土師器	本格調査要	
259	清水町2丁目6-4	294	23.00	私	試掘			
260	東垣少町836-5	595	4.10	私	試掘			
261	星園町600-3	222	27.67	私	試掘			
262	梅津寺町乙56-334	585	20.76	私	試掘			
263	安城寺町586-1	108	(8.64)	公	試掘			
264	平井町甲1029-6	187	74.39	私	試掘			
265	別府町328	177	5.79	私	試掘			
266	平井町3157-87	100	48.00	公	立会			
267	南梅本町乙55-2	500	95.67	私	試掘			
268	鷹子町29-2	184	41.64	私	試掘			
269	福音寺町702他8筆	4,548		私	未			
270	北井門町219-1	197	24.07	私	試掘			
271	恵源町甲527	784	57.13	私	試掘			
272	平井町甲1726~乙416	72,000		公	未			
273	北高院町375-1	443	(8.46)	私	試掘			
274	朝生田町496-1	656	(17.87)	私	試掘			
275	南久米町183	422	(36.05)	私	試掘			
276	古三津3丁目15-7	126	9.97	私	試掘			
277	西石井町45-3	550		私	未			
278	道後北代1304-1	225	33.47	私	試掘			
279	南久米町749、米住町872-2	637	(38.30)	私	試掘	溝、土坑 弥生、須恵器	本格調査要	
280	納美1丁目7-20	213	(17.40)	私	試掘			
281	米住町915-1	411	36.30	私	試掘			
282	北久米町885-1	864	(33.06)	私	試掘	包含層、溝 土師器	本格調査要	
283	小板5丁目14-1、2	960	(25.28)	私	試掘			
284	米住町568-2	238	40.10	私	試掘			
285	平井町1639-1他12筆	300	(67.50)	公	立会			
286	桑原6丁目712-10	279	35.74	私	試掘			
287	道後緑台359-1	995	(39.95)	私	試掘			
288	鷹子町67-5	220	42.94	私	試掘			
289	今在家町221-3	1,471	(31.20)	私	試掘			
290	鷹子町109-15	123	46.18	私	試掘			
291	枝松6丁目6-24	327	(27.50)	私	試掘			
292	北久米町886-1	193	32.92	私	試掘	包含層、土坑 須恵器、土師器	本格調査要	
293	桑原1丁目~櫛塚4丁目	446		公	未			
294	福音寺町538-513	48	(25.60)	公	立会			
295	福音寺町513~444	88	(26.75)	公	立会			
296	桑原6丁目~1丁目	491		公	未			

No.	所 在 地	面積(m ²)	標高(m)	調査目的	調査方法	包含・遺構	遺 物	備 考
297	南久米町351-1他3筆	377	(38.41)	私	試掘			
298	久万ノ台1341-1他1筆	343	26.02	私	試掘			
299	今在家町71-1	720	(31.78)	私	試掘			
300	今在家町440-1他1筆	523		私	既済			H6-8にて試掘完了 済み
301	魔子町34-2	287	42.85	私	試掘			
302	山越1丁目282-18	200	18.67	私	試掘			
303	下伊古町1382-1	1,328	(146.30)	私	試掘			
304	魔子町4-4	1,316	(41.74)	公	試掘			
305	北久米町441-南久米町459	1,111	(35.11)	公	立会			
306	北斎院町454-1	332	(7.72)	私	試掘			
307	清水町3丁目29他1筆	311	24.54	私	試掘			
308	今在家町420-51	221	30.77	私	試掘			
309	道後北代6-11	651	32.05	私	試掘			
310	道後町2丁目990-4	363	35.46	私	試掘			
311	桑原7丁目1-40	131	33.22	私	試掘			
312	桑原4丁目417-6	200	39.82	私	試掘			
313	北久米町451-3	168	34.73	私	試掘			
314	平井町2169-26	341	59.50	私	試掘			
315	北斎院町951-1他3筆	2,269	(8.89)	私	試掘			
316	北井門町254-2、-5	662	(23.24)	私	試掘			
317	小坂5丁目300-1、-2	469	(23.95)	私	試掘			
318	衣山4丁目150-3	150	(76.49)	私	試掘			
319	山越2丁目656-6	154	17.60	私	試掘			
320	西長戸町639-1他6筆	4,543		公	未			
321	桑原1丁目989-2	149	38.50	私	試掘			
322	南久米町766-1	963	(36.49)	私	試掘	包含層、柱穴	弥生、須恵器	本格調査要
323	今在家町447-3他1筆	978	(29.53)	私	試掘			
324	今在家町448	671	(29.46)	私	試掘			
325	桑原4丁目430-1	162	(36.60)	私	試掘			
326	篠原2丁目288-1	158	20.72	私	試掘			
327	道後喜多町1018-9	175	(34.00)	私	試掘			
328	西石井町384-東石井町443	191		公	未			
329	上野町平808-63	180		私	未			
330	魔子町86-2	303	(43.89)	私	試掘			
331	平井町平2426-5	178	(62.70)	私	試掘			
332	桑原3丁目912-8	166	(39.85)	私	試掘			
333	安城寺町96-3他1筆	1,088		私	既済			H7-228-348にて試掘 完了済み
334	太山寺町平434-3	499	(3.92)	私	試掘			
335	久万ノ台724-3	159	14.96	私	試掘			
336	来住町609	456	40.40	私	試掘			

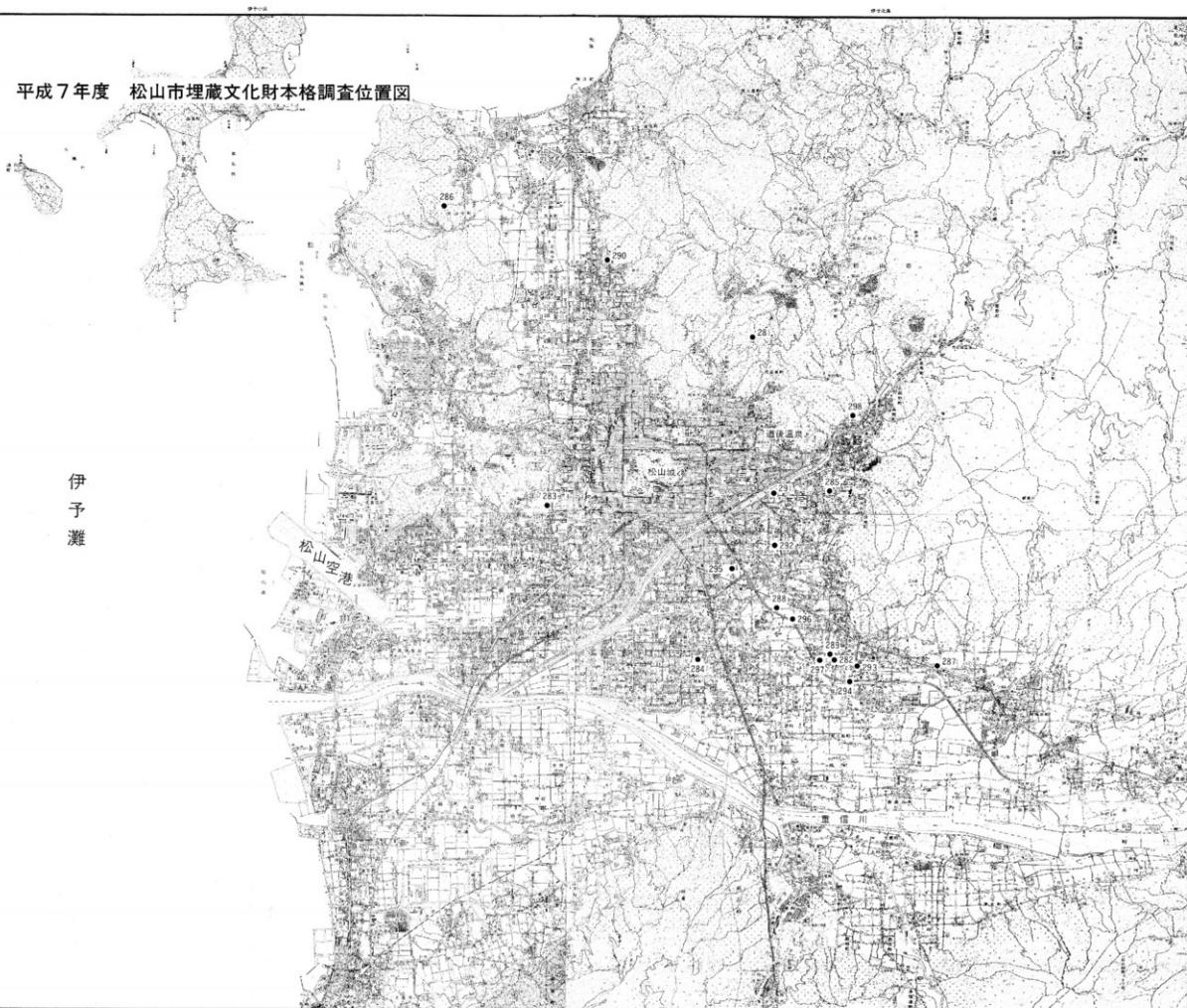
No	所 在 地	面積(m ²)	標高(m)	調査目的	調査方法	包含・遺構	遺 物	備 考
337	畠寺町丙1-1他8筆	9,717	(67.50)	私	試掘	周溝	埴輪、須恵器	本格調査要
338	衣山3丁目455-11他1筆	224	(23.34)	私	試掘			
339	平井町甲3157-204	256	(49.30)	私	試掘			
340	北井門町290	120	(23.59)	私	試掘			
341	辻町342-1他5筆	1,100	(15.55)	私	試掘			
342	下伊台町乙188-1他95筆	250,840		私	既済			4.5-26にて本格調査要 面積変更申請、廻戸廻付道路
343	下伊台町乙193-1他50筆	53,329		私	未			
344	東野4丁目甲577-1他6筆	1,946	(60.55)	私	試掘			

平成7年度 松山市埋蔵文化財本格調査一覧

No	遺跡名	所在地	調査目的	時代
281	瀬戸風岬遺跡	下伊台町乙188-1外	緊急	古墳
282	久米高畠遺跡24次調査地	南久米町723-1(一部)	国補	弥生・古墳
283	古照ゴウラ遺跡5次調査地	南江戸3丁目912外	緊急	中世
284	石井幼稚園遺跡2次調査地	西石井町4-1	#	弥生～中世
285	東野お茶屋台遺跡5次調査地	東野5丁目甲835-1外	#	古墳・近世
286	太山寺経田遺跡3次調査地	太山寺町乙694-2外	#	弥生・古墳
287	下苅原遺跡	平井町甲2389外	国補	古墳
288	乃万の裏遺跡2次調査地	北久米町773-1外	緊急	弥生～中世
289	久米高畠遺跡25次調査地	南久米町1163	国補	弥生・古墳
290	谷町遺跡	谷町371	#	弥生～中世
291	梅味高木遺跡4次調査地	梅株2丁目278-1・5	緊急	弥生～近世
292	桑原田中遺跡3次調査地	桑原5丁目559-2・4	#	中世
293	来住町遺跡6次調査地	来住町533-1	国補	弥生～中世
294	来住町遺跡7次調査地	来住町235-1	#	古墳～中世
295	釜ノ口遺跡8次調査地	小坂4丁目28-1-1外	緊急	弥生・中世
296	北久米淨蓮寺遺跡5次調査地	北久米町703	#	古墳・中世
297	久米高畠遺跡26次調査地	来住町888-1、889-1、887-4	#	绳文～中世
298	溝辺2号墳	溝辺町乙437	#	古墳

主な遺構、遺物等	対象面積(m ²)	屋外調査期間	No.
	257,349	H 7、4、4～調査中	281
竪穴住居址、掘立柱建物跡、土坑、弥生、須恵	996	H 7、4、4～H 7、5、31	282
掘立柱建物跡、土坑墓、井戸、土師、陶磁器、鉄鏃	6,319	H 7、4、5～H 7、9、22	283
竪穴住居址、掘立柱建物跡、土坑、弥生、陶器	884	H 7、4、24～H 7、7、4	284
横穴式石室、塙、排水路、須恵、耳環、土師	3,518	H 7、6、1～H 7、11、30	285
土坑、溝、弥生、須恵、土師、石斧	2,500	H 7、6、1～H 7、8、7	286
竪穴住居址、掘立柱建物跡、土坑、溝、須恵、土師	1,896	H 7、6、19～H 7、9、27	287
掘立柱建物跡、溝、性格不明遺構、弥生、須恵、勾玉	1,574	H 7、7、17～H 7、11、24	288
掘立柱建物跡、溝、土坑、弥生、石包丁、石斧	843	H 7、7、17～H 7、8、31	289
竪穴住居址、溝、柱穴、弥生、須恵、土師	701	H 7、9、1～H 7、10、26	290
桶列、土坑、自然流路、弥生、須恵、土師、陶磁器	426	H 7、10、11～H 7、12、11	291
掘立柱建物跡、土坑、土師、瓦器、鐵貨	896	H 7、11、10～H 8、1、12	292
溝、性格不明遺構、柱穴、鋤跡、弥生、須恵	385	H 7、12、18～H 8、2、9	293
竪穴住居址、掘立柱建物跡、溝、須恵、土師	1,574	H 7、12、11～H 8、3、29	294
竪穴住居址、掘立柱建物跡、貯藏穴、弥生、破鏡	1,486	H 7、12、11～H 8、3、21	295
竪穴住居址、掘立柱建物跡、溝、須恵、土師	254	H 8、2、15～H 8、3、29	296
	1,326	H 8、3、21～調査中	297
竪穴式石室、排水溝、須恵、土師	2,732	H 8、1、16～H 8、1、23	298

平成 7 年度 松山市埋蔵文化財本格調査位置図



自然科学分析報告

平成5年度に調査を行った辻町遺跡2次調査地では5世紀後半のカマドを伴った堅穴住居址2棟や、5世紀末～6世紀前半の祭祀を伴うとみられる土器群が数箇所に点在する他、焼土や土坑を検出している。この調査に際し、各遺構の堆積土の性質からそれらが営まれた周辺環境や性格を推定する際の参考データーとする目的として、㈱古環境研究所に委託し、堅穴住居址、土坑、土器群（SX1）など、各遺構の土壤サンプルの植物珪酸体分析、及び土器群（SX1）から出土した種実の同定を行った。

これは辻町遺跡2次調査地の報告書（平成7年度発行）に掲載できなかった自然科学分析調査報告書を本年報中をお借りし掲載するものである。

I. 辻町遺跡2次調査の植物珪酸体分析

㈱古環境研究所

1. 試料

試料は、SB1、焼土1、SX1、SK1から採取された5点である。

2. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オバール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾（105℃・24時間）
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスピース添加（直径約40μm・約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- 5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピース個数に、計数された植物珪酸体とガラスピース個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5} g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。

3. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：イネ、キビ族型、ジュズダマ属、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族型、シコクビエ？、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、タケ亜科（未分類等）

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

クスノキ科（バリバリノキ？）、その他

4. 考 察

（1）S B 1

5世紀後半とされる竪穴住居址の床面付近の土壤（試料1、2）について分析を行った。その結果、イネおよびイネ科植物の細胞組織片（写真5）が多量に検出され、イネの機動細胞に由来する植物珪酸体も少量検出された。これらのことから、同住居址の床面にはイネ藁などが散かれていた可能性が考えられる。

（2）焼土 1

6世紀前半とされる9層上面から検出された焼土1（試料3）について分析を行った。その結果、イネが5,500個／gと多量に検出された。また、シコクビエとみられる植物珪酸体（写真2）も検出された。これらのことから、イネ藁などが燃料として利用されていた可能性が考えられる。

（3）S X 1、S K 1

9層上面の窪地（S X 1、試料4）および土坑（S K 1、試料5）について分析を行った。その結果、ネザサ節型や棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族型も比較的多く検出された。またイネが4,000個／g前後と比較的高い密度で検出され、ヨシ属、ススキ属型、クスノキ科（バリバリノキ？）なども検出された。また、S K 1ではジュズダマ属も少量検出された。

これらのことから、当時は遺構周辺で稲作が行われており、そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したものと推定される。また、周辺はネザサ節などのタケ亜科植物を主体としてススキ属なども見られるイネ科植生であり、クスノキ科などの樹木も見られたものと推定される。ジュズダマ属には食用や薬用となるハトムギが含まれるが、現時点では栽培種と野草のジュズダマとを完全に識別するには至っていない。ただし、S X 1ではハトムギの種実が検出されている（第II章）ことから、ここで検出されたものもハトムギに由来する可能性が高いと考えられる。

参考文献

- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告、第31号、p.70-83。
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法一。考古学と自然科学、9、p.15-29。
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査一。考古学と自然科学、17、p.73-85。

表Ⅰ 汗町遺跡2次調査地の植物珪酸体分析結果
検出密度(単位: ×100個/g)

分類群＼試料	1	2	3	4	5
	S B1	S B1	焼土1	S XI	S K1
イネ科					
イネ	8	8	55	37	40
キビ族型		8			
ジユズタマ属					8
ヨシ属	16	15		15	
ススキ属型	16	23	16	22	24
ウシクサ族型	16	53	39	127	40
シコクビエ?			8		
タケ亜科					
ネザサ節型	55	174		232	230
クマザサ属型		8			
メダケ節型				15	8
未分類等	62	91		232	103
その他のイネ科					
表皮毛起源	16	15	8	52	8
棒状珪酸体	132	174	39	448	79
未分類等	210	272	62	695	214
樹木起源					
クヌキ科(バリバリノキ?)				15	
その他					8
植物珪酸体総数	531	841	227	1890	762

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m²・cm)

イネ	0.23	0.22	1.60	1.10	1.17
ヨシ属	0.98	0.95		0.94	
ススキ属型	0.19	0.28	0.19	0.28	0.30
ネザサ節型	0.26	0.83		1.11	1.11
クマザサ属型		0.06			

*試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

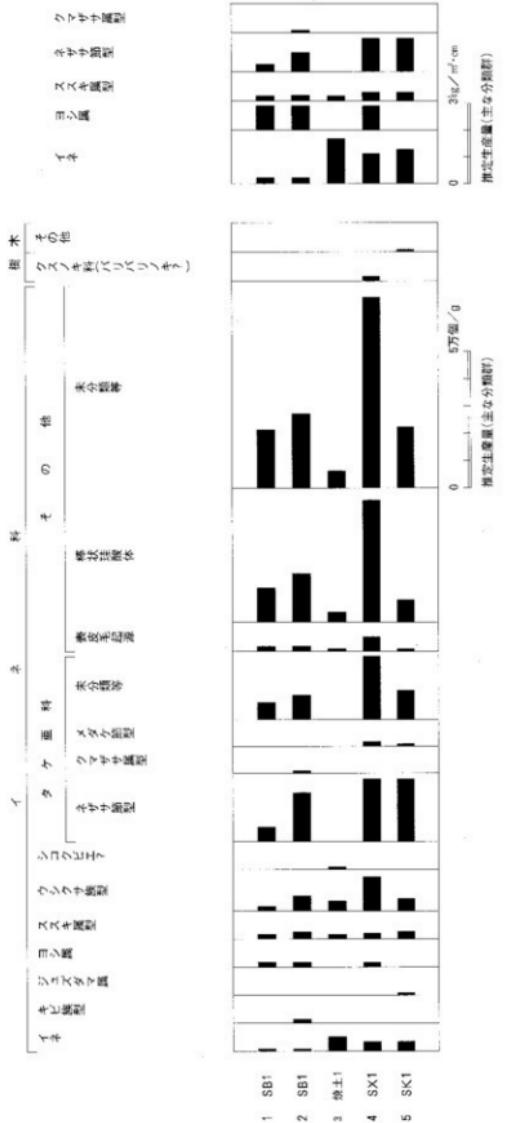
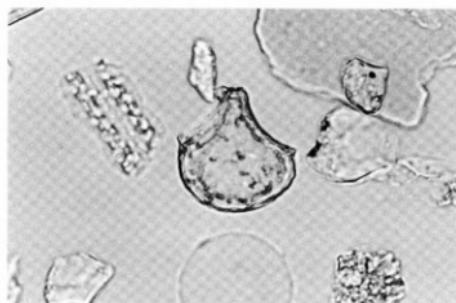
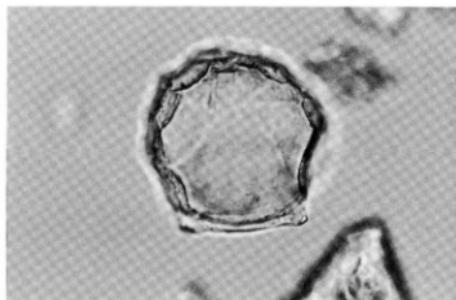


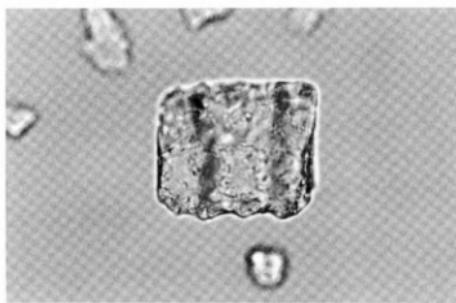
図1 沢町遠野2次林地の植物生量分析結果



1. イネ (試料 1)



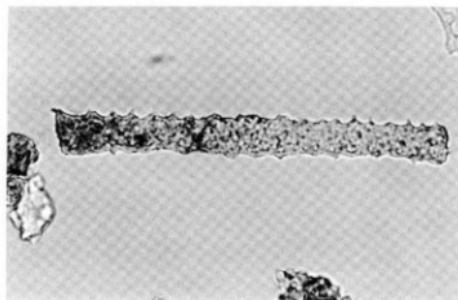
2. シコクビエ (試料 3)



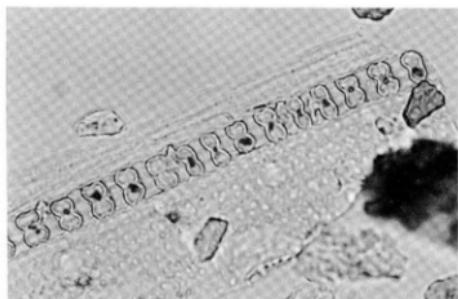
3. ネザサ節型 (試料 2)

0 50 100 μ m

図 2 植物珪酸体の顕微鏡写真 (I)



4. 棒状硅酸体（試料 I）



5. イネの細胞組織片（試料 I）



6. イネ科の細胞組織片（試料 I）



図 3 植物硅酸体の顕微鏡写真 (2)

II. 辻町遺跡 2次調査における種実同定

1. 試料

試料は、6世紀前半とされるS X 1から検出されたNo.1～No.8の8点の種実である。

2. 方法

肉眼及び双眼実体顕微鏡を用いて、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。

3. 結果

同定結果を次表に示す。

試料No.	分類群(学名/和名)	部位	粒数	長さ×幅
No.1	<i>Coix lacryma-jobi</i> L. var. <i>ma-yuen</i> Stapf	ハトムギ	1	(mm) 8.3×5.8
No.2	<i>Coix lacryma-jobi</i> L. var. <i>ma-yuen</i> Stapf?	ハトムギ?	1	6.7×4.6
No.3	<i>Coix lacryma-jobi</i> L. var. <i>ma-yuen</i> Stapf?	ハトムギ?	1	6.8×5.1
No.4	<i>Coix lacryma-jobi</i> L. var. <i>ma-yuen</i> Stapf	ハトムギ	1	6.8×5.8
No.5	<i>Coix lacryma-jobi</i> L. var. <i>ma-yuen</i> Stapf?	ハトムギ?	1	6.5×4.5
No.6	<i>Coix lacryma-jobi</i> L. var. <i>ma-yuen</i> Stapf?	ハトムギ?	1	5.3×4.0
No.7	<i>Coix lacryma-jobi</i> L. var. <i>ma-yuen</i> Stapf?	ハトムギ?	1	7.0×3.8
No.8	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	1	
		核片		

1) ハトムギ *Coix lacryma-jobi* L. var. *ma-yuen* Stapf 果実 イネ科

No.1は壺形の苞穎の付いた状態であり、No.4は苞穎のとれた果実である。苞穎は黒色で梢円形を呈し、表面に縱方向の微細な隆起が走る。果実は炭化して黒色を呈し広楕円形で、溝状のくぼみがある。

No.2、3、5～7は欠損、発泡しておりやや形態も長く、明らかなハトムギとは同定できなかった。

2) モモ *Prunus persica* Batsch 核片 バラ科

破片である。炭化しているため黒色を呈す。表面にはモモ特有の隆起がある。表面がなめらかで多孔にならず、西日本を中心に弥生時代以降普通に検出されるタイプのモモ核である。

参考文献

金原正明・金原正子・粉川昭平(1990)和爾遺跡出土種実と花粉分析、天理市和爾・森本遺跡第5次発掘調査報告、奈良県遺跡調査概報1989年度、奈良県立橿原考古学研究所、p.20-26.

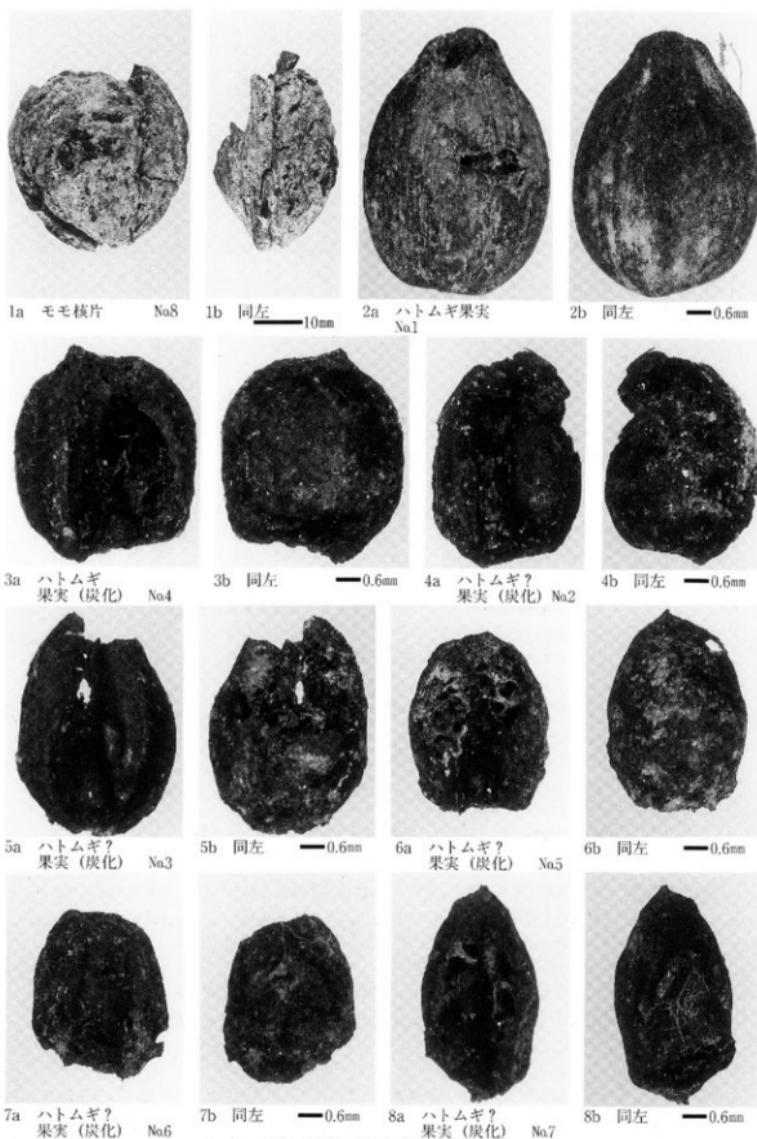


図4 江町遺跡2次調査地出土種実

保存処理事業

保存処理室には、松山市内の遺跡から発掘調査によって出土した遺物、特に木製品、鉄製品などの劣化を防ぐための保存処理が必要な貴重な遺物が運び込まれる。これらの遺物は必要に応じて事前調査（材質、構造、関連資料の比較検討）を行ったのち、木製品はPEG含浸、鉄製品は減圧樹脂含浸などの手法を用いて保存処理を行っている。これらの保存処理方法は年報V・VIを参照されたい。

処理室では遺物の取り上げや、土層の剥ぎ取り転写などの作業も発掘現場に出向き行っている。

1. 木製品の処理

平成6年5月より含浸処理を行っていた木製品（来住廬寺15次調査地・古墳ゴウラ遺跡5次調査地その他の出土）が平成7年5月に処理が完了した。処理の結果は良好である。

平成7年9月に処理水槽170型に木製品（来住廬寺18次調査地・久米窪田森元遺跡3次調査地その他出土）を漬け込み処理に入っている。処理完了は平成8年10月の予定である。

2. 鉄製品の処理

平成7年度発掘調査（本年報掲載）により出土した鉄製品は、現在、事前調査や前処理（脱水、脱塩作業）を行っており、これらの行程が終り次第、減圧樹脂含浸を行う。

3. 構造・遺物の取り上げ

平成8年3月に釜ノ口遺跡8次調査地検出の1号貯蔵穴にて遺物の取り上げを行った。遺物は、土圧により押し潰された状態の土器である。土器は構造の埋土とともに硬質ウレタンフォームで包み込み、取り上げ後処理室に搬入した。現在この土器は樹脂で固めながら、徐々に土を取り除いている。

4. 土層の剥ぎ取り転写

今年度は作業を行っていない。前年度に久米高畠遺跡23次調査地検出の大溝にて土層の剥ぎ取りを行ったので報告しておく。

作業工程は、剥ぎ取りを行う土層面に合成樹脂を塗膜したあと、合成樹脂を強化するために布（ガーゼ）を貼り付ける。樹脂塗膜が乾燥、硬化したあと土層面より剥ぎ取った。

この転写法は発掘調査終了後も土層の実物が観察できることや、展示の場合に臨場感に溢れた好資料となるものである。

(池田・山本)



写真1 遺物の取り上げ状況（釜ノ口遺跡8次調査地）

平成7年度

啓蒙普及事業

平成7年度の啓蒙普及事業

当埋蔵文化財センターは、松山市内における埋蔵文化財の発掘調査・研究とともに、出土遺物や記録資料などを収藏し、保管している。発掘調査終了後は、遺跡の発掘調査報告書・パンフレットなどを作成したり、随時現地説明会などを開催することにより、広く一般に公開している。

また附属の考古館は地域文化の発展・向上並びに調査研究活動の振興を図ることを目的として設置されたものであり、展示会や一般対象の遺跡めぐり・講演会、小学生対象の体験学習セミナーを開催するなど、市民一人ひとりの生涯学習を援助しながら、埋蔵文化財保護思想の啓蒙普及に努めている。

①展示活動

常設展示は、「海を媒体とした文化交流の中継地点としての伊予文化の独自性と、そこに生きた人々の姿」を解明することを基本コンセプトとしており、「見る」「聞く」といった静的な展示だけではなく、「触れる」「考える」という動的で、かつ立体的な展示を心がけている。展示品は、松山平野で出土した考古資料約8,200点である。

①発掘速報展

発掘速報展「むかし・昔のまつやまを掘る」は、松山市内で相次いで発見された重要な遺跡・遺物を速報的に紹介したり、また新たに発掘調査報告書が刊行された遺跡について、写真やイラスト・図面を交えながら紹介するものである。

平成7年度は、前年度に発掘調査された遺跡のなかで、東本遺跡4次調査を含む9遺跡を取り上げその出土遺物64点を展示了。

②発掘写真展

発掘写真展「むかし・昔のまつやまを撮る」は、広く一般市民に埋蔵文化財に対して目を向けてもらうため、発掘速報展にて展示した写真パネルを松山市庁舎本館1階ロビーに場所を移して展示するものである。

平成7年度は、東本遺跡4次調査出土の破鏡など9遺跡11点の写真パネルを展示了。

③夏休み体験学習セミナー作品展

夏休み体験学習セミナー作品展「小学生が作った！描いた！土器作品展」は、松山市内の小学校6年生が体験学習セミナーで製作した土器や、写生した土器の絵を展示するものである。

なお平成7年度の作品展は、博物館実習生8名の手によって、参加者64人の製作した土器120点及び絵50点が展示了された。

④特別展

特別展は、ひとつのテーマのもとに県内外から資料を借用し、一定期間内で系統的に展示を行うものである。平成7年度は「瀬戸内の初期農耕」と題して北部九州・瀬戸内・畿内における農耕文化の伝播の様子について、縄文時代晚期から弥生時代前期の土器を中心と展示を展開した。



写真1 特別展「瀬戸内の初期農耕」

⑤企画展・移動写真展

企画展は、7年度より古代人の道具にスポットを当て、松山市内における地域色を探ろうというものである。平成7年度は「むかし・昔の器たち」と題して「土器・土製品」にテーマを絞り、土器の誕生から古墳時代の土師器・須恵器に至るまでの変遷を展示により展開した。

なお、この企画展で展示した写真パネルを松山市庁舎本館1階ロビーに場所を移し、移動写真展「むかし・昔の器たち」を開催した。

⑥「古代の創造物」展

愛媛新聞紙上にて、平成7年10月から翌年2月にかけて20回シリーズで松山市内出土の主要遺物について紹介していた遺物を、実際に展示したものである。

テ　ー　マ	会　期	会　場	入館者数
移動写真展 「よみがえる古代の松山」	平成7年3月23日(祝) ～4月7日(日)	市庁舎本館 1階ロビー	――
発掘速報展 「むかし・昔のまつやまを掘る」	平成7年4月22日(土) ～5月26日(日)	特別展示室	3,939人
発掘写真展 「むかし・昔のまつやまを撮る」	平成7年6月7日(祝) ～6月16日(日)	市庁舎本館 1階ロビー	――
夏休み体験学習セミナー作品展 「小学生が作った！ 摂いた！ 土器作品展」	平成7年8月12日(土) ～8月27日(日)	特別展示室	423人
特別展 「瀬戸内の初期農耕」	平成7年10月21日(土) ～11月26日(日)	特別展示室	2,293人
「古代の創造物」展 (愛媛新聞社後援)	平成8年2月6日(祝) ～2月12日(日)	特別展示室	279人
企画展 「むかし・昔の器たち～伊予古代人の造形美～」	平成8年2月17日(土) ～3月20日(日)	特別展示室	1,728人
移動写真展 「むかし・昔の器たち～伊予古代人の造形美～」	平成8年3月26日(祝) ～4月5日(日)	市庁舎本館 1階ロビー	――

2. 教育普及活動

教育普及活動としては、職員の資質向上を目的にした調査研究会と、一般市民を対象にした埋蔵文化財保護思想の啓蒙を目的とした講演会・夏休み体験学習セミナーなどがある。

①調査研究会

発掘現場における調査方法や報告書作成のために各分野での第一人者を招へいし、助言を頂き、職員の資質の向上をめざしている。平成7年度は2人の研究者に招へいの機会を得て、ご指導をお願いした。(敬称略)

テ　ー　マ	日　時	会　場	講　師
西日本における 弥生時代後期の交流	平成7年6月29日(木)	講堂	広島県立歴史民俗資料館 鈴香川県埋蔵文化財調査センター 当センター 伊藤 実 大久保徹也 梅木 謙一

②講演会

平成7年度は、発掘調査報告会・特別展記念シンポジウム・企画展記念講演会を開催した。発掘調査報告会「むかし・昔のまつやまを語る」は、前述の発掘速報展開催期間中に2回6名の発掘担当者ほかによる報告が行われた。

次に特別展記念シンポジウムは、特別展開催を記念して開催された。特に、近年各地で発見されている初期農耕を証明する遺跡を取り上げ、農耕文化の伝播の様相を多角度から究明がなされた。

また企画展記念講演会は、企画展の開催に合わせ、「須恵器のはなし」と題して田辺昭三先生にご講演をお願いした。(敬称略)



写真2 特別展記念シンポジウム

テーク	日 時	会 場	講 師	聴講者数
発掘調査報告会 「むかし・昔のまつやま を語る」	平成7年4月22日(土)	講堂	当センター調査係長 当センター調査員 +	田城 武志 河野 史知 橋本 雄一
	平成7年5月13日(土)	講堂	当センター調査員 +	高尾 和長 栗田 茂敏 加島 次郎
特別展記念シンポジウム 「瀬戸内の初期農耕」	平成7年10月22日(日)	講堂	愛媛大学法文部教授 愛媛大学教務部教務課 兵庫県教育委員会 当センター調査員	下條 信行 田崎 博之 山本 三郎 栗田 茂敏
企画展記念講演会 「須恵器のはなし」	平成8月2月17日(日)	講堂	京都造型芸術大学教授 田辺 昭三	110人

③夏休み体験学習セミナー「むかし探検隊」

第5回目を迎えた平成7年度夏休み体験学習セミナーは、「むかし探検隊」と銘打って「土器コース」と「遺跡コース」の2コースを設定した。前者は、從来どおり土器の製作を通して古代人の苦労や知恵を学ぼうというもので、子供たちの社会科學習の一助とするだけではなく、自主性と創造力を養うことをおねらいとしている。

また後者が7年度より新しく設定されたコースで、実際の発掘現場での発掘調査を通して、遺跡的重要性を感じてもらうためのものである。

テーク	日 時	会 場	参 加 者 数
土器コース 「土器を作ろう！描こう！」	平成7年7月22日(土)・8月5日(土)	講堂・屋外	80人
遺跡コース 「むかしを掘ろう！触れよう！」	平成7年8月10日(火)	発掘現場	50人

④遺跡めぐり

遺跡めぐりは、地域に所在する埋蔵文化財を参加者に身近に感じていただくことを目的として開催している。7年度春季には松山市内北部の古墳を中心に、次いで秋季には愛媛県中予地域の古墳を中心に見学を行った。

テ　ー　マ	日　時	主な見学先	参加者数
「むかし・昔の まつやまを歩く」	平成7年5月18日(木)	松山市石手寺古墳群・谷町蓮華寺所在の舟形石棺・大丸山古墳	45人
「むかし・昔の えひめを歩く」	平成7年10月29日(金)	上浮穴郡美川村上黒岩岩陰遺跡・伊予郡砥部町大下田古墳群	38人

⑤現地説明会

平成7年度は、合計5ヶ所の遺跡において現地説明会を開催した。こうした遺跡の見学を通してより一層埋蔵文化財への興味・関心を持ってもらうため、開催するものである。中でも来住庵寺周辺の久米高畠遺跡や来住町遺跡などは、当時の政治的中心地であったとされる場所に近く、多くの強い関心が注がれた。



写真3 釜ノ口遺跡8次調査地現地説明会

遺跡名	日 時	内 容	見学者数
久米高畠遺跡24次調査	平成7年5月27日(土)	弥生時代の長方形土坑7~10基や古墳時代後期の竪穴式住居址3棟、掘立柱建物址数棟など。	100人
石井幼稚園遺跡2次調査	平成7年6月27日(火)	弥生時代後期の貯蔵穴1基や古墳時代中期の竪穴式住居址1棟、古代~中世の掘立柱建物址3棟など。	40人
東野お茶屋台遺跡5次調査	平成7年10月28日(土)	小石室を伴い、改築痕跡がみられる6世紀後半の横穴式石室や、江戸時代の庭園水路など。	300人
来住町遺跡6・7次調査	平成8年2月17日(土)	(6次)中世以降の土地の地割りと考えられる溝と、それに平行する耕作痕。(7次)7世紀初頭から中葉までの変遷過程をたどることができる集落跡。	80人
釜ノ口遺跡8次調査	平成8年3月2日(土)	弥生時代の拠点集落で、花弁形住居・焼失住居を確認し、溝内より破縫が出土。また後期の貯蔵穴より植物遺体などが出土。	50人

⑥まいぶん映画会

まいぶん映画会は、一般観覧者を対象としており、第2・4土曜日及び毎週日曜日、祝祭日の午前10時・午後1時・3時の3回上映している。上映するビデオの内容は、考古学関係のわかりやすいアニメーションから専門的なものまで幅広い。

⑦博物館実習

平成6年度より博物館学芸員資格の取得を希望する人のための博物館実習を実施している。7年度は、8月1日~6日の日程で、愛媛大学生7名・東京学芸大学生1名の合計8名が受講し、発掘調査・写真撮影・保存処理などのカリキュラムを受講した。

一方8月5日には、当センター主催の体験学習セミナー（土器焼成など）に参加し、翌6日には12日から開催の、夏休み体験学習セミナー作品展のために焼成された土器や写生した土器の絵を展示した。

3. 広報・出版活動

広報・出版活動としては、当館主催の展示会・講演会などを開催する際に、多くの観覧者を募るためにポスター・パンフレットを発刊したり、発掘調査を行った遺跡について、発掘調査報告書を刊行している。研究者はもとより、一般市民においても、これらの出版物を大いに活用していただくことで、埋蔵文化財保護の啓蒙普及に役立つものと思われる。

なお、特別展「瀬戸内の初期農耕」のポスターは、愛媛広告協会主催の第15回愛媛広告賞印刷広告部門最優秀賞を受賞した。



写真4 特別展「瀬戸内の初期農耕」ポスター

①発掘調査報告書

報告書名	発行日	対象	版型・頁	部数
松山市文化財調査報告書49 松山大学構内遺跡II	平成7年3月 (平成6年度分)	一般	B5本 文 372頁 一覧表 134頁 写真図版 125頁	1,000
松山市文化財調査報告書50 福音小学校構内遺跡・弥生時代編	平成7年9月	一般	B5本 文 159頁 写真図版 42頁	1,000
松山市文化財調査報告書51 辻町遺跡・2次調査地一	平成7年11月	一般	B5本 文 100頁 写真図版 44頁	1,000
松山市文化財調査報告書52 福音寺地区の遺跡	平成8年3月	一般	A4本 文 412頁	1,000
松山市文化財調査報告書54 枝松・東本遺跡4次調査―本文編―	平成8年3月	一般	A4本 文 409頁	1,000
松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ (平成6年度)	平成7年9月	一般	A4本 文 96頁	1,000

②展示会関係出版物

出版物名	発行日	対象	版型・頁	部数
発掘速報展 案内状		一般	ハガキ	3,000
発掘速報展 パンフレット	平成7年4月	一般	B5・9頁	3,000
発掘調査報告会(1) レジメ		聴講者	B4・6頁	150
発掘調査報告会(2) レジメ	平成7年5月	聴講者	B4・15頁	150
遺跡めぐり(1) パンフレット	平成7年5月	参加者	B5・34頁	50
夏休み体験学習セミナー パンフレット	平成7年7月	参加者	B5・10頁	100
特別展 案内状		一般	ハガキ	5,000
特別展 ポスター		一般	B2	500
特別展 リーフレット	平成7年10月	一般	B5	5,000
特別展 パンフレット		一般	B5・4頁	3,000
特別展記念シンポジウム レジメ		聴講者	B4・20頁	300
遺跡めぐり(2) パンフレット	平成7年11月	参加者	B4・29頁	50
企画展 案内状	平成8年2月	一般	ハガキ	5,000
企画展 パンフレット		一般	B5・8頁	3,000

4. 収集・保管活動

平成7年度は、静岡市在住の濱田晃世氏より松山市横谷古墳出土の資料の寄贈を受けた。これらの資料はかつて大正7年4月に濱田齋氏により採集されていたもので、その経緯などについては『考古学雑誌』第30巻第7号に詳しく紹介されている。

寄贈資料名	点数	出土地
五鉢鏡	1	
円筒埴輪（須恵質）	1	
円筒埴輪	1	
須恵器 長頸壺	1	松山市横谷古墳
須恵器 高环脚部	1	
鉄器 刀子	1	



写真5 松山市横谷古墳出土の考古資料

当センターでは、主催事業だけではなく、考古学関連団体主催のシンポジウムや研究会の会場としても利用してもらいたい、広く一般市民にも積極的に参加を呼びかけている。特に、愛媛大学法文学部下條信行教授を会長とした瀬戸内海考古学研究会が毎月第4土曜日に定期的に開催している。(敬称略)

回	テーマ	日 時	会場	講 師
22	「愛媛の古墳研究史」	平成7年4月15日(土)	講堂	日本考古学会会員 名本二六雄
23	「四国の道路遺構」	平成7年5月27日(土)	講堂	瀬戸内海考古文化研究センター准教授 柴田 昌児
24	「久米官衙遺跡群における使用尺度の検討」	平成7年6月24日(土)	講堂	当センター調査員 橋本 雄一
25	「瀬戸内における土器製塙の諸問題」	平成7年7月29日(土)	講堂	愛媛大学法文学部助教授 村上 基通
27	「愛媛における横穴式石室の変遷」	平成7年9月23日(土)	講堂	当センター調査員 柴田 茂敏
28	「松山市・葉佐池古墳の調査」	平成7年10月28日(日)	講堂	当センター調査員 加島 大郎
29	「愛媛における横穴式石室の系譜」	平成7年11月25日(日)	講堂	当センター調査員 柴田 茂敏
31	「瀬戸内の物流の原形」	平成8年1月27日(日)	講堂	瀬戸内海考古文化研究センター准教授 谷若 健郎
32	「伊予の高環」	平成8年2月24日(土)	講堂	当センター調査員 梅木 勉一
33	「古代の織物」	平成8年3月23日(土)	講堂	東京国立博物館 沢田むつ代

6. 職員研修・会議

当センターでは、毎年、奈良国立文化財研究所で実施されている発掘技術者研修をはじめとして、各種研修・行事に参加している。こうした研修や会議に積極的に参加することにより、職員の資質向上と業務の円滑な推進を図っている。

研修・会議名	開催地	日程	参加者数
埋蔵文化財発掘技術者専門研修 「遺跡探査課程」	奈良市	平成7年5月8日～5月18日	1名
全国埋蔵文化財法人連絡協議会 第16回総会	名古屋市	平成7年6月8・9日	1名
埋蔵文化財発掘技術者一般研修 「一般課程」	奈良市	平成7年7月4日～8月9日	1名
埋蔵文化財写真技術研究会	奈良市	平成7年7月8日	1名
全国埋蔵文化財法人連絡協議会 研修会	高知市	平成7年8月10・11日	2名
埋蔵文化財発掘技術者専門研修 「遺跡測量課程」	奈良市	平成7年9月20日～10月18日	1名
全国埋蔵文化財法人連絡協議会 コンピューター等研究委員会	鳥取県	平成7年9月22日	2名
公益法人の実践簿記会計講座 (基本コース)	高松市	平成7年9月27日	1名
全国埋蔵文化財法人連絡協議会 中国・四国・九州ブロック会議	松山市	平成7年11月9・10日	9名
四国埋蔵文化財法人実務担当者会	徳島市	平成7年11月21・22日	2名
1995年保存科学研究集会	奈良市	平成8年2月9日	1名

7. 資料の貸出

当センターでは、各博物館や教育委員会主催事業の出品要望に応えるべく、可能な限りの資料の貸出を行っている。

貸出資料名(遺跡名)	点数	貸出目的(展示期間)	貸出先
弥生土器・甕 (来住寺遺跡15次調査)	3点	考古企画展「弥生のかたち」に出品するため(平成7年4月28日~6月11日)	広島県立歴史民俗資料館
弥生土器・大型器台 (釜ノ口遺跡)	1点	特別企画展「特殊器台とその時代」に出品するため(平成7年10月6日~11月19日)	広島県立歴史民俗資料館
須恵器・子持表御脚付壺 (溝辺1号墳)	1点	秋季特別企画展「装飾須恵器展」に出品するため(平成7年10月7日~11月26日)	愛知県陶磁資料館
円筒埴輪 (影浦谷1号墳) 盾形埴輪 (<i>n</i>) 須恵器・环蓋 (影浦谷2号墳) 須恵器・环身 (<i>n</i>) 須恵器・短颈壺 (<i>n</i>) 須恵器・広口壺 (<i>n</i>) 刀子 (<i>n</i>) 鉄鎌 (<i>n</i>) 土製丸玉 (<i>n</i>) 管玉 (<i>n</i>) ガラス小玉 (<i>n</i>) 須恵器・环蓋 (影浦谷3号墳) 須恵器・环身 (<i>n</i>) 須恵器・短颈壺 (<i>n</i>) 耳環 (<i>n</i>)	2点 1点 2点 1点 2点 1点 1点 1点 131点 5点 2点 1点 3点 1点 4点	松山市立姫山小学校開校記念式典に出品するため(平成7年10月30日~11月2日)	松山市立姫山小学校

松山市考古館 月別入館者数調

平成7年度(平成7年4月1日~8年3月31日)

月	開館数	一般	児童	累計	团体	团体	老	人	小中高生等 無料入館者	特別展等 無料入館者	入館者合	一日平均 入館者
4	26	268	146	45	0	86	708	231			1,484	57
5	25	372	176	50	5	42	1,856	354			2,855	114
6	26	178	73	170	89	43	391	57			1,001	39
7	26	130	39	60	0	2	0	314			545	21
8	27	266	190	73	28	3	95	175			830	31
9	25	217	44	132	13	53	0	77			536	21
10	25	386	150	310	96	69	838	186			2,035	81
11	24	437	88	195	176	92	67	225			1,282	53
12	24	119	29	34	0	43	0	35			260	11
1	21	127	28	0	0	2	0	119			276	13
2	25	259	45	0	0	12	133	337			786	31
3	26	273	50	76	0	14	744	340			1,497	58
計	300	3,032	1,058	1,145	409	461	4,832	2,450	13,387		45	

松山市埋蔵文化財調査年報 VIII

平成8年9月30日 発行

編集 松山市教育委員会
発行 〒790 松山市二番町4丁目7-2
TEL (089) 948-6605

財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター
〒791 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923-6363

印刷 明星印刷工業株式会社
〒790 松山市土居田500
TEL (089) 971-7111

